
ETERNAL CHILDREN ~ 永遠の子供達 ~

ラサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETERNAL CHILDREN ～永遠の子供達～

【Nコード】

N9709Z

【作者名】

ラサ

【あらすじ】

遠い未来、人類のほとんどが滅びを迎えた中、日本で唯一生き残った人間達の物語。人類の滅亡を防ぐために科学者シイナは閉鎖された空間「ドーム」で特別な少女マナを育て上げた。しかし、マナはかつて実験体として処分したはずのアルビノの少年ユウによってさらわれてしまう。

人類の滅亡を受け入れられないシイナの計画には、マナはどうしても必要だった。そして、マナをさらったユウにも、マナはどうしても必要だった…

逃げ場のない未来に取り残され、
翻弄される人間達がたどり着く先
は、希望か、それとも絶望か。

01（前書き）

内容はなんちゃってSFですが、少々ハードな展開や部分もあるので、お読みになる際は注意が必要です。

その部屋に、窓はなかった。

外部からの有害なものを全て遮断するよう作られたためである。空調の行き届いた完璧な空間に、換気としての役割を担う必要はなかった。

だが、観賞としての役割を補う代わりに、部屋の側面にはスクリーンパネルが窓を似せて張り巡らされ、外の景色を投影するようになっていた。もちろん、好みの景色に切り変えることも可能である。「綺麗ね——」

マナは無意識にそう呟いていた。

今彼女が見ているものは、そこに本当の窓が存在したならばそのままに映る、青い空だった。明るさを含んだ青に、はつきりとした大きな白い雲が形を変えながら流れていく。

このスクリーンから見る外界の景色を、マナはとても気に入っていた。それは、彼女の瞳がじかに見るこのない、決して触れることも感じることもないものだからだ。

マナの知っている世界は、この白い壁の中だけだ。彼女は太陽の光の下に立ったこともなければ、暗闇を照らす月光も、星の瞬きも見ることがない。草の間を抜けていく風に吹かれたこともなければ、柔らかな地面の感触も知らなかった。

識ることはあっても、感じることはない。

それがマナの全てだった。

「本当の風って、どんなものなのかしら。あんなに草を揺らして、もしそこにいたら、どんな感じがするのかしら」

最近、マナはよくそんな感慨に囚われる。この白い壁の向こうの、まだ本当に見たことのない世界へ出ていきたいと。

自分を育ててくれた優しいシイナは、外は人間の生きていけるところではないと教えてくれた。太陽が沈んで、一夜明ける前に、人

間は自然のもたらす暗闇の恐ろしさに耐え切れずに発狂しているのだと。実際にそれを試して、発狂して死んでしまった人間がいたということも記録に残っていると。

それを聞かされた時、幼いマナは泣いてしばらくは明かりを消して眠ることはできなかった。そして、太陽が沈んだ後の外の様子を見ることは、生まれてから十四年間、一度もなかった。

それでも、マナは外界に対する憧れを止めることはできなかった。スクリーンに映る外界の景色は穏やかな雰囲気を漂わせ、いつも以上に彼女の憧憬をかきたててやまない。

「——そうよ。太陽が沈むまでなら、いいんじゃないかしら。今度博士の機嫌がいい時に頼んでみよう」

マナがそんな風に心を飛ばしている間に、オートドアが開き、静かに部屋へ入ってきた人物がいた。

「マナ。もう時間よ。いらっしやい」

自分の名を呼ぶ声に、マナは振り返った。

「博士」

マナを呼んだのは、二十代後半の美しい女性だ。マナの育ての親とも言える。色素の薄い髪は襟足にとどくほどで切られて、少々男性的な感を与えている。年齢よりは若く見えるその面差しは、些か感情に乏しく、冷やかな美貌を際立たせていた。

対照的に、マナは腰までとどく黒髪を揺らして、少女らしいあどけない笑顔で、シイナのもとへとかけよる。大きな瞳が印象的に映るあどけない顔立ちは、無邪気さもそのまま表わしていた。

自分より大きなシイナを見上げるマナは、時には冷酷とさえ見えるその美貌が、自分に向けられるときは暖かく慈愛の深いものになるのを知っていた。透き通るような、感情に乏しい声も優しく響く。マナは母親に対する愛情を知らないが、劣らぬ想いでシイナを愛していた。この閉ざされた世界に存在する数少ない人間の中で、唯一彼女だけが同性であったことも、その理由と言えよう。

「博士、今日は何か起こりそうな気がするの。とても、不思議なこ

と」

「まあ。マナには隠し事はできないわ。何でもお見通しなのね」

「どうしたの、博士。何かあったの？」

好奇心を隠さずに、マナはシイナの腕に絡みついた。

「そうね。 学習 が終わったら教えてあげるわ」

「何なの、博士。隠さないで教えて」

「それは見てのお楽しみよ。さあ。行きましょう」

二人は部屋を出て、大きく緩やかな弧を描く長い廊下を歩いた。

この科学技術の粋を懲らして造られた建造物——ソーラーパネルで外面を覆った半球のドーム——が、マナの世界の全てだった。

地下十階の更に奥の最下層に動力維持のための設備を据え、底部の中心点からは頂点へとエレベーター八台を据えている。

内部は、一階をホールと倉庫にして、二階から十階までをケーキを配分するように均等に四区域に分けており、管理、研究、居住、生産と、それぞれの機能別に各技術者によって統制されている。各区域は偶数階ごとに全ての区域と通じるようになってはいるが、それぞれの職種に応じて立入が厳しく規制されている。

今、マナとシイナがいるのは研究区域である。シイナはこの区域の責任者でもあった。

マナはこのドームの構造を知識として理解していたが、実際に彼女が知っているのは、研究と居住区域のごく一部分だけだった。

だが、マナにはそれが苦にはならない。それは知る必要のないことだからだ。

マナは選ばれた人間なのだ。だから、それ以外は何も重要なことではない。そう、教えられてきた。

今も彼女は、何も知らずにシイナに連れられて、居住区の自分の部屋から平行に移動し、研究区二階の学習部屋へと移動している。

研究区の三階から五階分までは存在しない。その空間は、床をぶちぬいて造った植物用の大きな温室となっており、エレベーターへ向かう直線の廊下側面は特殊コーティングを施したガラスが張り巡

らされていた。

マナとシイナが向かうその先で、長身の青年が、ガラスの向こうの実験用植物の温室を眺めている。

初めに彼に気づいたのは、マナだった。続いて、シイナも気づき、二人は立ち止まった。

「――」

マナはじつと彼を見つめた。見たことのない男性で、シイナと同じくらいの年代だということはわかった。視線に気づいたかのように青年は振り返る。しかし、そこには何の感情の揺らぎも見えない。遅い、または、男らしい、そんな形容を、青年は持ち合わせてはいなかった。すらりと痩せて、華奢なようにも見える、美しい、だがどこか退廃的な翳りを漂わせる青年だった。

「やあ、シイナ」

声をかけられたシイナは、無表情に青年を見ている。

「部屋で待つようにと伝えておいたわ。なぜ廊下に？」

「ああ。退屈だったからね。温室を見ていたんだ」

言いながら、初めて彼はマナに目を向けた。興味深げな眼差しで。

「君が、マナかい？」

「ええ」

「はじめまして。君の 夫 になるフジオミだ」

優しく微笑う長身のフジオミを、マナは驚いて見上げた。表情を見せると、途端に先程の退廃的な名残は消え失せ、人懐こい和らかな印象になる。

「まあ、あなたがあたしの 旦那様 なの。はじめまして、あなた。マナと呼んでください。お風呂になさいます？ それともお食事が先ですか？」

「は？」

突然の、わけのわからない発言に戸惑うフジオミに、マナの背後でシイナが噴きだした。

「どういう教育をしたんだい、君は」

「マナは今、歴史で『家族』について学んでいるのよ。古い創作書が教科ディスクなの。少し間違った概念を持っていても大目に見てあげて」

「——まあ、いいけれどね」

肩を竦めるフジオミに構わず、シイナはマナに視線を向けた。

「さあ、マナ。残念だけど、もう勉強の時間よ。行きなさい」

「でも博士。あたし、まだフジオミといたいわ。お話したいの」

「学習 が終わったらいいわ。今日はそれで終わりよ。レストルームで待っているわ。いいわね」

「——はい」

膨れた顔をしながら、それでもマナは頷いた。こういうとき、シイナは決して譲らない。そして、約束を破ることも決してないのだ。廊下を駆けて曲がり角まで来たとき、マナはそっと立ち止まり、振り返った。

「——」

シイナとフジオミは何か話をしているようだった。マナには気づいていない。もう一度、マナはじつとフジオミを見つめた。

「彼が、あたしの 伴侶 になる人なのね」

ほうつ、と、息をついてマナは笑った。

「すごく素敵。優しそうだし。よかった」

話には聞いていたのだ。夫 となるフジオミのことは。

だが、マナはそれまで一度もフジオミに会ったことはなかった。

否、シイナ以外の人間と、彼女は接触したことはこれまでになかった。シイナ以外ここにいるのは、みんなドームを維持するためにオリジナルである人間から複製された、クローン体ばかりなのだ。

初めて見る、自分と同じ立場の異性であるフジオミに、マナの興味は尽きない。

じつとシイナとフジオミを見ているマナに、しかし、彼らのほうが気づいた。

マナは驚いたように振り返ったシイナに手を振ると、予定された

今日の 学習 を終えるために学習室へと向かった。

「どういふつもり？」

マナがいたときとはがらりと変わった、突放すような口調。シイナは苛立たしさを隠さずにフジオミを振り返り、見据えた。

視線を受けとめるフジオミは、さほど気にしたふうもない。まるでなれっこだとでも言いたげに。

「まだマナの 教育 は済んでいないわ。計画が完全に終わってもしないし、あなたのことを事前に説明する間もなかった。あの子はこちらが驚くほど勘が良すぎるの。余計な刺激を与えられては困るのよ。一体どういふつもりなの!？」

強い口調に、フジオミは微笑した。

「いいのかい、マナが見てるよ」

シイナが振り返ると、慌てたように手を振り、すぐに少女は消えた。小さく舌打ちして、シイナはフジオミに向き直る。

「私の質問にまだ答えていないわよ」

「君は確かにこの計画の責任者だが、あくまでもそれは名目上にすぎないということさ。カタオカにも、僕を拘束することはできないしね」

カタオカとは彼等の議長で、現存する二つのドームを統括する、彼らの社会の実質的な指導者でもある。

だが、指導者は存在しても、独裁はなかった。完全な権利をもつ人間の数が少ないために、直接民主制なのだ。この社会での決定権を持つものは、クローンではない人間。彼等は全て議員となり、指導者の下、議会を召集し、決議する。議会の承認を得なければ、何も事が運ばないようになっている。それは、かつての彼等の世界にあった政策の名残だった。

だが、何事にも特権がある。フジオミもまた、特権を持つべき人間であった。

「しばらくはここにいる。部屋の用意はさせてあるから不都合はないよ」

「また勝手に話を通したのね！ 私に何の断りもなく」

「じゃあ、許可を」

フジオミは言う。

「今、許可をくれ。君が許してくれば、それですむ」

「――」

その口調は、拒否されることを全く念頭においていないようにも聞こえた。

フジオミはもう一度繰り返す。

「シイナ、許可を」

シイナは強く唇を噛んだ。

「――好きにすればいいわ。私よりあなたに決定する権利があるのだから」

「結構」

シイナの反応を楽しむように、フジオミは微笑った。彼に対する憎悪に近い感情がわいたが、辛うじて、シイナはそれを表情に出さずにすんだ。

「なぜここへ来たの。あなたはこの計画に乗り気ではなかったはずよ」

きつい口調にフジオミは軽く肩を竦める。

「君に会いたかったからだと言ったら？」

シイナは表情を変えることもなく、じっとフジオミを見つめた。

それ以外、何の反応もない。

あきらめて、フジオミは吐息をついた。冗談の通じないことはわかっているらしい。

「――正直なところ、考えが変わったのさ」

「考え？」

「ああ。食わず嫌いはやめることにするよ。相手を知らなきゃ、好きになりようもないだろ。なるべくなら、相手にもいやな思いはさ

せたくないしね」

シイナは、侮蔑の感を隠さずに嗤った。

「あなたに、相手を思いやる気持ちがあるというの？ 自分のことにしか興味がないくせに。あなたにとって重要なのは、自分の楽しみだけでしょくに」

だが、シイナの言葉にも、フジオミは気にしたふうもなく頷いた。それが事実であることを、彼自身が認めていた。

「だからこそ、楽しめるよう努力するのさ。せめて自分が不快にならない程度にね」

永い歴史の中で、今、人という種が滅びを迎えようとしていた。

原因はわからなかった。ただ、徐々に人間から、生殖能力が奪われていった。それがどの種族にも平等に訪れたことは、大いなる運命であつたのかもしれない。

半世紀ほど前に、人類のほとんどは地球上から消え去つたと推測される。最初に、陸続きであるユーラシア、アフリカ大陸に住む人間が死に絶えた。なぜか死は、感染するかのように広大な大陸にいる人々に襲いかかつていったのだ。

そうして、オーストラリア、アメリカ両大陸に住む人々も相次いで死に絶えた。

かつて『日本』と呼ばれた経済大国は、辛うじて現在までは生き長らえた。だが、彼らを絶滅から救つたのは、島国であつたということだけが原因ではなかった。

人類の滅亡が戦争や災害ではなく、生殖能力の衰えによつてもたらされると発表されてから、世界は恐慌状態に陥つた。日本も例外ではない。それ以前からの著しい人口の激減により、日本人の総数は、全盛期の半数にも満たなかつたという。それでも、他国からの移住や帰化を特例としてしか認めなかつたこの国は、自らの滅びは己れの国だけで迎えることを選んだのだ。

彼等の社会を支える支柱となつたのは学者達だつた。生物学、遺伝子工学、人類学その他の専門的な知識を持つ者達が来たるべき時に備えて日本社会を根本から覆した。

いわゆる、鎖国状態に入つたのである。

科学技術の粋をこらしてドームという完全なる閉鎖空間を作り出し、外部からの接触をいっさい排除した。

その当時では、己れのことには手いっぱいだった他国は、どこもこの小さな島国に関心を持たなかった。もちろん国内での反対もあったが、元来己れの国以外を排除しがちな状況であっただけに、強行突破されてしまえば、人々は意外にすんなりとその対策を受け入れ始めていった。

ただ、前回と違うのはどの国との交渉も完全に断ったということだ。

その頃までには、彼らはあらゆる弊害を克服していた。

人口の減少に加えて、完全自給自足がなったこの小さな島国は、ただ自分達の血脈が永遠に生き続けることだけを考えればよかったのだ。

だが、いかなる高度な技術をもってしても、生命の領域を支配することはできなかった。

現在、この島に存在する人間は、登録上で二百人たらず。ただし、純粋な人間は、その四分の一にも満たない。そのほとんどは、クローニングによる複製体であった。そして、複製体のほとんどは、世代を重ねるごとに生殖能力をもたずに産まれるようになった。

クローンは、もはや人間とははつきりと区別されており、労働用として扱われている。

生殖能力を失いながら細々と続く人間が終わりを迎えていく一方で、彼らはクローニングによる技術を駆使して、彼らの社会を保ち続けた。その奇妙な形態こそが、彼らの未来をねじまげていくことも気づかぬまま。

ねじまげられた未来にかりうじて生き残る人間達。

それが幸か不幸かは、彼ら自身にさえ、すでにわからなくなっていた。

突然のエマージェンシー。

この時、学習を終えたマナを迎えて、フジオミとシイナは研究区のレストルームでコーヒーを飲みながら休息を取っていた。初め、三人は驚いたものの、ちよつとしたミスだろうと深刻には考えなかった。

だが、一分を過ぎてもやまない警報に、徐々に彼等の内に奇妙な不安が沸き上がる。

「何が起こったんだ？」

「わからない。事故かもしれない。ここから動かないほうがいいわ。管理区域に通信しましょう」

シイナが、机上のコンソールで管理区域への通信を始める。数秒してスクリーンとは違う壁面の大きなモニターに、クローン体の職員の様子が現われる。

「何があつたの？」

『侵入者です。何者かがラボの通風口から侵入しました』

その耳慣れない言葉に、マナが息をのみ、フジオミが問い返す。

「侵入者？ そんなものが、外から来たって言うのか。馬鹿なことを言わないでくれ」

何処かのんびりした問いにも、無理はなかった。自分達を取り巻くこの世界に、外敵がいようはずもない。彼らはそれを事実として知っていたのだ。

『ほ、本当なんです。そちらに向かっています。早急に退避してください』

「動物じゃないのか。ある程度知能があれば、通風口に入り込むこともある」

「生体反応を確認したの！？ 監視モニターが捕えたものをこつちにまわしなさい、はやく！！」

苛立たしげにシイナが叫ぶ。

モニターが切り変わり、侵入者の姿を映し出した。

「！！」

その瞬間、モニターのディスプレイに大きな木製のテーブルが投げつけられた。同時にスクリーンの風景が消え、窓のない部屋は人工燈の明かりだけが浮き彫りになる。

「きゃあ！！」

マナの悲鳴。

モニターに氣をとられていたシイナとフジオミが振り返る。

「――」

薄暗い視界の中、ぐったりとしたマナを抱きあげている者に、フジオミは愕然とした。それは、未だかつて彼が目にしたことのない、不思議な容姿だった。

抜けるような白い肌。銀系のような髪。見据える瞳は薄闇でもそれとわかる、炎のような赤だった。マナと同じくらいの少年だ。声も出せずに、フジオミはその少年を凝視していた。

「ユウ！！」

シイナが叫んだ。

それがフジオミにさらなる驚愕を与える。今、シイナは少年の名前を呼んだ。彼女は彼を知っているのだ。

赤い瞳が鋭くシイナを睨んだ。だが、すぐに踵を返して部屋を出ていった。マナを抱いたまま。

「待ちなさい！！ マナをどうする気！！」

シイナが後を追う。フジオミが数秒遅れて続く。マナ一人を抱えているというのに、少年の速さは二人を凌いでいた。

「シイナ、君はあの子を知っているのか？ 何だ、あの異様な姿は――」

シイナは彼を見ようとしめない。ただ前だけを見つめていた。そ

の顔色は心なしに青ざめていた。

「実験体よ。まだ生きていたなんて——」

忌ま忌ましがな呟き。走りざまに、シイナは廊下に備え付けられた非常時のエマージェンシーコールをメインコンピュータに送り込む。彼らの前後で、両脇の壁から出てきた扉が廊下を仕切っている。

彼らの前の通路も仕切られていくが、シイナは手慣れた手つきで扉につけられたコンピュータパネルを操作し、前へ進む。

フジオミはシイナに従い、ユウと呼ばれた少年とマナを追うが、途中奇妙なことに気づく。

非常時には、通路を仕切る全ての扉とエレベータは自動的にロックされ、特別なコードでなければ開かないようになっている。だが、最初の扉以降、シイナが開けるより前に開かれた扉は、壊したふうもなく、真つすぐに非常階段へと向かっている。内部構造に詳しくなければ、こんなことはできない。

これは事実だ。

明らかにあの少年はここを熟知している。

シイナは少年を実験体だと言った。

（しかし、一体何のだ。なぜ、そんな少年が、よりもよって外からやってきたんだ？）

このドームを離れては、我々人類は生きられないというのに。そんな疑問が頭の中を駆け巡る。

普段はめつたに使わない非常階段をかけおり、シイナとフジオミは一階を目指した。

一人で逃げるのとはわけが違う。少年はマナを連れている。出ていくとしたら、入ってきた通風口からは不可能だ。

そして、それ以前にシイナはよくわかっていた。

（これは報復だ。自分に対する）

だからこうして、追ってこいとも言わんばかりに逃げている。一階へ着くと、奇妙な騒めきに満ちていた。外へ通じる扉の前に

は、少年がいる。そして、作業員であるクローン達は、それを遠まきに見ているだけ。無理もない。誰もこんな事態を予想だにしていなかったのだから。

「マナに傷一つでもつけたら許さないわ!!」

シイナの叫びにも少年は無言だった。信じられないことに、ロツクされたはずの扉を手も触れずに開け、外へ消えた。

「マナ!!」

シイナが開け放たれた扉へとかけよる。吹きつける風は一瞬奇妙な渦を描いたが、すぐに止まった。

「――」

そして整備された敷地の遥か彼方の草地にすら、シイナとフジオミは二人の姿を見つけることはできなかった。

「なんてことなの…マナがさらわれるなんて…」

ひっきりなしに届く不快な音が、覚醒とともに大きくなっていく。それはマナにとっては、紙が散らばる音に聞こえた。たくさん紙が、床に落ちていく音。心の何処かで、それは違うとも思っていたが、他に思い当る音を知らなかった。そんな音を聞きながら、マナはゆっくりと瞳を開けた。

「――」
始めに視界に映ったのは、薄暗い天井の壁だった。

光の明度も彩度も、マナが今まで見たことのないものだった。まだ夢を見ているのかもしれない。そう、マナは感じた。何故、こんなに暗いのだろう。さっきまで、あんなにも明るかったのに。

二、三度瞬きをしても、マナに視界の光の加減は変わらなかった。だが、背中にあたる、ベッドの感触が違う。体に触れているシーツの感触も。

奇妙な違和感が、徐々にマナの意識を覚醒させていく。

（何かが違う）

五感の全てが、訴えかけていた。

マナは飛び起きた。

そして、視界にその少年を見いだして驚く。

「――」
見たこともない容姿だった。彼女が今までに見た人間やクローンは皆髪も瞳も黒かったのに。

だが、ここにいる少年は違う。銀の髪に赤い瞳。抜けるような白い肌を持っている。

「あなたは、誰？」

「ユウ」

低い声で、少年は名を告げた。端正な容姿は、まだ少し、少年らしいあどけなさを残している。

「ここは、どこ？」

「ドームの外だ」

「え！？」

「ドームの外だ」

繰り返し、少年は言った。それでも、マナはその言葉が信じられなかった。

さっきまで自分はドームにいたのだ。それなのに、どうして。

マナの思いを察してか、少年は身体を預けていた壁面の布から身体を離し、それをざっと横に引いた。

布のかけられていた壁にはそのままガラスをはめこんである。

この剥出しの作りは、何世紀か前の物だと彼女は確信する。

そしてその向こうには、彼女のまだ見たことのない世界が広がっていた。

「嘘……」

思わずベッドから立ち上がり、窓に駆け寄り、そのまま立ちすくむ。

薄闇よりも濃く影を落とす巨大な闇が見える。

それは全て前世紀の遺物だった。

かつては繁栄を極めただろう高く聳え断つ建造物は、今は見る影もなく廃れ、錆びれ、崩れかけている。今いるこの部屋も、それと同じ廃墟なのだろう。

宵の薄闇の中、聞いたことのない騒めきがひっきりなしに耳にこだまする。

窓の端に映る、外に蠢く巨大な影。

マナの恐怖はいよいよ高まる。

「いや…あたしを帰して。このままじゃ死んじゃう、ドームに帰して…」

「死ぬ？ あんた、病気なのか？」

訝しげにユウが問う。しゃがみこんだマナに、近づいてくる。

「いや、傍に来ないで…」

恐怖で、マナは混乱していた。

その眼差しを、少年は強ばったような青ざめた顔で見ていた。

「俺が恐いのか？ あんたたちとは違う姿だから、恐いのか？」

「――」

「でもこの姿は、俺が望んだものじゃない」

ユウは苦々しげに顔を歪めていたが、今のマナにはそんなことを思いやる余裕はなかった。

その時、一枚ドアの向こうで声がした。

ユウが振り返る。

マナはいよいよ身を竦める。

「ユウ、帰ってきたのかい」

「おじいちゃん」

ドアが片側だけ奇妙に斜めの角度で開いた。

部屋に入ってくる人物を見るなり、マナは悲鳴をあげた。

薄汚れた見慣れぬ型の長衣を身に纏い、長い杖を持った老人の姿は、マナの瞳には異様にしか見えなかった。髪は見事な白髪で、同じく白い髭が顔の下半分を覆い胸までとどいている。

「おやおや、嫌われてしまったようだの」

さほど気にしたふうもなく、老人は微笑った。微笑うとかすかに見える皺のある肌に、さらに深い皺が刻み込まれる。

だが、マナは顔を両手で覆ったまま震えている。

声を殺して泣いているようだった。

老人はその様子を眺め、それからユウに視線を向ける。

「ユウ、その子のお守りはおまえに任せることにしよう」

「おじいちゃん!!」

「私を当てにしていたのかい？ それは見当違いというものだよ。私は反対した。おまえは聞かなかった。おまえの行動は、おまえが責任をとりなさい。お休み」

ゆつくりと杖に体重を預け、老人はユウに背を向けて、来たときと同じに静かに部屋を出ていった。

ゆつくりと、ユウはマナを振り返った。

「マナ、泣くなよ。おじいちゃんは恐くない。優しい人だ。それに俺、あんたを殴ったりとか、そういうことしたりしないよ」

優しくかかる声。だが、マナは泣きじゃくったまま首を振り続ける。

「いや。いや。帰りたい。博士のところに、フジオミのところに帰りたい」

「マナ…」

自分にのびてきた手を気配で感じ、マナは心底怯え、身を竦ませた。両手で顔を隠し、少しでもこの恐怖から逃れる術を探した。

だが、震える身体は、やがて何の危害も与えられないことを訝しみ、恐る恐る顔をあげた。

ユウはそこから動かずに、じっとしていた。目が合うと、振り切るように視線を逸らす。

マナは、自分の反応に傷ついた顔をしたユウに、驚いた。

それは、高ぶっていた感情を落ち着かせるのに、十分だった。

涙が、いつのまにか止まった。

そのまましばらく、マナは少年を凝視し、少年は唇をきつく咬んだまま顔を背けていた。

彼は別に、危害を加える気ではないのだ。自分一人が恐がっているだけなのだ。そう理解すると、まだ少し恐怖は残ったが、心には余裕ができた。

ユウは動かない。

マナはゆつくりと立ち上がり、ユウのそばへと近づいた。実際に行動することで確かめると、今度は疑問が浮かぶ。

なぜ彼は、自分をここへ連れてきたのか。

「ユウ…?」

それでも、ユウはマナを見ようとはしなかった。

「俺はただ——」

ためらうような低いユウの声が、マナの心に素直に届いた。

「あんたと、話をしたかったんだ——」

「ユウ……」

ユウはとても淋しそうに見えた。

「ここには、あなたたちしかないの?」

「ああ」

では、無理もない。あんな奇妙な人物と二人だけなんて、自分になら耐えられない。

ひとりよがりな解釈を、マナはした。そう考えると、彼女はユウが可哀相になった。

「ひとりだったの?」

「ああ」

「淋しかったの?」

「ああ——」

ゆっくりと、マナはユウへ手をのばした。

ユウは動かなかった。

少し安心して、マナはユウの手を優しく握った。

ユウは、奇妙な顔つきでマナを凝視している。

マナはまた少し不安になったが、笑って言った。

「手をつないでいると、あたたかでしょう? 具合が悪くなると、博士にこうしてもらったの。こうすると、淋しくないのよ」

促されて、ユウはマナの横に座った。手はつながれたままだ。

不思議なことに、触れた手から、波のように穏やかな感覚が伝わる。そんなことは、今までにはなかったが、それが逆に、マナを落

ち着かせた。

「あたし、まだ少しあなたが恐いの。だから優しくして。怒らないで。そうしてくれたら、あたし、あなたといっても恐くなくなると思うの。」

ユウは不思議そうな顔をしてマナを見つめた。

「——恐くなければ、俺といってくれるのか、マナ？」

「ええ」

「どうすれば、恐くない？」

真摯な眼差しを、ユウはマナに向けた。マナは少し戸惑った。

赤い瞳がじつとこちらを見つめている。見れば見るほど、ユウの容姿はマナには不思議なものに思える。

「——その瞳」

「え？」

「あなたの瞳で見ると、みんな赤く見えるのかしら？」

「——」

しばしの間をおいて、ユウは声をあげて笑った。その表情は歳相応にあどけなく、マナの恐怖心を残らず拭い去るには十分だった。

「ひ、ひどいわ。あたし、本気でそう思ったのに」

「じゃあ、マナの瞳は茶色いけど、みんな茶色に見えるのか？」

「ち、違うけど、でも、本当に、綺麗な赤だから——」

「綺麗？」

ユウは訝しげな表情でマナを見つめた。なぜそんなことを言うのかわからないといった表情だった。

「綺麗よ。濁ってない、本当に綺麗な赤。あたしも、こんな綺麗な色だったらよかったのに」

マナは顔を近づけて、じつとユウの瞳を覗き込んだ。

「ずっと昔には、もっとたくさんの人がいて、ここだけじゃない、海の向こうの別の大陸で生活していたんですって。その人達は、あたしとは違う種で、髪の色も瞳の色も違うの。金の髪や銀の髪、瞳の色は青や緑。あなたみたいな赤い瞳をしていた人も、きつといた

のね」

「マナは変わってる」

「変わってる？」

「誰も俺の髪や瞳のことは話さなかった」

「どうして？」

「俺がこの髪と瞳を嫌いだからさ」

「こんなに綺麗なのに？」

「そう面と向かって言ったのはマナだけだ。だからマナは変わってるのさ」

「綺麗なものは大好きよ。だから、ユウの髪も瞳も好きだわ」

膝の上に頭を預けて、マナはユウへ視線を向けた。

「どうしてかしら。さっきまで、あなたがとても恐かったの。でも、今は違う。何だか、初めて会った気がしないの。懐かしいような気が、するの。変ね。本当に、初めて会ったばかりなのに……」

話し疲れたのか、いつのまにかマナは微睡み始めていた。睡魔にまけて、目蓋が閉じられた。

「マナ？」

ユウはそつと名前を呼んだ。だが、返事はない。ユウはマナの顔を覗き込んだ。まだ幼い少女の寝顔に、ユウは苦痛に耐えるかのような表情を向けていた。

「――」

そうして、朝が来るまであどけない寝顔を見つめていた。

外が明るくなっていくのに気づくと、ユウはマナを起こさないように静かに抱き上げ、ベッドへと横たえた。そうして、そつと部屋を出た。

階段を下り、すぐの部屋をノックする。

返事はないが、ユウはドアを開けた。中に入ると開いたままの力ーテンから差し込む光で、すでに部屋は明るかった。

老人はベッドにはいなかった。窓に斜めに背を向けた揺り椅子に腰を下ろしていた。

ユウは黙ってそちらの方へと向かった。

目を閉じていても老人が起きていることに、気づいていた。

明けてゆく薄紫の中で、揺り椅子の軋む音だけが静かに響く。明るく照らされた老人の顔に、まだそう濃くならない影が優しく落ちた。

「おじいちゃん——」

「気がすんだかね」

ゆつくりと老人は目を開け、ユウに手を差し伸べた。

ユウは黙ってその手をとる。

「ごめん、おじいちゃん。俺、悪いことをしたよ」

「誰に対して、悪いと思っっているんだね？」

「——」

「ユウ、あの娘はおまえの望むものにはなれんよ。それを、忘れんようにな」

「わかってる——」

ユウは静かにその場に座り込んだ。

失われたものを求めるのがどんなに愚かなことが、ユウはすでに知っていた。

「でも、おじいちゃん。マナは、俺の手を優しく握ってくれたよ。

朝になるまで、そうしていてくれた」

「——」

「おじいちゃんと同じに、あたたかな、手をした……」

ずっと、欲しいものがあつたのだ。ずっとずっと、それだけが欲しくて。

「ちゃんとわかってるよ。子供じゃないもの。俺だってもう、わか
ってるんだ」

瞳を閉じて、ユウはそれきり動かなかった。老人は優しく、ユウの髪を撫でていた。

マナが目を覚ましたのは、太陽が顔を出してからだった。

いつのまにかベッドに横たえられていたことに気づき、起き上がるとまず窓へと向かう。

青い空に浮かぶ雲は、流れるように動いていく。

初めて迎える朝の明るさと、熱、光の強さは、皮膚に心地よい刺激を与えてくれた。

崩れた廃墟の群れから顔を出す巨大な樹木は濃い緑を風に揺らめかせていた。

「昨日の音は、これだったのね——」

木々の騒めきも、昨日と違って優しく耳に届いた。

地は足の長い草が一面覆い尽くし、風の方向を指し示し、靡いていた。

風に揺れるたびに微妙に色を変える緑達。

「ああ　なんて綺麗なのかしら……」

これまでになく、マナは眼に見える美しさというものを実感した。直に見る自然の景色に、これほどまでに感じるものがあるのだということも、彼女は知らなかったのだ。

もっと身近に、見て、感じてみたい。

思ってしまった、後は簡単だった。

やり方もわからない鍵も、試行錯誤で解いて窓を開ける。

一斉に風がマナの長い髪を後ろへと靡かせた。

「きゃ——」

その勢いに、思わず瞳を閉じる。

眼に見えない何かがぶつかってくるような、そんな突然の感覚だ

った。

強いだけの感覚は、やがて身を包むように穏やかで優しいものへと変わる。

マナは自分の髪が緩やかに背中に触れては離れるのを確認して、瞳を開けた。

剥出しの手が、風にさらされている。

開いた指の隙間を、風が抜けていく。

ただそれだけのことが、マナにとっては風に触れているという重大な現実だった。

風を感じていることも、全てが夢のようできて、けれども確かな現実なのだ。

こうしてここに立っていると、昨日までの自分のいたあの銀色のドームがいかにもつくりものめいた絵空事のようにも思える。

それほど、マナのこの体験は深い衝撃を彼女に与えたのだ。

「なんて綺麗なの。こんな世界が、あったなんて……」

チチチと、木々のざわめきの間から聞こえる音。

マナはどこかで聞いたことがあると思った。どこでだっただろう。ばさばさと、梢の間から飛び出したものを見て、マナは納得した。

「鳥　ね！　鳥のさえずりだわー！」

以前学習した教科テキストの中にあつた映像を思い出していた。

種類はもう覚えていないが、小さな可愛らしい鳴き声は、記憶の隅に残っていたのだ。

「なんていう鳥なのかしら」

聞いてみようと思つて、そこで、はたとマナは気づいた。

ユウがいない。

周囲を見回すと、奥のドアは開きっぱなしになっていた。

顔を出して覗いてみると、そこは長い廊下だった。

廊下の両脇の壁には、今マナがいる部屋と同じ造りのドアが等間隔に備え付けられていた。

「ユウ……」

呼んでみたが、返事はない。

左側に視線を向けると、階下へと通じる階段の手摺りに気づいた。たくさんのドアをあけてユウを探すより、まず下へ降りてみよう。とマナは考えた。

マナは知らなかったが、この廃墟はかつては多くの人間が宿泊する場所として使われていたのだ。その階だけでも部屋数は多くあった。

階下へ降りてみると、造りが変わっていた。外へ通じる、これまでガラス張りの入り口がある。広い空間だが、四方にどこへ続いているのかわからない細い通路がたくさんある。階下へと通じる階段のすぐ隣の部屋の扉だけが開いていることに気づき、マナはそっと覗き込んだ。

ユウと老人がいる。

老人は木でできた椅子に座っていた。

その膝に頭を持たせて、ユウは動かなかった。初めて見たときは驚いたが、もう老人の姿に怯えることはなかった。

どうしてあんなに怯えたのか、今は不思議なくらいだ。

「――」

何だかひどく、その光景はあたたかくて、なぜかマナには声がかけられなかった。どうしようかと考えてしばし過ぎた時、

「マナ？」

不意に、ユウが気づいた。

マナのほうに驚く。

互いの視線が相手を認め、ユウは慌てたように老人から離れた。

「あの、あたし、目が覚めたら誰もいないから」

ユウはマナに声もかけずに部屋を出る。

走るように細い通路の一つへと消えていく。

「マナ、入っておいで」

揺り椅子に座ったまま、老人は声をかけた。

「ユウは朝食の支度をしに行っただよ。それまで、私の相手をしておくれ。おまえさんに話があったんだよ」

マナは言われたとおり部屋へと入った。

老人の傍のベッドの上に座る。

「あの、昨日はごめんなさい。あたし、驚いてしまって、それで」

老人は首を軽く振って微笑んだ。

「いいんだよ。人間は、未知なるものを恐れるようにできている生き物だ。知った上でどう判断するかが問題なのだよ」

マナは、その穏やかな老人の態度に安堵した。

そうになったら、今度は好奇心を押さえ切れなくなった。

「ユウとあなたは、どうしてこんな廃墟に住んでいられるの？　ここは古い時代に造られたものでしょう？　管理システムのない不便な建造物だとディスクで見たのに」

「ドームでしか生きられないと、教えられたのかね？」

マナは素直に頷く。

「だが、私達は生きている。人から教えられることも大事だが、自分で実際に確かめ、知ることとても大事なことだ。おまえさんは私達とともに一晩この廃墟で過ごし、何事もなくこうしてここにいる。それが、おまえさんの判断すべき事実なのだよ」

事実。

その何度も使い古された言葉は、老人の唇から語られると、ひどく重要な響きを持っているように感じられた。

「私達は登録を抹殺された人間なんだよ。もうどれくらい前なのかもわからないが、我々の何十代か前の祖先が、ドームを離れて外の世界で生きることを選んだ。わずかな機器と、食料となるだろう種子を持ってな。当時の生活は困難を極めたと聞くよ。無理もない。それまでの人々は、全てを機械に頼って生きていたのだから。挫折して戻っていった者もいたという。だが、残った人々はこの世界と

バランスよく共存することを学び、そうして私達の代まで続いてきたのだ」

「信じられない。そんなことが、可能なの……」

「マナ、おまえさんは、今までドームの中の世界しか知らなかっただろうが、もつとずつと、それこそ気が遠くなるほど遙かな昔には、我々はこの空の下で自由に生きていたのだよ」

「――」

「昔の人間にできたことが、今の我々にできないと思うのかね。身体的に、退化したわけでもない。退化したのは、精神の面においてなのだよ」

深い、心に染み透るような声を、マナは聞きもらさないようじつと耳を傾けていた。

「どんなに時が過ぎようと、世界はいつでも我々に優しい。それを先に切り捨てたのは、我々の方なのだ」

老人は、大きな窓から見える、足早に影を落としては去っていく雲を、瞳を細めて見送った。

その顔は、この景色を愛おしむ想いに溢れていた。

「外の景色を見て、美しいと思わなかね。この世界は、美しい光と色に満ちている。どの時代より、きつと今、世界は一番美しいだろうと私は思っている。」

この廃墟が、かつてはこの地の至る所に立ち並んでいた時代、大気は汚れ、水は淀み、地は腐り、木々は死んでいた。

だが今、大気は澄み、水は潤い、地は清らかに、木々は優しく歌う。

連鎖という言葉を知っているかね。全ては循環するのだよ。植物も、動物も、もちろん人間も、全てが等しく地上をめぐる生命の環の中にあつた。

だが、人間はいつからかその環の中から外れてしまった。この時代の中で、今は人間だけが異質なのだ。我々がこのような時代を迎えたのも、当然のことなのかもしれん……」

「――」
マナは正直、老人の言うことを全て理解できたわけではなかった。ただ、熱心に聞き入っていたそのわけは、老人の言葉が今までマナの学んだどれにも当てはまらなかったからだ。

抽象的な概念と証明のない思想。

マナはそのことにとても興味を覚えた。

物思いにふけるマナに穏やかな視線を向け、老人は言葉を繋ぐ。

「ユウを、許してやっておくれ。あの子はまだ子供だ。我々が大事に大事に甘やかして育ててしまった。優しい子だが、とても淋しがりなのだ」

「あなたが、いたのに？」

「私がいてもだよ。あの子にとって必要なのは、決して手に入らないものだ。それ以外の何を与えても、あの子は決して満たされないのだ」

「ユウの欲しいものって？」

「決して会えないもの。決して許されないもの。決して愛せないもの。あの子が望んでいるものは、そういったものだ。あの子自身がそれを一番よく理解している。だから、淋しいのだ。」

そして今、ユウはおまえさんの中に、手に入らなかったものを重ねている。だが、おまえさんはそれにはなれない。おまえさんはいずれ戻る子だからな。すまんが、それまでは私達と一緒にいておくれ。ユウも落ち着けばおまえさんを返す気になるだろう」

「いいわ。あたし、ここが何処かもわからないの。ひとりでは帰れないわ。きつともう少ししたら、博士が来てくれるかもしれないし、それまでは一緒にいてもいいわ」

「ありがとう、マナ。おまえさんは優しい子だね。では食堂へ行こうか。きつとユウが朝食を作ってくれているはずだ」

老人が杖を支えに椅子から立ち上がり、ドアに向かってゆつくりと歩きます。マナはその後ろ姿に、無意識のうちに呼び掛けていた。

「おじいちゃん」

呼んでから、マナは狼狽えた。

呼んでみたかったのだ。

ユウが老人をそう呼ぶのが、とてもあたたかく、優しい感じがしたから。

振り返った老人は、そんなマナの動揺を気にしたふうもなく、次の言葉を待っている。

「そう、呼んでもいい…？」

ためらいがちにかかる声に、老人は穏やかに微笑う。

「ああ。いいとも。さあ、食事にしよう」

「シイナ。連絡は受けている。詳しい状況を説明してくれたまえ」

シイナがその部屋に入るなり、重みのある穏やかな声がかかる。

「説明なら、後でいやというほどご報告します。それよりもカタオカ、すぐに搜索隊を編成してください。一刻も早く、マナを取り戻さなければ」

カタオカは、椅子に腰掛けたままシイナを見つめていた。五十代の貫禄を備えたこの男は、シイナの焦燥とは裏腹に、落ち着いていた。

「待ちたまえ。そんな大がかりなことを私一人で決めるわけにはいかない。議会を召集しよう。議員にすぐ集まるように言う。二日待ってくれ」

「二日っ！？ あなたにはことの重要さがわかっていないのですか！？ さらにわかれたのは、マナなんですよ！？ 彼女は、我々人間に残された唯一の女性なんです。彼女を失えば、私達は滅びるだけだというのに、なぜそう悠長に構えているんです」

「無駄に焦ってもよい結果は生まない。マナはさらわれたのだろう？ ならば生命の危険は、今のところはないのではないかね。マナの命が目的なら、彼が侵入した時点で実行されているだろう」

「だからといって、この先もマナに危害を加えることがないと、言い切れますか。我々人間は外界の苛酷な環境に耐えられるほど強くはない。マナもそうです。急激な環境の変化に、マナが耐えられるのかもわかりません。一刻も早く救出しないと」

「だが、搜索を開始しようにも、行き先に、見当はあるのかね。外は広い。搜索は日数もかかるだろう」

「指揮なら私がとります」

「いや、それはいかん。君にはドーム内を統括する役目がある。こ

「こには、君は必要不可欠なのだ」

「――」

悔しいことに、それは事実だった。研究区域の統率だけではなく、シイナは事実上このドームを統率していた。もとの統率はカタオカが行なっていたのだが、数年前から彼はこのドームの全権を彼女に委ねていたのだ。

「では、今すぐに議会の召集を。急げば明日の朝には議会を開けるはずです。」

あなたは我々の議長です。数少なくとも権限はおありのはずです。今すぐ行使してください」

言い捨てると、もう用はないといわんばかりの態度で、シイナは部屋を出、足早に進んだ。苛立たしさが足取りをも急がせる。

「議会は召集されることに？」

前方からかかる声。

視線を向けると、フジオミが自室扉のすぐ脇の壁に背を預けて立っていた。

「あなたはまた出席しないつもりなの」

「僕には、あえて発言すべきことはないよ。例え時間がかかろうとも、君の望みは通るだろう。そのためだけの議会だ。僕が出る必要はない」

言いように、シイナは苛立った。自分の行動を揶揄しているようにも聞こえる口調を、彼女は昔から大嫌いだった。

この世界で一番嫌いな男。

なぜこんな男がいるのだろう。

自分がどれだけの義務を背負っているのか、真に理解してもいない。

ただ己れの快楽のためのみに生きている。

一番腹立たしいのは、そんな男でも、この世界で一番必要だという事実だ。

唇を強く噛んで動かないシイナを、フジオミは訝しげに見つめた。「疲れているようだね。そんなに気を張りつめていると君のほうがまいってしまうよ」

「あなたは何とも思わないの！？　さらわれたのは、あなたの伴侶　なのよ！！」

見当外れな配慮に、シイナは堪え切れずに叫んだ。

しかし、思いもかけないシイナの怒りに、フジオミは一瞬戸惑いはしたものの、すぐに納得したように肩を竦める。

「愛しいと思うほどには、まだ愛していないからね」
そんな飄々とした彼の態度が、シイナにはますます腹立たしかった。

「あなたといると苛々する」

言い捨て、その場を去ろうとするシイナを、フジオミは興味深げに眺めていた。まるで玩具の動きを楽しむかの如く。

ややあつて、シイナの背後に声がかかる。

「じゃあ、僕の性欲の処理は？」

立ち止まるシイナ。ゆっくりと振り返る。

「マナがまだなら、君が当然相手をしてくれるんだろう？　君の義務だ」

「今がどういふ状況かわかってるの！？　あなたは——」

「僕は正直な質でね。嘘はつけない」

悪怖れずに言うフジオミ。

シイナは叫びだしかけたが、結局それをやめた。あきらめたようにフジオミの脇を通り抜け、彼の部屋に入ると、乱暴に白衣を脱いだ。

「そこまでにしておいてくれよ。僕の楽しみがなくなる」

フジオミの楽しげな声に、シイナは激しい嫌悪を覚えたが、黙っ

て彼が近づいて来るのを許した。

「半月ぶりだけど、君は、誰かと寝た？」

「くだらないことを。ここの職員はクローンよ。あなたのように性欲があるわけないわ」

「それは結構」

フジオミは慣れた手つきでシイナの身につけているものを剥いでいく。

シイナは彼とのセックスが何よりも嫌いだった。

所詮無駄な行為だとわかつているのに、なぜこの男の欲望はつきないのだろう。

遙か昔、人類は性交を繁殖のためではなく己れの快楽のために行なっていたという。

人間だけが、繁殖期を持たずに欲望を脳でコントロールする。それは人類の始祖が直立歩行を始めた進化の過程からだという。

そしてその時から、人類は地上を支配する征服者としてあらゆる生物の上に立った。

地上を支配し、その繁栄を極め、もてあましていた人類は、もはや繁殖のための性交を必要としなくなっていたのだろうか。

自然界では、繁殖のための伴侶を選ぶ権利があるのは雌だ。けれど、人間は違う。人間

は何においても雄——男が権利を優先している。同じ動物でありながらのこの違いは、一体何に起因するのだろうか。

答えは簡単だ。シイナは思う。

人間は——特に男は、繁殖を重要視しないのだ。だからこその動物と違い、女を軽んじ、奴隷のように扱い、力づくで従わせ、己れの快楽のためのみの性交を続ける。

やがて人間からは生殖能力が奪われた。

それと同時に性欲も奪われた。一握りの特別な人間を残して。

自然に反した形態が、今日のような結果を齎したのだとすれば、男性優位の人間社会が滅びの一端を担っているのだと言っても、あ

ながち嘘ではないのかもしれない。

しかし、繁殖という自然界の掟に反して行なわれる性交の結果がこれだとすれば、人類はなんという重い代償を支払ったのだろうか。「何を考えてるんだい」

耳元にささやく声に、シイナは思考を中断される。

フジオミもまた、今までの男達と同じに愚かな行為を繰り返している。

それなのに、やはり彼は選ばれた者なのだ。彼の中には昔のままの血が流れている。強い欲望と、命への渴望と、未来への希望が。それだけは、認めざるをえない。

「何も――」

ベッドに押し倒されて、唇が重なる。愛撫する手に、じっとシイナは耐えた。早くこの行為が終わってくれることを。

「――」

フジオミの手は、身体の奥の、忘れ果てていた記憶を甦らせる。それが、いやだった。

シイナには、もともと性欲はなかった。

フジオミの相手をするようになってからも、自分の内に性的な欲望が芽生えることはなかった。

それ自体に、嫌悪さえ感じていた。

だが、フジオミは違った。

彼は正常な男性だったし、性欲を処理する相手が必要だった。

生殖能力のあるものは同性との性交は禁じられていたので、必然的にシイナが相手にならざるをえなかった。

彼女はすでに自分に生殖能力がないことを知っていた。

生殖のない行為は無駄だと彼女は議会で述べたが、却下された。

それは彼女に与えられた義務であると。

そうして、シイナはフジオミに抱かれた。

初めてフジオミと寝た時のことを、シイナはまだ覚えている。二人とも、十四歳だった。

シイナにとってそれは恐怖以外のなにものでもなかった。身体を愛撫される嫌悪と、貰かれる苦痛に、彼女は泣き叫んで解放を求めた。

だが、フジオミは己れの欲望を満たすまで、決して彼女を解放しようとはしなかった。

そして、彼女は悟ったのだ。

生殖能力のない、けれど女性体である自分はただ、この男の性欲の処理として扱われるだけなのだ。

その事実、彼女の誇りを踏み躪った。

全てにおいて他より抜きんでていた彼女であつたが、子供が産めないということだけで、自分の意にそまぬことを強制され、従い続けなければならないのだ。

それは、隷属以外のなにものでもない。

決して対等の人間として扱われることのない怒りが沸き上がる。

彼女は己が身を呪い、疎んだ。

だが、それ以降何度フジオミに抱かれても、彼女はただ従順に従った。

決して泣き叫ぶことはしなかった。

それこそが、彼女に許された唯一の自尊心であつたのだ。

シイナにとって苦痛としか言えない行為が終わり、彼女はすぐに衣服を身につけた。

部屋を出ていこうとするシイナに、背後からフジオミが声をかけた。

「質問を、いいかい？」

シイナが振り返る。

「手短にして」

その場で聞くつもりだ。

「ユウという少年のあの姿は何だ？ 見たこともない容姿だった。奇形か？」

「遺伝病よ。言ったでしょう、ユウは実験体なのよ。失敗した、出来損ない」

「人体実験をしたのか」

かすかに非難めいたフジオミの口調にも、シイナは動じない。

人体実験は、過去幾度となく繰り返されてきたことだ。

それなくして医学の発達などありえなかった。

それが事実だ。

シイナは他人が向ける無言の非難を今まで幾度となく感じていたが、特別な感傷はなかった。あるのは、偽善めいた他者の感傷に対する侮蔑だけだ。

実験対象が、動物から人間に変わったただけだ。

同じ命を扱うことに変わりはない。

むしろ彼女にとっては、人間よりは動物の方が、よっぽど守るべき価値があると考えられる。

同じ動物でありながら、人間は駄目だという考えは、偽善以外のなにものでもない。

非難されるべき理由がどこにある、この退廃した世界で。

シイナはかすかに笑んだ。

「ユカは完全な女性体でありながら、子供を産むことはほとんどできなかった。妊娠しても流産や死産で、もう正常な子供は望めないこともわかっていた。だから、あれは最後の実験だったのよ」

もう十年以上前のことだ。

ユカなら、フジオミも憶えていた。

今の自分達より少し年上の美しい女性だった。会うたびに優しく笑いかけてくれた。厳しいことも言ってくれた。それはフジオミの

決して理解することのできない母性を、垣間見せるかすかなぬくもりだった。

フジオミの母は出産の後、我が子に乳を与えることもなく亡くなっている。父もとうになく、彼は物心ついたときから一人だったのだ。

そういえば、最後に見たあのとときも、ユカは身籠もっていた。

事実上純粋なサカキの血脈は、ユカと彼女の兄であるマサトで絶えていた。

彼等の両親はいとこ同士だった。

マサトは時期が合わず、伴侶を迎えることなく死んだ。

ユカも最後の出産の後、三年ほど経って事故で死んだ。

だが、それでもフジオミの憶えているかぎり、ユカは幸せそうだった。

目立ってきたお腹を擦る仕草は美しかった。

ふと、彼の内に疑問がわきあがる。

そんな彼女が、我が子を実験に使ってくれなどというものだろうか。

「ユカは、彼女は承諾したのか」

「ええ。むしろ彼女が進んで志願したのだそうよ。この実験の成果が次代の研究に役立つようにとね」

「まさか、同じサカキの、マサトの凍結精子を――」

「そう。ユカの最後の人工受精は近親者のものを使ったの。皮肉だね。他のどの正常な精子を使っても駄目だったのよ。それなのに、近親者の、実の兄の子供だけが、産まれてきた。もちろん、事前に遺伝子操作はしたわ。」

でも、こんなに著しい結果がでるなんてね。先天性の遺伝病。しかも、生殖能力もないなんて」

ユカとマサトは極めて正常な強い遺伝子を保有するサカキという家系の子孫だ。シイナとフジオミという家系も、ここの血を少なからずひいている。確かに実験にこれほど最適なものもない。

繰り返された他との交配によってそれぞれ血こそは薄れたが極めて近いものである。

薄められては重ねられる婚姻も原因して、ほとんどの血筋は絶えてしまった。

出生率と平均寿命の低下。

年老いぬ内に、人々は死を迎える。

結果として、サカキの家系はユウを残して絶えたことになる。

フジオミの家系は正常な彼だけを残して絶えた。

そしてシイナの家系も絶えた。染色体性半陰陽という不妊の彼女を残して。

その家系の血を継ぐ人間がひとりしか存在しないことによって、彼等は彼等の姓を受け継いだ。すでに名前に意味はなく、血筋をたどる証として。

「待ってくれ。君はユカの最後の子供は、ユウだと言ったな？」

「そうよ」

「じゃあ、マナは、彼女は一体何なんだ？」

僕はずっと、マナがユカの最後の子供なんだと思っていた。だが、彼女は サカキ じゃない。ユウにそれを継ぐ資格はないのはわかっている。登録を抹消されたんだからね。だが、マナは正常なはずだ。あの二人は双子ではないのか？」

シイナは首を横に振る。

「マナは今十四よ」

「ユウは」

「十六」

淀みなく答えるシイナに、フジオミの違和感はある。

「待ってくれ、年齢が合わない。マナとユウは双子の兄妹でさえありえない。マナはサカキではないのか？」

「いいえ。マナもサカキよ。ただし、ユウがいてもいなくても、マナはサカキの名を継げない。あの子の子供が継げても、マナ自身には、その資格はないのよ」

「——じゃあ一体、マナは何だ？」

「わからないのも無理ないわね。あなたもマナのことは知らなかったもの」

そう、それこそが自分の計画だった。

どんな些細な失敗も許されない、滅びかけた人類を救うべき、長い年月を要する計画。

「マナは——」

恐ろしい告白がフジオミの耳に届いた。

マナがユウ達と暮らし始めてから、すでに四日が経っていた。

マナは彼らの生活に驚きながらも、素直にそれを受け入れた。もともと、彼女にとって生活というのは与えられたものを享受することが大前提にあったので、それがドームにいてもここにいても大差はなかったのである。

マナの日課は、ほとんど決まっていた。

朝起きて朝食を終えると、老人とともに散歩をしながら色々な話をする。その後昼食をとり、今度はユウと廃墟や周囲の景色を散策する。そうして夕食をとり、シャワーを浴び、寝る。もちろん、絶えず彼らと一緒にいるわけではない。特にユウはすることがたくさんあるので、散策の最後には、マナはいつも一人にされる。

ここでの生活は、全てユウにかかっているのだから、マナとしても別段文句もない。

ただ一つ、気になることと言えば、朝食を終えて、マナが老人と話をしている時、ユウの姿がどこにも見えないということだけだった。

そして、どんなところでも案内してくれる彼らが、決してマナを近寄らせない場所が一つだけあった。それは、彼らの住んでいる廃墟の、地下へ通じる扉の奥だった。

マナは、ユウが午前中はそこにいるのかもしれないと思ったが、口には出さずにいた。その間、穏やかな時間が流れていたようにも思えるが、それは表面だけのことだった。

あまりにも違いすぎる環境で育ったマナとユウにとって、衝突は必然のことだったのである。

そしてそれは、ほんの些細なことだった。

後になってから、マナも、怒ったユウ自身にも何が原因だったの

か思い出せないほど、そんな些細な。

「何でもいいわ。ユウが決めて」

いつもどおりにそう言ったマナに、ユウは苛立たしげな表情を見せた。

「ユウ？」

「馬鹿じゃないのか、あんた!!」

突然声を荒げたユウに、マナは身を強ばらせた。

「自分のことだろ？ 自分が決めるよ、そんなこともできないのか!？」

二人の会話を、少し離れて聞いていた老人が、間に入る。

「これこれ、ユウ。そんなに声を高くして言うこともないだろう。

見なさい、マナが怯えている」

「だって、おじいちゃん」

「マナにはマナの、ドームでの生き方があったんだよ。それを理解しておあげ。自分の望みばかりを押しつけるのもいい方法とは言えんよ」

宥めるようにユウの肩をたたいて、老人はマナを振り返った。潤んだ瞳はじつと床を見つめていた。

「さあ。マナもそんなに恐がらなくてもいいんだよ」

マナは近づく老人の身体にしがみついてしゃくりあげた。老人はしばらくその背中を優しく撫でていたが、その後マナの身体を優しく離し、視線を合わせるように屈み込んだ。

「マナ、おまえさんも急に怒られたんでびっくりしたんだろう？」

泣きながらも、マナは頷いた。

「だが、ここで私達という以上は、おまえさんもここでのやり方を学ばなければならぬよ。どちらがいいか、選ぶだけでいい。少しずつ慣れていくんだよ。わかったかね」

老人のあたたかな感情が伝わる。

「ええ…」

その日は、老人のとりなしで、何とかことなきを得た。

どちらもまだ、子供だった。

彼らが互いの環境を理解しようと努めるには、絶対的に経験値が不足していたのだ。

それでも、理解し合おうと互いが努力すれば、歩み寄ることはできるのだ。

そう、努力さえ、すれば。

たとえ真の意味で、理解できないとしても。

次の日、マナは外で散策をしていた。

別に目的はないのだが、ここにはマナにとって目新しいものがたくさんありすぎるので、退屈だけは、することがないのだ。

やわらかな風の中、マナは不意に、少し離れた草原に、生き物の姿を見つけた。

「かわいい！！」

思わず、声に出してしまい、慌てて口元を押さえる。

前に学習した時、見たことがあった動物、ウサギだ。耳が他の動物より長いので覚えていた。一匹だけではなかった。大きいウサギが一匹。それより小さいウサギが三匹ほど、かたまっで動いていた。どうやら親子らしい。

（もっと近くで見てみたい）

そう思った。だが、近づいてもいいものなのかどうか、自信がなかった。

どうしようかと悩んでいると、視界の隅にユウの姿をとらえた。

「ユウ、ユウ」

声をひそめて呼びかけ、急いで手招きすると、ユウは訝しげな顔で走ってきた。

自分も興奮していて、マナはユウが手に持っているものにほとんど注意を払っていなかった。

「どうした、マナ」

「ねえ、ユウ、あれ、ウサギでしょう？ 本物のウサギよね。近くにいてみても大丈夫かしら」

マナの指差す方を見つめ、

「いや、だめだ。逃げる」

ユウはすばやく手に持っていたボウガンを取り上げ、ねらいをす
ます。

ボウガンを見たことのないマナでも、それが武器であることはす
ぐにわかった。

「何するの、ユウ!？」

「捕まえるんだ。今日の夕飯にする」
マナは驚いた。

(ウサギを食べる?)

ユウの言葉が信じられなかった。

動物の肉を食べるなんて、聞いたこともない。瞬間に、鳥肌が立
った。

「駄目よ、あんな小さい生き物を殺すなんて!!」

だが、言いおわる前に、矢はボウガンを放れ、狙いを過たずに親
ウサギの背中にあたった。

「!？」

すぐにユウが、ウサギのところに走っていった。子ウサギはすで
に逃げていた。

ウサギの耳を無造作につかんで、ユウは平然とこちらに戻って
くる。

マナは動けなかった。身体が震えていた。

すぐ近くまで来た時、生臭いにおいがした。血のおいだった。

それが、ひきがねになった。

「なんてひどい！！ 命を殺すなんて、最低だわ！！」

叫ぶように、マナは言葉をぶつけた。

ぶつけられたユウは、なぜそんなことを言われるのかわからないといった顔つきで、マナを見ている。

「何言ってるんだ？ 食わなきゃこっちが死ぬんだぞ」

「自分が生きるために、他の生き物を殺してもいいって言うの！？ そんなの間違ってるわ、おかしいわ！！」

「ウサギは貴重なたんぱく源なんだ。マナだって、食べればうまいって思うさ」

呆れ返ったようにユウは肩を竦めた。

「信じられない、こんなひどいことするなんて。あたしはウサギなんか食べない。絶対食べないわ！！」

「わがまま言うなよ、マナ！！」

「自分で決めるって言ったのはユウじゃない！！ あたしが食べないって決めたのよ。どうして怒るの！？」

互いに睨み合ったまま、二人はしばし動かなかった。

口を開いたのは、ユウの方だった。

「勝手にしろ！！」

苛立たしげに足元の瓦礫を蹴りつけ、ユウはその場を離れた。

マナはその場に座り込んで昨日に引き続き、声を殺して泣きだした。

「マナ、夕食を食べないんだって？ どうしたんだい？」

日が傾いてきたころ、部屋にこもったきりのマナの様子を、老人が見に来た。マナはベッドの中で、シーツを頭からかぶってふて寝していた。

「だって、気持ち悪いんだもの」

「気持ち悪い？」

がばつ、とシートを取り払って、マナは起き上がり、老人と向き合った。

「知らなかったのよ。ここで食べているものが、動物の体だなんて動物を解剖するのを、ディスクで見たことがあるわ。あんな小さくて可愛いものの体を食べるなんて、信じられない」

老人は困ったように笑った。

「そうだなあ。何も殺さずに、奪い過ぎることなく生きていけるなら、マナの言うとおり幸せだろうけれど、生きるために、必ず人は何かを犠牲にしているんだよ」

「嘘。だって、ドームでは動物を食べたりしないわ」

「では、マナが食べるものは一体何から作り出しているんだい？」
問い返されて、マナは返答につまる。

「——わからない。知らないわ。だって、いつも用意されてあるから、それを食べているだけよ。ああいうのが初めからあるんじゃないの？」

老人は声を出さずに笑った。

「マナが食べているのは、加工品だよ。もともとあったものをそうとわからないようにつくりかえているだけなんだよ」

「じゃあ、あたしが今まで食べていたものの中には、動物の体もあったの？」

「ドームでの食事を見たことがないから何とも言えんが、多分な。きつと豚か、牛かなんだろうな」

じわりと、マナの瞳が滲んだ。

「あたし、死んだ動物の体を食べて生きてきたのね」

老人は、マナの隣に腰をおろし、そつと手を握った。安心させるように。

「マナ、我々人間は、そういう生き物なんだよ。生きるために、別の命を奪って、それを食べる。人間だけでもない。生き物というのは、そういうふうにしかな生きていけないようにできているんだよ」
「そんなの哀しすぎるわ」

「ふむ。では、こう思うといい。おまえさんに食べられた動物は、おまえさんの一部になったのだと」

「一部？」

「そうだ。食べられた動物は、おまえさんの血に融け、新たな肉となっておまえさんとともに生き続ける。だから嘆く必要はない。おまえさんは、自分の命を大切に生きるんだ。それが動物にとっても救われる」

マナは不思議そうに老人を見つめた。

「それは、本当のこと？」

「おまえさんが信じれば、それはいつでも真実なんだよ」
穏やかに諭されて、マナは何となく納得したくなった。

老人の言葉は、何だかあたたく心に伝わるのだ。その証拠に、さつきまであんなに哀しかったのに、今は全然平気だ。手のぬくもりと一緒に、老人の感情が伝わったからだろうか。だから、マナはそれを信じることにした。

「ユウは、あたしのこと嫌いなのかしら？」

不意に呟いたマナに、老人は驚いて問う。

「なぜそう思うんだい？」

「だって、いつも怒ってばかりだわ。初めはとっても優しくかったのに。怒られたって、あたしにはどうしようもないのに。あたしにとつてはそれが当たり前だったんだもの。急に違うって言われても、わからないじゃない。でも、ユウはそんなことちつとも考えてくれないんだわ」

「マナは大事に育てられてきたのだなあ」

老人の言葉に、マナは微笑んだ。

「ええ。みんな優しくったわ。博士も、フジオミも。周りにいたクローン達もみんな。ユウみたいにいるさく言わなかったし、あたしに怒ったりしなかったわ」

そこまで言うと、不意にマナの表情が哀しげに歪んだ。

「——おじいちゃん、あたしドームに帰りたいわ。ユウに言ってみ

てくれないかしら。ユ

ウだって、きつともうあたしの顔なんか見ていたくないはずよ。嫌われてるんだもの。あたしがいなくなつた方が喜ぶかもしれないわ」「マナ。ユウがおまえさんを嫌いになるなんてことはないよ。ただ、ユウにもわからないんだよ。おまえさんにどう接すればいいのかな。ユウは同じ年頃の子供と話したことがない。周りはみんな大人ばかりだったからね」

「ユウも、同じ?」

「ああ。きつとユウも今頃後悔しているよ。なんとか仲直りしておくれ。おまえさんも、ユウと喧嘩したままドームに帰るのはいやだろ?」

「ええ。でも、ユウは許してくれるかしら」

「大丈夫。おまえさんを許さないなんてことは、絶対にありえないよ。ユウはマナを好きだからな」

「そうならいいんだけど」

階段を上がってくる気配をドア越しに感じて、マナは大きく息を吸った。そして、大きく吐くと、思い切ってドアを開けた。

「ユウ」

振り返ったユウは、少し驚いた顔をしていた。まるで、マナが自分に話しかけるのが信じられないように。だが、すぐにそんな表情は消える。マナのちょうど斜め向かいの自室に入ろうとノブに伸ばしていた手が離れる。

「何? 何か用があるのか?」

「ええと……」

かけるべき言葉を用意していなかったことに、マナは気づいた。声をかければ、どうにかなると思っていたのかもしれない。

「マナ?」

じつとユウを見ていたが、その表情からは何の感情も読み取れな

い。どんな言葉をかけるか考えるより先に、マナはユウの手を両手で捕まえた。

ドームでは感じたことはなかったが、ここへ来てから、マナには不思議な力が現われるようになっていた。ユウや老人に触れているとその時の感情がわかるのだ。もちろん、考えていること全てがわかるのではない。ただ、言葉として感じられない感情を、波のように、温度のように、感じ取ることができるのだ。そして、もっと不思議なことに、ユウに対して、この力はもっとも強く働いた。

ユウが咄嗟に離れようとするのを、そのまますっかり逃がさない。触れる手から流れこんでくる感情。戸惑いと、痛みによく似た切ない感情だ。

「マナ、これはずるい……」

「だって、言葉だけじゃユウの気持ちはわからないわ。ユウは全部を言ってくれないもの。それに、本当のことをいつでも言ってもくれないわ」

手を離さないマナをあきらめ、ユウは溜息をついた。

「言いたくないんじゃないんだ。ただ、どうやっていいのかわからないだけだ——」

「ユウ……」

ユウの言葉は正直だった。彼の感情には様々な揺れが感じられた。「思ってることを正直に口にするのは、俺には難しい。だって、そんな必要、今までなかったから」

マナと接するうちに、ユウも気づいていたのだ。それまで自分と一緒にいてくれたのは大人達ばかりだったことを。多くを語らずとも、彼らはユウの感情の機微を敏感に察してくれていた。だが、マナは違う。自分よりも年下の少女だ。老人達と接してきたようにはいかないのだ。

「言わなくても、いつもみたいに通じるって思ってた。おじいちゃん達はみんな、俺が何にも言わなくても俺の言いたいことわかってた。でも、マナには俺の考えてることが通じないから、どう

していいかわからなくて、苛々してたんだ」

「ごめんなさい。あたし、自分のことばかりで、ユウの気持ち、全然考えてなかったわ。あなたも、平気なはずなのに」

「違う。俺が悪いんだ。俺が勝手に苛々して八つ当たりしたんだ。わかってなかったんだ。俺が考えること、マナもわかるって勝手に思ってたんだ」

互いの中で、相手に対する戸惑いや怒り、悲しみなどの微妙な感情がとけていくのがわかる。マナはさらに言葉を繋ぐ。

「ねえ、あたしたち、もつといっぱい話しようよ。そうしてお互いをもつと知るのよ。そうすれば、きつともつと楽しくなるはずよ」

「話すって、何を話すって言うんだ？」

「何でもいいのよ。心の中までは、わからないもの。伝えたいことはきちんと言葉にしなくちゃ。あたし、あなたに怒られるたびに悲しくなるの。あなたがあたしを嫌いなんだって思ってしまうの。そんなのいやだわ」

「俺は、マナを嫌ったりなんか、してない。ただ、マナが何でも俺に決めてくれて言うのがいやなんだ。だって、何だかどうでもいいように聞こえるんだ。何もおもしろくない、何もしたくない、そんなふうに思ってるからどうでもいいって答えるんだって、思ったんだ」

マナは慌てて首を振った。

「そうじゃないわ。どうでもいいんじゃないの。あたしね、今まで自分で決めたこと、なかったの。だって、そういうことは博士がみんなやってくれたから。あたし、ドームではみんな決めてもらってたの。それが当たり前のことだったから。ずっとそうだったから。」

ここではユウが決めてくれると思ってたの」

「俺は、マナに自分で決めてほしいんだ。それが俺の気持ちと違ってても、同じでも、とにかく、マナの気持ちが知りたいんだ」

「わかったわ。今から、そうする。自分がしたいこと、行きたいと

ころ、見たいところ、自分で決めるわ。それなら、ユウはもう怒らない？」

「——うん」

「よかった」

マナはほっとしてユウから手を離れた。

「ねえ。あたしたち、怒ったりしそうになったら、ほんの少し我慢して考えましょう。自分の気持ちをきちんとわかってもらうためには、どんな言葉を使えばいいのか。例えば、きちんと伝わるのか、そういうことを、一緒にやっていきましょうよ。そうしたら、きつともっと仲良くなれるし、お互いを好きになれるわ」

「俺は、今だってマナが好きだよ」

「ええ。あたしもユウが好きだわ。でも、やっぱりそれって、言葉にしなくちゃわからないじゃない？ あたし、今ユウと話せてよかったわ。ユウの考えてること、ユウが言葉にしてくれたからきちんとわかったもの。あなたも、あたしが考えてたこと、わかってくれたでしょう？」

「ああ」

「ね、そんなふうにお互いのこともっとわかったら、喧嘩しなくてもよくなるわ。それに、前よりもっと好きになれるわ。だから、これからたくさん話をしましょう」

一生懸命に語るマナに、ユウは微笑った。

「わかった」

「よかった。じゃあ、あたし、もう寝るわ。おやすみなさい」

「ああ。おやすみ、マナ」

背中を向けてから、マナは思い返したようにマナは振り返った。そして、ユウに言う。

「ねえ、ユウ。明日からあたしにも、料理の仕方を教えてくれる？」

「マナ！？ 無理しなくていいんだ！！」

また何を言いだすのかといったように、ユウは困った顔をした。だが、マナはユウが先程言ったように、自分で考え、自分で決め

るには、もつとたくさんのかことを知らなければならぬのではな
いかと思つてゐたのだ。

そう話すと、ユウは素直に納得してくれた。

「一緒にゐるんだもの。あたしもできることをしなくちゃ。でも、
自信がないから、ちゃんと教えてね」

マナの料理を習うという初めての試みは、驚きの連続ばかりだった。

何しろ、出されたものを食べるだけだったのだから、料理に関する基本的なことさえも知らないのだ。自分が食べていたものが、本当はどんな形をしていたのか、それを知るだけでも、マナには新鮮だった。

覚えることは、もちろんそれだけではない。

材料を切ったり皮を剥くための器具の扱いや、調理のための器具の名称、たくさんありすぎる調味料の使い方、それらの準備や後始末、また食事のためのテーブルセッティングや食器の使い分けなど、きりがなほど学ぶことはたくさんあった。

だが、今度は楽しく料理をすることができた。

朝昼晩と、料理を作るときだけでなく、空いている時間全てを使って、ユウが最初から丁寧に教えてくれたからだ。マナの失敗を怒ることなく、時間をかけて根気強く教え続けた。

そうして、一週間もすると、食事の支度のほとんどは、マナにもできるようになっていた。もちろんユウも一緒に作るが、下ごしらえ程度だ。仕上げはどんなに時間がかかってでもマナにやらせてくれる。

マナは朝起きて身支度を整えると、すぐに朝食の準備をする。

テーブルを拭き、食器を並べる。

熱いスープとご飯をよそい、昔ながらの箸で、大皿に持ったおかずを取り分け、つつきあう。

老人とユウと三人で、一日の予定を話し合いながらの食事。

他愛のない会話で、笑い合いながらの食事。

それは、マナの今まで知らなかったもの。学びはしたが、実現す

ることはないと思っていたもの、だった。

ユウは食器を洗いながら、マナはお昼のお弁当にするおにぎりを握りながら、これから登る、廃墟の東にある森の話をしていた。

「ねえ、ユウ。動物は、いるの?」

「ああ。うまくすれば、近くで見れるかもしれないな。見たい?」

「ええ。あ、ユウ、お塩とってちょうだい」

「ん」

「卵は茹でたのを持っていきましょう。それと、飲み物も。お茶がいい?」

「熱いのがいいな」

「ええ。これが終わってからね」

手際よく握ったおにぎりを包むと、マナは手を洗い、お茶の支度に取りかかる。

「お湯は沸騰してからよね。でも、入れるのは少し温度を下げたら」

「ああ」

やかんを火にかけるマナを見ながら、ユウが微笑う。

「マナ、料理も、お茶を入れるのも、俺よりずっと上手になった」

「ほんと!?!」

嬉しそうにマナが笑う。自分の料理や手際を誉めてもらうのはとても気分がよかった。マナはのみこみがはやく、器用だったので、コツをつかめば、ユウに教えられたことも二、三度で、すぐにできるようになってきていた。

今までマナが学んできたのはディスクによる知識ばかりだったから、何かを作ったり、身体を動かして体験することはほとんどなかったのだ。

ドームでも、もちろんすることはたくさんあった。

ディスクによる学習、健康を維持するためのジムでのトレーニング

グ、そして、たくさんの検査。それがマナの義務だった。

空いた時間は読書や娯楽ディスクを観るなどではできたが、それもシイナによって厳選されたものを与えられるだけ。だから、時間というものは、マナに関係なく、ただ緩慢に流れ去っていくだけのものでしかなかった。

ここでの時間は、本当にあつという間に過ぎていく。

今までの生活と違い、不便なことはたくさんあった。それまでマナが当然だと思っていたことは、全て他人の手で整えられていたものだったのだ。

しかし、料理を含め、ここでは生活するために必要なことは全て自分達でしなければならなかった。

マナは初めて自分が着る服を洗濯し、干すことを知った。自分の部屋やトイレ、バスルームを自分で掃除することも知った。畑の草むしりも、水やりも知った。目を楽しませるために、花を摘んで飾ることも知った。風の流れ、雲のかたち、太陽の沈む様子で次の日の天候がわかることも知った。星の位置で、方角がわかることを知った。そして、傍らでそれらを教えてくれる人がいることの喜びを知った。優しい人達と一緒に過ごす幸福を知った。

一日一日が待ち遠しく、愛おしく、マナにはとても貴重だった。

今、マナは自分の意志で全て選び、自分のしたいことをすることができた。

自由。

今初めて、それを実感していた。たくさんの言葉を識っていても、本当の意味で知ることのなかったそれは、マナにとって、紛れもなく幸福だった。

小高い山を登りきり、マナとユウは下の景色を見下ろしていた。

もつと西には深緑に覆われた山がそびえている。

「ここからの眺めが、一番綺麗だ」

「ええ。とても綺麗だわ。なんて深い緑なのかしら。なんてあざやかな色なのかしら。山も素敵ね。霞んだ緑が、とても綺麗」

「おじいちゃんが言ってた。あそこは、レイジョウだったんだって」
「レイジョウ？」

「死んだら行くところだって」

「？ 死んだらどこにも行けないわ」

当たり前なマナの問いに、ユウはかすかに笑ってしまう。

「あ、今あたしのこと笑ったでしょう」

「うん」

「だって、おかしいわ。死んだら動けないわ。生命活動が終わるってことだもの」

「身体が行くんじゃないからさ」

「身体以外、人間に何があるっていうの？」

「魂」

「たましい？」

「意識さ」

「死ねば意識は失くなるわ。意識が失くなるということが、死ぬってことだもの。違うの？」

「おじいちゃんは、身体が死んでも、意識は死なないって言ってた。身体はかりそめの器で、俺達はみんな、その器に入っているだけなんだって」

「かりそめ？」

「一時的なってことさ。おじいちゃんがよく使う言葉だ」

「そんなの、聞いたことないわ」

「じゃあ、おじいちゃんに教えてもらうといい。おじいちゃんはそういうことにすごく詳しいから」

言い終えると、ユウはまた遠くへと視線を向けた。だが、マナはユウの先程の話を心の中で反復していた。

「でも、綺麗なところへ行くのはいいことだわ。だって、もし淋しくて何も無いところへ行くのなら哀しいもの」

「そうだな」

それから二人は、景色を見ながら、昼食を取った。

山は深緑に覆われ、本当にとても美しかった。見下ろす景色も茂る緑に覆われ、青い空の端を切り取る、見渡すかぎりの緑の絨毯のようだ。その中にも、若草色がまばらに点在し、太陽の加減であざやかに瑞々しい色合いを変えた。風に誘われるように、葉ずれの音がする。音も色も、一体となった一つの美だった。

「こんなに綺麗なのに、どうしてドームのみんなは外に出て見ようとしんのかしら」

「昔は、こんなに綺麗じゃなかったからさ」

「どういうこと？」

「廃墟を見るよ」

言われて、マナは緑の続く中、一画だけ灰色に埋めつくされている廃墟群を見下ろす。四角柱のでこぼこで、アンバランスな建造物は、確かにお世辞でも美しいとは言えなかった。

「昔は、あんなのが本当にたくさんあって、緑なんかほんの少ししかなかったんだってさ。汚い空気が充満してて、水も土も汚れ放題、ゴミで溢れかえってたんだって」

「ゴミ？ ゴミって何？」

「必要のないものさ。例えば野菜の皮や残り物のご飯や、そんなものかな」

「え？ だって、それは必要なくなかないわ。だって、畑の肥料になるでしょう？」

「廃墟に住んでた人間は、畑を作らない。他にも、新しいものが欲しくなると、まだ使えるものでもどんどん捨てていくんだって。捨てるのが、捨てるほどたくさん物があるってことが、幸せだと思われてた時代があったって。だから、そこでは捨てることは悪いことじゃなかったんだ。そうして、みんなで捨てて捨ててゴミだけが

どんどん増えていった。ゴミを捨てるために木を切ったり、山を削ったり、川や海に捨てたりしたって聞いたよ。そんなの、誰も見たいって思わないだろ？」

「捨てるくらいなら最初から作らなければいいのに。でも、ますます変よ。だって、今はこんなに綺麗じゃない」

「ずっとドームの中にいたから、外が綺麗になってたってわかんなかったんじゃないかな。それに、時間が経てばこの風景だって見れないものになってくる。見れないものを急に目にしても、いいとは思えない。だから、誰も見なくなっただのかも」

「あたしが初めておじいちゃんを見て驚いたみたいに？」

「ああ。でも、マナはもうおじいちゃんを恐いとか思ったりしないだろ？」

「それどころか大好きになったわ」

「そういう気持ちを、きつとみんな持てなかったんだ。だから誰も外に出てこようとしなかったのさ」

哀しそうに、マナは頷いた。

「そうね。こんな綺麗な景色なのに。それを綺麗と感じられないのなら、それはとても悲しいことだわ」

空も雲も太陽も風も木も草も花も、マナにとっては全てが美しいかった。

「おじいちゃんの言ったとおりね。世界は、とても美しい色で溢れているわ。空も雲も土も草も花も、みんな美しい色で満ちている。ねえ、ユウ。あたしがドームの中で見たたくさんのもので、これほど美しいと思えるものはなかった。きっと、人間の作るどんな人工物も、自然の成し得る造形には適わないんだわ」

世界は美しい。

それに気づかずにいるのは、とても淋しく、虚しいことだ。

「人間って、あんまりいいことしてなかったのね」

「マナ？」

「だって、おじいちゃんも言ってたわ。この世界では、人間だけが異質なんだって。人間がたくさんいた頃は、世界はとも病んでいた。やがて、この地上から一人も人間がいなくなったとき、そのときこそ、世界は一番美しいだろうって。」

あたしたちって、本当はそんなに大事じゃないのよ。この世界にとっては、いなくてもいい存在なんじゃないかしら」

「そうかもな。でも、俺は、マナがいてくれてよかったよ。おじいちゃんがいてくれて幸せだった。マナはどう？」

「もちろん、あたしもよ。ユウとおじいちゃんがいてくれて、とても幸せよ」

「それでいいんじゃないかな」
「え？」

「世界にとって必要じゃなかったって、別にいいんだよ。自分が大事に思える人がいて、その人から大事に思ってもらえれば、それだけで、俺はいいと思うんだ」

「世界にとって、異質でも？」

「世界にとって、異質でも」

「他に何の意味もなくても？」

「他に何の意味もなくても」

マナはユウの答えに戸惑った。

「よく、わからないわ。だって、そんなこと言った人、誰もいないもの」

「マナ。別に、俺の考えが本当だとか、絶対だってことじゃないんだ。ただ、俺はそう思ってるって、それだけだ。マナが無理にそう思う必要はないんだ。俺もマナも、違う考え方をする。それと同じで、みんなが同じ考えじゃなくてもいいんだよ」

「本当？ 本当にそれでいいの？」

「だってマナ、ここにいるのは俺達だけだろ？ 他の誰の許しがないのさ」

「だって——」

ドームの話はしたくなかった。ユウがそれをいやがるのがわかっていたからだ。

「ここはドームじゃないよ」

だが、意外にもユウは笑っていた。

「ユウ？」

「ドームでは許されないことだって、ここにいればそんなの関係ない。ドームにはドームの考えやり方がある。ここでは、この考えやり方がある。おじいちゃんはそう言ってくれたよ。俺はおじいちゃんの考え方ややり方が好きだ。だから、好きな方をとる。さ、もう帰ろう」

山を下りきるまで、二人は無言だった。ユウはユウで、マナはマナで、全く別のことを考えていた。次の会話までじつくりと自分の考えを整理してから再び唐突に会話をすることはよくあることだったので、二人は気にもとめていなかった。

「でも、ユウの考え方は、きっと博士は許さないんじゃないかしら」
そして、口火を切ったのは、マナの方だった。

「博士？」

「ええ。あたしを育ててくれた人よ。とても優しくて、素敵なの」
瞬間、ユウの表情が厳しく、険しいものになったことに、マナは気づいた。

「シイナか？」

「ええ、そうよ。どうして知ってるの？」

「シイナ——」

じっと空を睨んで、しばしのち、ユウは低く呟いた。

「あいつは、人殺しだ——」

その言葉に、マナは驚く。

「どういうこと？ 博士が、誰を殺したっていつの？」

「マナ、俺も三歳まであそこで暮らしてた」

「あそこって、ドームのこと？」

「ああ。そうだ」

「嘘、だって、あたしはユウを見たことないし、そんなこと聞いたことないわ」

「会ったとしても、小さかったし、覚えていないのかもしれない。あいつがマナに教えなかったのは当然だ。自分が殺した子供のことなんか、他人に話す訳がない。でも、俺は忘れない。あいつが俺にしたことを。決して――」

「嘘よ！ 博士は優しい人だもの、そんな、恐ろしいことできるわけないわ！！」

「あんたはあの女を知らないんだ」

「じゃあ、ユウは知ってるっていうの？ あたしはユウよりもずっと長く博士と一緒にいるのよ。あたしの知ってる博士は、そんなひどいところ一度も見せたことはなかったわ。どうしてそんなこと、信じられるって言うの！？」

次の瞬間、ボタンをひきちぎるようにユウは上衣を剥いだ。

「！？」

膚けた衣服の間から覗く右下腹部には、マナにはわからなかったが銃で撃たれた上に、化膿し、爛れたまま消えなくなった痣が、はつきりと現われていた。

「この傷を見ろ、あいつにやられたんだ。俺はまだ、生まれて三年しか経ってなかった。あいつは俺を外へ連れていった。ドームの外へ。初めて見る外の景色に喜んでた俺を、あいつは後ろから撃った。この傷を見ても、嘘だって言えるのか！？」

「――」

反論できなかった。わかるのだ。なぜわかるのかはわからないけれど、ユウの言葉は真実だ。それがわかっていているからこそ、信じたくなかった。

大好きなシイナ。

優しくて、綺麗で、何でも知っていて、何でもできる、大好きな彼女がそんな恐ろしいことをするなんて。他に何も考えられない。

ただ、苦しかった。

「――」

こぼれる涙をとめることはできなかった。

ユウはマナをじっと見つめていた。

「マナは何も知らないんだ。それはマナのせいじゃないけど……」

「――」

ユウはそのまま、一人で廃墟へと戻っていった。

「博士……嘘よね、そうよね……」

夕暮れが近づき、部屋の中が徐々に薄暗くなる。

しかし、マナは動かなかった。

控えめなノックの音にも、扉を開けて入ってきた老人にも、気づいてはいたが動けなかった。

「マナ。今度は一体どうしたんだね？」

自室の床に座り込んだまま、声をかけられてようやく振り返ったマナは、泣きはらして真っ赤になった目で老人を見上げた。

「おじいちゃ……」

声を出すと同時に、涙があふれる。

マナは老人にしがみついて声をあげて泣いた。

「ユウに聞いても何も答えんし。おまえさんはおまえさんで部屋を出てこんし。最近は喧嘩することもないから安心していたのに、よくもまあ、おまえさんたちは」

「だって、ユウが、ユウが……」

「ユウが何か、おまえさんに言ったのかい？」

マナの頭を優しく撫で、老人は問う。

「ユウが、博士に殺されそうになったって言ったの。でも、博士は優しい女なのよ。あたしを育ててくれたの。本当に、素敵な女なのよ。おじいちゃん、本当なの？ 博士が、ユウを殺そうとしたの？」

老人は一気にまくし立てたマナの言葉を理解すると、一瞬眉根をよせ、それから、首を振った。

「そのことなら、私には、わからんのだよ。実際にそれを見たわけではないからな」

老人はマナをベッドに座るよう促し、自分も彼女の隣に腰を下ろ

した。

「ユウを見つけたのは、私と死んだ妻だったんだよ。私達は、ここに住む前は、もつともつと南の方に住んでいたんだ。そう、もつとドームに近かった。

その日は仲間も含めて山菜を採っておこうと遠出をしたんだ。歩き疲れて川の近くで休もうと、私達は水音に従って川へと出た。しばらく休んでいると、妻が突然川へと入っていった。驚いてあとを追っていったら、岩の影に引掛かっただけだったりしていたユウを見つけたんだよ。

私達はすぐにユウを住処へ運び込んだ。幸い、弾は貫通していたが、医療設備などなきに等しい。応急処置と輸血だけで、あとはユウ自身の生命力にかけるしかなかった。幾日も高熱が続き、傷は塞がらずに膿を持ち、私達は何度も、あの子が死ぬのではないかと思った。ようやく熱がひいても、一月以上、ユウは言葉を話すことさえできなかった」

布ごしに触れた腕から、老人のやるせない痛みが伝わってくる。

強い感情や相手との接触は、マナに自分のものではない感覚を伝えてくる。ドームで暮らしていたときよりも、それは、今、確実に強くなっていた。

（でも、相手の気持ちがわかるのはいいことだわ。つらい時は、誰でも理解してほしいものだって、おじいちゃんが言っていたんだもの）

マナは老人の皺だらけの手をとり、優しく握った。

老人は目を細めてマナを見返した。

「ユウは我々よりもはるかに高い知能を持っている。そのせいかどうかはわからないが、あの子は三歳であったが、誰が、なぜ、自分を殺そうとしたのかすでに脳裏に焼き付けていたのだ。一月を過ぎて、あの子が初めて口にした言葉を、私は今でも覚えている。

『このままにはしない——』

私は、そこにいるのが本当に三歳の子供なのかと思ったよ」

「じゃあ、やっぱりユウ以外、犯人が誰かはわからないのね」

「問題は、誰がユウを殺そうとしたかではない。どうでもいい相手なら、ユウはきっとああまで思い詰めはしなかっただろう。」

信じていた者の裏切り。それが、ユウの心に憎しみを植えつけたのだ。だからこそ、私は、あの子が憐れでならんのだよ」

老人は首を横に振り、忌まわしい回想を追い払うかのような仕草をした。

「ユウは心に傷を負ったまま成長した。今まで一緒に暮らしてきた私達の誰も、その傷を忘れさせることはできても、癒してやることはできなかった。」

だが、マナ、私はおまえさんなら、ユウの受けた傷を癒してやるだろうと思つとるんだよ」

「あたしが？」

「私は、ユウがおまえさんをさらつてくることに反対はしたが、本気では止めなかった。」

私はユウが可愛い。ずっとその成長を見守ってきた。

だが、私は確実にユウより先に死ぬ。だから、おまえさんに傍にいてやってほしいんだよ。おまえさんはユウと歳も近い。何よりユウが、一番にそれを望んでいる。」

ユウは一人で生きられる能力を持っていながら、独りでは生きられない。ユウの受けた傷は、それほど深くユウの根本を抉ったのだ」

真摯な眼差しを、マナは戸惑いつつも受けとめた。

老人は本気だ。

本当に、マナがここにとどまることを望んでいる。

だが、それはできないことだ。

マナには使命がある。

それはマナの存在意義に等しい。

「——あたし、ユウのこと好きよ。おじいちゃんもよ」

後ろめたい気持ちを隠せないまま、マナは言葉を繋ぐ。

「でもね、あたしはフジオミの子を産まなきゃいけないのよ。だから、ずっとここにはいられない、と、思う……」

「それがおまえさんの意志なのかい、マナ？」

「え？」

顔を上げて老人を見つめるマナの瞳は、戸惑いの色を露にしていた。

「おまえさんは、他の誰に言われたのでもなく、自分の意志で、そのフジオミとかいう人の子供を産みたいのかい？」

真っすぐに見据える瞳に、ごまかしはきかない。

「——わからない。そんなの、考えたこともないわ。だって、そういわれて育ってきたんだもの。それが当たり前だって、思ってたんだもの。それじゃ、いけないの？」

「では、考えなさい。幸いここには考える時間だけはある。マナ、自分がどうしたいか考えるんだよ。他の誰に強要されることなく、自分の心で、見極めなさい」

老人の言葉は、それまでマナの考えもしなかったことを彼女自身に選択させようとしていた。

義務として、使命としてではなく、自分の意思で考える。

それは、マナにとってはとても難しいことだった。

少しずつ新しい世界——別の視点からの見識——を理解しているとはいえ、マナはまだ十四歳の子供に過ぎなかった。

（ここにいなさいって、言ってくれればいいのに）

ドームにいたときは、全てシイナがマナのすべきことを教えてくれていた。

マナはただ、彼女の言うとおりにすればよかった。

疑問さえ、抱いたことはなかった。それが正しいのだと、ずっと

思っていたからだ。

「おじいちゃん、あたし、間違ってたの？」

不安げに、マナは老人を仰いだ。

皺だらけの乾いた手がマナの瑞々しい若い手を取る。

「こんな世界だ。間違っていることが、悪いことだとは言えんよ。我々人間は、確かに選択を誤った。だが、今更それを否定できない。そのまま進むしかない。だからこそ、決断は自身でするのだ。自分が決断したことなら、その後悔ですら自分だけのものだ。誰かの所為にして生きても、それは本当に自分の生を生きたとは言えんのだよ」

シイナは長い廊下を歩き、カタオカの部屋へと向かっていた。オートドアには自由な入室を許可することを示す緑のライトが点いていた。そのまま部屋の前に立つと、すみやかにドアは左右へ開いた。「お呼びと聞きましたが」

「ああ。入りたまえ」

カタオカは議会の長でもある。その理由は彼が議員の中でも最年長者であるとともに、ていのいい周囲の責任転嫁でもあると、シイナは思っていた。

議員と呼ばれる者は、そのほとんどが四、五十代である。いま現在の人間の平均寿命は六十歳前後だ。

後は死を迎えるだけの人々は、全てにおいて希薄で、もはや己れの意志すら持っていないようにも思える。

実際、彼等にはどうでもいいことなのだ、この世界のことなど。

もはや己れの死にさえ関心を持たない彼等は、当然のようにマナのこともユウのこともフジオミのことも、未来のことさえ考えることを放棄している。

「シイナ、未だにマナはユウとともに外の世界で生存しているというのは本当なのかね？」

困惑すら見せない、静かで控えめな口調。

シイナはうんざりしていた。

「本当です。記録を見つけました。このドームへの移住し始めた頃にここを離れて外の世界へ出ていった人間がいたそうです。ここより北の廃墟群にかつての生活跡が見られました。かなり前のものなので、なんらかの理由により、そこからさらに北へ移住したと思われます。おそらく、ユウはその子孫である人間達に保護されたのでしょう」

「どうする気かね？」

「ユウを追います。マナを取り戻す、それだけです」

感情の起伏すら見せないシイナの口調に、カタオカは眉根を寄せた。

「君は一度彼を殺した。また、殺すのかね」

「生きているのなら、死ぬまで、何度でも。彼の能力は、私達には驚異です。私のミスでした。あのとき、私は彼の死体を確認しなかった——」

「愛情はなかったのかね、彼に対する」

「愛情？ 私に——？」

高らかに、シイナは嗤った。

「そんなものが、今の私達の中に存在すると、本当に思っているのですか？」

傑作だわ。そんなものを持ち得ない完全体であるあなたに、言われるなんて」

シイナは冷たく微笑った。本当に、美しい笑みでカタオカを見た。「私は失敗作ですよ。そんな感情など、持ち合わせているわけがない。あなたでさえ持たないものを、どうして私に持てるとお思いですか？」

「シイナ——」

「あなたに、愛するということがわかるのですか？ あなたとて、誰も愛さなかったくせに。全てを愛しているなんて、言わないでください。当の昔に私達から失われた感情について今更議論しても、何にもなりません」

「——君の考えていることが、私には理解できないのだ。私達とは違うものだからか？ 君の望みはなんだ？ なぜそんなに、君の意志は強い？ どうしてそんなに、私達と違うのだ——」

「あなたはもう、理解することさえ放棄してしまった。わからないのは当然です」

シイナは一礼してカタオカに背を向けた。

「シイナ、こだわりを捨てたまえ。もはや、誰もがわかっている」
その言葉に、シイナは立ち止まる。だが、振り返りはしない。

「我々の滅びは止められない。もう、どうあがいても無理なのだ――」

苛立ちに似た感情を、シイナは微かに顔に表した。
ゆっくりと振り返り、カタオカに視線を据える。

「あなた達は、あきらめたまま残る時を過ごせばいい。
何も残さず、意味もなく、死ぬまで生きればいい。

私は違う。

私はあきらめない。黙って、何も残さず生きたりしない。

それが例え気休めにしか過ぎなくても、私は自分の存在意義を見
つけだします。死ぬ最期の瞬間まで、あがき続ける――」

強い意志が、そこにはあった。

けれど、それは、カタオカにとって最も痛ましく思えるものだと
いうことを、彼女には理解できなかった。

「――シイナ、私は、君が憐れでならない」

だからこそ、こんな言葉にも、傷つきはしない。

「憐れみなら、いくらでもかけてください。今更遅かったなどと責
めたりはしません。

でもそれは、私にとってもう何の意味もない」

それ以上の言葉はなかった。

シイナは再び振り返ることはなかった。

そしてそのまま部屋を出た。

「――」

長い廊下を足早に歩きながら、シイナは堪えきれない怒りを感じていた。

くだらない不毛な会話を続けたことを後悔していた。
もはや話し合う価値さえないのに。

シイナはカタオカを尊敬していた。カタオカは、フジオミにもシイナにも分け隔てなく接してくれた。シイナには、生殖能力がなかったにもかかわらずだ。

だが、それは愛情からではない。ただ単に、どうしてもよかったのだ、彼にとっては。

だからこそ、あんな決定ができたのだ。

フジオミの発言を尊重しよう。シイナ、君は君の義務を果たしたまえ。

その時、シイナは自分を支えていた世界が壊れたのを知った。
愛されていると信じていた。

例え自分に、生殖能力がなくても。

だが、残ったのは屈辱と、嫌悪と、怒りと、絶望だけだ。

シイナ。私の決定は君をそんなに傷つけたのか。

あの日を境にすっかり変わってしまったシイナに、カタオカは苦しそうに尋ねた。

まるで、後悔でもするよう。

だが、もはやシイナには彼の贖罪など、どうしてもよいことだった。

壊れたものは戻らない。

優しい過去へは戻れない。

許してくれと言いたげなカタオカに冷たい一瞥をくれて、あの時

シイナは彼に背を向けた。

もはや彼に対しては、軽蔑しか持てなかったのだ。それなのに、フジオミのために自分を犠牲にしておいて、なぜそんなことが言えるのだ。

組み敷かれて恐怖に泣き叫んだあの時間を、踏み躪られズタズタにされた誇りを、自分は一生忘れないだろう。

忌まわしい過去が甦ってくる。

同時に、嫌悪が身を貫く。

嘔吐感に襲われ、シイナはきつく瞳を閉じた。

震える身体を必死に押さえつける。

あの過ぎてしまった時間を思い出す時、いつも身体が拒絶反応を起こす。それ以外は、フジオミに抱かれているときでさえ、こんなことは起こらないのに。

「――」

震えが徐々に収まるのを感じながら、シイナは改めて、今回の事件の元凶となったユウに対して、新たな怒りを感じた。あの時、きちんと殺してさえいれば、計画は順調だったのだ。

自分の失態だ――シイナはきつく拳を握った。

「何としても、マナは取り戻す。今度こそ殺してやるわ。死ぬまで、何度でも」

マナと会わない日が三日続いた。

彼は今、マナが唯一来ない地下にいた。いつものように。

この一年、日課となった作業を機械的にこなす。

体を動かしている間は何も考えなくてすむが、作業が終わればまた、現実を直視しなければならない。

必要な電源だけを残し、それ以外のすべてが消えていることを確かめると、ユウは部屋を出ようとして、ふと足を止めた。

ここから出たら、マナに会ってしまいかもしれない。

その時、自分は一体何を言えるだろう。

マナの前であんな風にシイナを非難したが、自分にその資格はあるのか。

自分だって、全てをマナに話しているわけではない。

こうして真実に触れる部分は隠したままだ。

全てを教えもせずに、マナに判断しろなどと、本来なら言える訳がないのだ。

マナが苦しいように、ユウもまた苦しかった。

マナを傷つきたいわけではなかった。

ただ、哀しいだけだ。哀しみだけが、日毎に強く、この胸を圧迫していくから。

時折、呼吸していることすら億劫になる。

今ここにいる自分が、嫌で嫌でたまらない。

許してほしいのに。

一番に誰よりも。

どんな愛でもいい。

必要としてほしい。

ここにいてもいいのだと言ってほしい。

望むのは間違いなのか。

愛されないから憎むのか。

シイナという女を、怒りなしに思い起すことは不可能だった。

だが、今ユウは怒りだけでない感情を、呼び起こさずにはいられなかった。

向けられた微笑みを。

あたたかな眼差しを。

優しく語られた言葉を。

もうとつくに忘れかけていたあたたかな感情まで甦るのは、苦痛に近い。

ユウは胸を押さえた。

あの頃は、全てを信じていられた。

世界は自分のためだけにあるように、幸福だった。

「――」

シイナの面影と、マナが重なった。

シイナのように、いつかマナも、自分から去る。

欲しいものは、決して得られない。

どうして、自分は――

ユウは顔を上げ、振り返り、ただ一点を凝視した。

「……………どうして」

決して彼を受け入れない、その姿を。

「教えてくれ。どうして、あんたのその目に、俺は映らないんだ。

生きているのに。触れられるのに。どうして俺だけを切り離すんだ

……………」

それは決して届かない、声だった。

地下室を出てから真っ直ぐ自室へ戻ったユウだが、気分が晴れずに外へと向かおうと部屋を出、階段を降りた。

「ユウ？」

階段の踊り場で呼び止められ、苦い思いで顔を上げる。

だが、今は誰とも話をしたくなかった。口を開けば、自分はまたマナにあたりちらすだろう。

ユウは黙って階段を下りて外へと向かった。

追いかけてくる足音が響く。

「ユウ、待つて。あなたに話があるのよ」

マナの声に、ユウは振り返った。

彼女は真っすぐにユウを見つめていた。

彼が戸惑いを覚えるほど一途に。

マナは階段を駆け下り、ユウの前に立った。

「ごめんなさい、ユウ。あなたのこと、疑ったりして。とても反省してるわ。」

でも、あたしは博士が好きなの。ユウを好きなのと同じくらい、博士もフジオミもおじいちゃんも好きなの。ユウは博士を好きなあたしを、許してはくれない？ やっぱり、一緒にいるの、いやかしら」

遮られるのを恐れるように、マナは一息に喋った。

「――」

ユウは遠い瞳で、マナを見ていた。

そのままマナを通り抜け、自分を動かすものに想いを馳せる。その感情がどういふものかは、自分からはあまりにも遠すぎて、理解することはできなかったけれど。

マナの意志は、もう揺らがない。

彼女は自分で考え、そして選んだのだ。

「シイナは、あんたに優しかった？」

穏やかなユウの問いに、マナはしっかりと頷いた。

「とても優しくったわ」

マナの気持ちは、マナだけのものだ。

自分の憎しみが、自分だけのものであるように。

ユウは、それを理解した。そして、受け入れた。

「それなら、いい。あんたはあんたが信じたいものを信じればいい。誰も、人の心に強制はできない。俺が憎む分、あんたは愛せばいい。俺が許さなくても、あんたが許せばきっとサインは幸せになる」

不思議と、心は穏やかだった。

マナの瞳は、いつも迷わずに自分を見据える。

マナは、今ここにいる自分を、確かに見てくれる。

「マナ、あんたは強い女だ」

「強い？ あたしが？」

「ああ。とても、強い」

自分よりもずっと。

自分は一体、誰を見ているのだろう。

「俺はずっと、あんたに会いたかった。あんたが俺を知るずっと前から、俺はいつか、あんたに聞きたいと思っていたことがあったんだ」

「それは何？」

「もういいんだ。もう、どうでもいいことだから」

目の前のこの少女が愛しかった。

だがそれは、決して許されないものであることも知っていた。

「それでも、俺は、ずっとあんたに会いたかったんだ——」

もう何度も見直し、完璧に内容を覚えてしまった報告書に、シイナはもう一度目を通していた。

「――」

結果はどうあっても同じだった。

だからこそ、マナを育てたのだ。

未来のために。

ただそれだけのために。

「母体が、必要なのよ。完全な生殖能力を持つ女性体が――」

出来得る限りの精子と卵子は、凍結保存してあった。

だが、マナがいなければ、それも意味をなさない。

生殖能力を備えた子供の誕生には、その子を産む母親の存在が必須不可欠なのだ。

シイナはもう一度、書類に視線をやった。

唯一絶対の条件。

女性の体内で育てられること。

妊娠・分娩は母子ともに多大な負担をかける。よって、どちらにも安全な方法として科学技術の粋を懲らし、極めて完璧に近い人工子宮なるものまで作り上げた。

初めは、彼等も安心していただ。いつでも欲しいときに子供を得られるようになったのだから。そして、それにより結婚という概念も、彼等の意識の中では徐々に重要性を失くしていった。

誰でも、いつでも好きな時に子供を得られるのだ。精子か卵子、己れの持つものとは異なるとどちらかを提供してもらえれば。

しかし、世代を重ねる内に、人工子宮で育った子供はクローンで

あるなしに関わらず、肝心の生殖能力を持たなくなっていくた。

原因に気づくまでには、世界の人口は驚くほどに減っていたという。そこまで至って、ようやく彼等は自分達の現状に危機感を抱いたのだ。

このままでは、人類は滅んでしまうと。

今や人工子宮はクローニングにのみ使用される。

出来得る限りの技術を駆使して母体に近い環境を整えてものこの事実、一体何を意味するのだろうか。

やはり生命の領域は、人の手には負えぬ代物なのか。

「もつと母体がいれば――」

全てが枯渇してきている。

終末が、近づいている。

産まれない子供。

産まれない女。

本来、女兒のほうが生存率が高いはずなのに、産まれてもすぐに死んでしまう。

ようやく育っても、生殖能力をもたない女が多かった。

だが、それでも、子宮さえあれば、人工受精は可能なのだ。卵子も精子も、ストックはいくらでもある。

前世紀の人間達は愚かだったと、シイナは思った。

彼等の代なら、まだ未来を救うことは出来たはずだ。女性はまだたくさんいたのだから。

だが、彼女等は未来を考えなかった。

兆しはあつたろうに、未来を救うことを放棄した。

女達は、自分達の子供を産むことに、あくまでもこだわった。自分達に連なる子供を産むことにだ。その結果が、今の未来だ。

己れのエゴで、未来が滅ぶというのに、なぜ、誰も、強制的にでも彼女等を従わせなかったのか。

そして、そのつけを、なぜ、今自分達が支払わなければならないのだ。

わずかに血を繋いできた人間がこのドームで暮らしてきてからすでに2世紀が経とうとしていた。

いくら耐久性に優れていても、当時の科学力で造られたものでは年月には勝てない。

新たに造り出すには、人員も、技術も、資源も、少なすぎるのだ。

このままでは、半世紀も待たずに人間は滅びる。

いきつく思考に、シイナは身を震わせた。

「——いいえ。まだよ、まだだわ。まだ、私達は救われる。マナが、救ってくれる」

きつく、シイナは唇を噛みしめた。

「シイナに、会っているかね」

カタオカは独り言のように呟いた。背を預けた皮張りのソファーが、ぎしりと音をたてる。

「ええ。マナの居所がつかめないので少々焦っているようです」

カタオカと向かい合って座るフジオミは、グラスを口へ運んだ。

「マナ——か。いくつだったろうか、その子は」

「十四です。もう五年もすれば、ユカのように美しい娘になるでしょう」

「ユカ——そうか、彼女が死んで、もう十四年も経ったのか……」

ユカは、カタオカの伴侶であった女が産んだ子供だった。もちろん彼の子供ではない。

子供の産まれにくいこの社会では、いつしか一妻多夫制を取り入れていた。

身体の弱かった妻は、二人目の子を産むとすぐに亡くなった。

それがツシマとサカキの血を引くマサトとユカの兄妹だ。

カタオカ自身は、自分の子供をとうとうその腕に抱くことはなかった。

ユカは何度も身籠ったが、そのほとんどは流産であった。

生殖能力があり、妊娠することができなのに、なぜか育たない子供達。

その度に衰えていく彼女の身体。

カタオカはユカに数えるほどしか会っていなかった。彼女自身に、興味すらなかった。

妊娠、出産は、多大な疲労を、肉体とその精神にかける。

子供を産むためのだけの道具のように扱われる彼女。

そのためにユカは複数の夫を持っていた。

それでも、彼女はそれを不満に思うことさえないようだった。

未来のために。

誰もが口をそろえて言う。

その内の一人に、かつては自分も入っていた。

若かった自分は未来を考えながら、その実何も理解してはいなかったのだと苦々しく思い知る。

現実を見るがいい。

（未来など、何処にある——？）

彼女を、シイナを、マナを、女達を犠牲にしてまで繋ぐ未来に、何の価値があったというのだろう。

いきつく先は、すでに決まっていたことだったのに。

それはすでに、同胞達にも、考えればわかる簡単なことだったのだ。そう。考えさえ、していれば。

自分達は、どこかで何かを間違った。

今になつてそれに気づく自身の愚かさを、カタオカは自嘲した。

「カタオカ？」

「いや、すまない。考え事を、していてね。もし計画が失敗しても私は別にもう、どうでもいいのだがね。シイナには聞き入れてもらえなかったが」

「シイナにも、本当はそんなことはどうでもいいんですよ。彼女に必要なのは、自分に何ができるかということです」

そして、フジオミから逃れること。

マナがいれば、彼女はフジオミから自由になれる。

フジオミ自身それに気づいていた。が、別段気にも止めなかった。自分が満たされていれば、相手などマナでもシイナでも変わらないと思えた。

「フジオミ、君は自分の立場をどう認識している？ その義務を、どう考えているんだね？」

カタオカにとって、それは真摯な問いであつた。だが、フジオミには愚問だつた。

なりたくてなつたわけではなかった。

ただ生まれたときから、決められていただけだ。

全てが自分の意志ではどうにもならないことだつたから、彼にとつては全てがどうでもいいことだつた。その点では、フジオミもまた、マナと同じく『自身』を持たない人形に過ぎなかった。

「僕には何も考えることなどありませんよ。義務は果たしましょう。ですが、それ以上を望まないでください。望まれても、僕には期待に応えるだけの気力も情熱もありはしないんです。

あなた達が、僕等をそう造つた。ならばあなた達もそれ以外を考えるのはやめてください。今更後悔されても、何にもならない。

中途半端な優しさを見せるより、彼女を殺してでも止めてやった方がいいですか。それさえもできないのなら、見え透いた偽善を振

りかざすのもやめるべきです」

「――」

黙り込むカタオカを、フジオミは憐れにも思う。確かに彼はシイナを傷つけただろう。義務を優先して、その信頼を裏切ったのだから。

だが、彼だけを責められようか。

カタオカもまた、自分達と同じに義務を強いられた人間であるに過ぎないのだ。

「すみません。言いすぎました」

「いや。いいんだ」

大きな吐息をついて、カタオカは首を振った。

「実際、我々は袋小路に追い詰められている鼠のようなものだ。マナと君の子供が産まれれば、それで最後だ。それ以上増えることはないだろう。そして、マナにも正常な子供が産めるとは思えない。ユカがいい前例だ。今更過ちを繰り返すつもりはない。いずれ終わるなら、今終わらせても、大して変わりはないとも思えるのだよ」

「シイナにとっては、もっと前に言っただけだった言葉ですね。なぜ、今更それを僕に言うんですか」

「あの頃は、私もまだ、ありえない可能性に縋っていたんだよ。そして、シイナを傷つけた。私は後悔しているんだよ。君のために、シイナを犠牲にしたような結果になったことを」

フジオミは大して気にした風もなく肩を竦めた。

「正直、僕には全てがどうでもいいことなんです。シイナのように何かに情熱をそそぐ対象もないですね。僕はただ――」

「ただ、何だね」

「したいことのある人間がいるなら、そちらを優先させてやったほうがいいと思っただけです。そんな風に何かに夢中になれるなんて、尊敬に値しますからね」

「だが、シイナの情熱は危険だ。すでに一度、殺人まで犯しかけている。生命の尊さを、彼女は真に理解していない。生命の重さはみ

んな同じだ。例え、それがどんな生命でも」

フジオミはカタオカの言葉に、純粹に驚いた。彼の口から、生命の尊厳を聞こうとは思ってもいなかったのだ。

「平気でクローニングを繰り返してきたあなたとは思えない言葉だ」
フジオミの揶揄に、カタオカは表情を強ばらせた。誰にでも触れられたくない部分はある。痛みを伴う後悔であるなら、それは尚更だ。

カタオカは強ばった口調で告げる。

「私が常に平静であつたと、信じたいのならそうすればいい。だが、問題は私ではない。

シイナだ。彼女を、止めなければ——」

「止められますか、あなたに」

「いいや。できないだろう。シイナは二度と、私に心を開くまい。

私は彼女の信頼を裏切つた。君では、止められないかね」

「できません。信頼を裏切つた点では、僕も共犯でしょう。僕等は彼女に義務を強いた。それを続ける以上、それ以外で彼女を拘束することはできませんね」

シイナの面影が脳裏をよぎる。

フジオミの知っているシイナは、いつも怒りと嫌悪しか彼に向けない。フジオミの方は、いつもそれを興味深く観察していた。シイナを見ていると飽きなかったのだ。

あの決して殺せない情熱は、一体何処から生まれるのだろう。同世代で生まれていながら、この違いは一体何なのだろう。

フジオミにはわからなかった。彼等の立場が、その魂の形成を大きく変えてしまっていたことを。

選ばれた者と、選ばれなかった者との。

「——彼女を、自由にしてやってはいけないかね？」

カタオカの思いがけない言葉に、フジオミは我に返る。

「すみません。今なんと？」

「シイナを、自由にしてやってはどうだろう」

ためらいがちなカタオカは断定を避けてはいるが、フジオミにはそれが明白だ。

自分から、彼女を自由にしてやってくれとカタオカは頼んでいるのだ。

随分虫のいい話ではないか。今更。

「では、マナを見つけてください。マナがいるなら、シイナはいりません。いつでも自由にしてやっていい」

「フジオミ——」

「それができないなら、お断わりです。あなたと同じように僕だって自分が大事だ。見返りもないのに奉仕なんてできませんよ」

その日の午後、珍しく部屋にいなかった老人を探して外に出たマナは、廃墟の北の少し離れたところに、不思議なものを見つけた。草を隔てて剥出しになった土が広がっている。均等な間隔に、おびただしい数で土が盛り上がっている。そこに何かを隠しているように。

その小さな山の上には、がっしりした木が立ってある。その木の全てを、マナはすぐに数えることはできなかった。あまりにも数が多すぎて。

よく見ると、立てられた木には新しいものもあれば、朽ちかけてぼろぼろのものもあった。

老人は手前の方の、まだ新しい木の前に立っていた。そこには、草に混じって、可愛い小さい白い花が疎らに咲いていた。

マナは静かに老人に近づいた。だが、声はかけなかった。老人は静かに瞳を伏せて両手をあわせ、そのまましばらく動かなかった。

「おじいちゃん。ここは何？」

だいぶ待って、痺れを切らしたマナが問う。

老人がマナに視線を向けた。

「墓だよ」

静かな声が、淋しげに響いた。

「はか——？」

「そう。みな、私をおいて死んでしまった。彼等は、ここに眠っている」

「死んだ人を、土の中に埋めるの？」

非難めいた声音に、老人は穏やかに微笑って振り返った。

「そうだよ。それこそが連鎖というものなんだよ、マナ。我々はあらゆるものを殺して食している。だから、死ぬときが来たら、私達

は今まで奪ってきたものを還さなくてはならないんだ」

「還すって、どうするの？ 死んでからどうやって還せるの？」

「私達が、唯一所有できるもの、肉体を、土に還すんだよ。死ねば身体は腐敗する。それがよい土壌を育て、そこに新しい生命の誕生を齎らすんだ。」

ここに眠る彼等は、土に還ったのだ。土と同化して新たな命を産み出し、自らもやがて新たな命となる。それこそが自然の理だ。全てが等しく循環することが。だが、一時、人間はそれを放棄したんだよ」

「どうやって？」

「体を、焼いたのさ。焼いて、石の囲いの中に閉じこめた。思えばその頃から、人間はおかしくなりはじめたのかも知れん」

憂えた瞳で、老人は遠くを見つめていた。

「大地には浄化作用がある。形あるものを分解し、己れに取り込み、一部として、もう一度新たなものに産み出す。全ての命を再生する、そんなことができるのも大地だけだ。人間は、それを忘れてはいけなかった」

老人は、その時初めて、マナを振り返った。そして深い感慨をこめた眼差しで彼女を見つめた。

「マナ。全てのことには、意味があるのだ。それが何なのかを探すのが、人間の生きるということだ。この世界で意味のないものは何もない。全ての生命に、意味があるのだよ。そう、死ぬまで、いや、死んでも——」

「死んだら、それで終わりでしょう？」

不思議そうに、マナが首を傾げる。

「ある意味では、それが正しい。だが、昔、人は死んでも魂は残るのだという思想があったんだよ」

「ユウに前に聞いたわ。あの西の山は、魂が行く場所だって。レイジョウっていうんでしょう？ 魂って、あたしたちの意識なんですよ」

「ああ。魂とは、人間の核とも言えるものだ。そう、例えるなら、我々は肉体という入れ物の中に閉じこめられた意識であるということだ。だから、肉体が生きている間は、それが自分だと錯覚する。だが、肉体が死ねば、魂は解き放たれる。痛みもなく、哀しみもなく、苦しみもない彼方へ」

「かなたって？ 魂は、何処にいくの？」

「さあ、それは何処か私にもわからない。まだ死んだことはないからなあ」

「死んだことないのに、どうして魂がどこかにいくなんてわかるの？」

「信じているんだよ。死で全てが終わるなんて、あんまりいい考えとは思えないからね。そういえば、古い宗教には生まれ変わりの思想もあつたそうだが――」

「おじいちゃん、宗教って何？」

「私にも、よくはわからんがね、ある特定の、神、または特別な人間の思想を信じることだそうだ。いわゆる、人の心の支えとなったものか」

「神って言うのは？」

「人間ではないもの、我々を、いや、我々だけでなく、この世界全てを創つたもののことをそう呼ぶのだ」

マナは眉根を寄せた。

この神という概念を、彼女は理解できなかった。

マナの知識の中に、神というものはない。宇宙、地球、生命の誕生、それら全てはディスクの中で見聞きしただけのことで完結していたからだ。

シイナは、マナに倫理や哲学という抽象的な精神世界に関することを教えなかった。非科学的なものを全て排除したのだ。

そんな彼女の表情から、老人は簡単に付け加えてやった。

「要するにだ、我々普通の人間とは違い、できないことを全てできるものことだ」

「じゃあ、ユウだわ！　ユウが神なんだわ、ユウはあたしたちと全然違う。なんでもできるし、髪も目も、色が違うわ」

老人は苦笑した。

「ユウは人間だよ。あの髪と目の色は——そう、生まれたときからの病気なのだ。血が近すぎるために起こる」

「血が近いって、どういうこと？」

「マナと同じ血を持つもの。例えば、マナの母親、父親、マナの母親から産まれたマナの兄妹、マナの両親の兄妹、その子供達。これらはみんなマナと同じ血を持つ。近親者、または血族ともいう。血族同士婚姻を結ぶことで起きやすい遺伝病、これは身体のメラニンという色素が欠乏して、黒い組織をつくれなくなるというものだ。だから髪と目、肌の色が薄く赤くなってしまう」

「じゃあ、ユウのあの力は？」

「それは私にもわからん。あれもまた濃すぎる血が要因なのか」

「ドームには、ユウみたいな人はいなかったわ。血が濃すぎるというのは、いけないことなの？」

「血族結婚は古い時代からの禁忌とされてきた。不妊や障害、遺伝病など、さまざまな弊害が現われるからだ」

「ああ。わかるわ。ドームにはクローンがたくさんいるけど、クローンはみんな子供を作れないもの。それに、クローンなんて与えられたことしかできないの」

マナの無邪気な口調に密かな侮蔑が含まれていることを悟り、老人はゆっくりと首を振った。

「マナ、そんなふうに言っではいけない」

厳しい口調に、マナはにわかに怯えた。

「おじいちゃん？」

「マナ、おまえさんは優しい子だが、知らなすぎる。この世界に生きているものは全て慈しむべきもの、慈しまれるべきものなのだ。

生命とは、そこに貴賤を見いだすものではない。みな平等に尊いものなのだ。例えばそれが、自然の理に反するものであっても」

マナはまた、混乱した。そんなことを、シイナは教えなかった。クローンは、知能のレベルも高くなく、人間としても扱われていない。自分達とは違うのだと、以前自分に言っただ。そのことを老人に語ると、老人は小さく笑った。

「では、おまえさんは、自分とは違うユウや私を、生きる値打ちのないものだと思っのかい？」

「そんなー！ 一度も考えたことないわ、そんなこと。あたしは、ユウもおじいちゃんも大好きなもの」

「では、その気持ちを他のものにも向けておあげ。誰しも、望んでそうと生まれることはできないのだよ。そして、それは誰の所為でもない。」

望んだものになれなかったことを苦しむものは多い。それを蔑んではいけない。その傷を、理解しようと努めなければならないのだよ」

「ええ、そうね。ごめんなさい、おじいちゃん。あたし、いけないことを言っただわ。おじいちゃんやユウを蔑んだりするつもりはなかったのよ」

「わかってるよ、マナ。おまえさんはずっと、そう教えられてきたのだから無理もないね。ただ、これから知ってほしいのだよ。この世界に生きる全てのものの美しさと、かけがえのなさを。」

この世界は、全てが愛おしい存在で満ちている。今ここにこうして立って呼吸をしていること、それだけで、私は本当に生きていることがすばらしいと思うのだよ」

「知りたいわ、あたしも」

憧憬の眼差しで、マナは老人を仰いだ。

「どうして、おじいちゃんの考えていることは、こんなにあたしと違うのかしら。あたしは、今まで呼吸することの意味を感じたことはなかった。それがどんなに大切なことなのかも。教えられなきゃ、わからないものなの？」

「そうだね。自分で気づける人もいるが、マナ、私も教えてもらっ

たんだよ。母にね」

「母—— お母さん　ね！！　教えて、おじいちゃん。お母さんて、どんな人？」

マナは老人の衣服の袖を握り、話をせがんだ。老人はそんなマナに優しく語りかける。「そうだなあ。とても、落ち着いていて、静かで、いつも母からはいい匂いがしていたのを憶えているよ。優しく、私をとて愛してくれた。時には厳しく、叱つてもくれた。

一度、私が——そう、おまえさんよりもまだ小さいとき、母のいつけを破つて、夜、外に出たことがあつたんだよ。幸い何事もなく戻ってきたが、そのとき初めてぶたれたんだ。そして、その後彼女は私を抱きしめて泣きだした。本当に彼女は私を愛してくれた。

ああ。懐かしいね。本当に、とても、懐かしいよ。彼女に会いたい。話したいことがたくさんあるのに」

「いいわね。おじいちゃんには、お母さんがいて。あたしにはいないわ。あたしのお母さんて、どんな人だったのかしら。おじいちゃんのお母さんみたいに、優しい人だったのかしら」

「きつとそうだよ。子供を愛さない母親はいないからね」

「本当？　みんなそうなの？　あたしがおじいちゃんを好きみたいな気持ちなの？」

「そう、そして私がおまえさんとユウを思う気持ちと同じものだ」
触れた手から感じる暖かな感情に、マナは安堵した。老人は、マナを愛してくれている。それがわかるのはとても嬉しかった。

「親が子を愛するということは、自分を愛するのと似ている。自分から分かれた一部だから、きつと切り離して考えるのは難しいのだろう。だが、それは決してそれ以上であつてはならないのだ」

「それ以上って？」

「母と息子。父と娘。彼らは最も惹かれあつてはならない存在だ。何故なら彼らは最も濃い血を、その身に有しているのだから」

「ああ。つまり、　伴侶　としてはいけないってことなんでしょう？　それに、歳も離れすぎているもの、無理があるわ」

「マナは何にでも興味をもつ。ユウ以上だ」

老人が笑う。だが、マナは当然のように頷いた。

「だって、あたしは何も知らなかったのよ。ドームで教えてくれたことも大事だけど、それはほんの少しだわ。あたしは知りたいのもつともつと、たくさん、いろんなことを」

マナは老人の腕にぐつとしがみついた。

「おじいちゃんは好きよ。あたしに色々なことを教えてくれるもの。あたし、ここに来てよかった。そうじゃなかったら、何にも知らないまま、博士に言われるままだったかも知れないもの」

老人を見上げると、皺深い顔が静かに微笑んでいた。

「あたしね、考えてるの。まだ決められないけど、おじいちゃんのこと、きちんと考えてるのよ。自分がどうしたいのか。」

でも、それを決めるには、あたしまだ何も知らなすぎるの。だから、決めるためにも、もつともつというんなことを知りたいの」

驚いたことに、少しずつ、マナは人形から脱し始めていた。自己を確立し、学び始めている。その成果は恐るべき速さでなされているのだが、それにつれて、マナの心には同時に不安が芽生えていく。「どうして博士は、あたしに何も教えてくれなかったのかしら」

次の日もマナは老人とともに時間を過ごしていた。ユウはいつも食事が終わると約束のように地下に姿を消す。

マナはそれを、今でもずっと不思議に思っていたのだが、やはり口にすることはなかった。それに、ユウのいない間に老人の話を聞くことが、マナにとっては楽しみになっていたからだ。

「今日は、海の話しよう」

「うみ？」

「そう。この地球の表面の大部分を占める太古からの水だ」

「知ってるわ。塩分を多量に含んでいるんでしょ？ だから塩辛いつて。青いのよね？」

「ああ。とても美しい色をしているよ。マナにも見せたいね。あの美しい海の色を」

マナを見ていながら、老人の瞳は、どこか別の——そう、マナのまだ見たことのない海を見ているのだろう。老人はマナに話して聞かせるとき、よくそんな遠い瞳をするのだ。

マナは正直、それが羨ましかった。

老人の感情を読むことはできるが、見えないものを見ることはできなかつたからだ。

「初めて地を覆う濃く青い水を目のあたりにしたとき、涙が出たよ。こんなにもすばらしい光景が、あっていいものかと。」

私達の住む星の、なんと美しいことか。

よせてはかえす波のさざめきが、どこまでも続く海。わたる風さえ、命の鼓動をはらんでいた。私の生涯の中で、あれほど美しいものを見ることは、きつともうないだろうなあ」

食い入るように見つめているマナに気づいて、老人はそっと笑ってマナの頭を撫でた。

「今度、ユウに連れていってもらうといい。あの子の力ならば、すぐだ」

「本当？」

「ああ。きつとマナも感動するよ。涙が出るほど、綺麗だと思うさ」
「だといいんだけど」

マナは正直言って、そのように感じられるか自信がなかった。

老人の目と自分の目は、いつもどこかが違うのだと思えてならなかった。

遠い瞳をして、そこにはないものをとても幸せそうに見る老人の目は、きつと、自分とは比べものにならないほど美しいものを感じられるのだと。

「マナ、ユウを頼むよ」

「？」

「あの子は、きつとおまえさんのためなら何でもしてくれる。どんな願いも、叶えようとするだろう。私から言うのも何だが、おまえさんを、この世界の何よりも大事に思っている。それを、忘れないでくれ」

その言葉に、何故かマナは不安なものを感じとった。

「どうしたの、おじいちゃん？ 急にそんなこと言いだして。何だかもう会えない、何処か遠くへ行くみたいに」

「おや、そんなふうに聞こえたかね？」

「ええ。嫌だわ、おじいちゃん。そんなこと冗談でも言わないで。あたしたちをおいて、何処へも行かないでね」

「どうやら、マナにいらぬ心配をさせてしまったようだ。さあ、中へ入ろう。もう日があんなに高い」

老人は杖を持ちなおし、開いているほうの手でマナの肩に触れた。その足取りが、何だかいつもより重そうに見えた。

「ああ。きつともうすぐ……」

一歩一歩、ゆっくりと前に進みながら、遠くを見つめて、老人は呟いた。

それが一体何を意味するのか、マナはまだ知らなかった。

その日に限って、老人はいつまでも部屋から出てはこなかった。

「ユウ、おじいちゃんどうしたのかしら。いつもなら、とつくに起きてくるはずなのに」

「起こしてくる。マナはここにいて」

ユウが老人の部屋へと走っていく。

マナは自分の席につき、湯気のアがる朝食を見つめていた。
しばしのち。

マナ！！

「！？」

突然、ユウの声が脳裏に響いた。触れてもいないのに伝わってくる強い感情。こんなことは初めてだ。

「ユウ！！」

いやな予感がする。マナは食堂を出、老人の部屋へ急いだ。扉は開いたままだ。中へ駆け込む。

「おじいちゃん、ユウ！！」

ユウは老人を抱き上げ、ベッドへと運んでいる途中だった。

「おじいちゃん、どうしたの？」

「倒れたんだ。マナ、薬を。いつものやつでいいから」

「ええ」

ベッドの脇に落ちていた錠剤を、マナは拾いあげた。備え付けのバスルームに行き、グラスに水を入れ、戻ってくる。

ユウは老人の背中を支えて起こしてやると、薬を口に入れてやった。グラスを口に運び、ゆっくりと傾けると、老人は静かにそれを飲んだ。

「おじいちゃん、大丈夫？」

マナが心配そうに問うと、老人は安心させるように笑った。

「……ああ、大丈夫。少し、目眩がしてね。薬を飲んだから、もう落ち着くだろう……」

だが、老人の顔は血の気が引いて、病的に白くなっている。

「何か食べないと」

「ああ、では何か温かいスープでももらえるかい？」

「ええ。すぐ温めて持ってくるから、待ってて」

マナは急いで部屋を出ていった。食堂へと向かう足音が、老人の部屋まで微かに届いていた。

「——その時が、来たの？」

老人に視線を向けずに、小さくささやきが洩れた。

立ったままのユウを見、老人は椅子に座るよう促した。

「ああ、そろそろ、いかねばならんようだ」

「おじいちゃん——」

「わしがいなくなっても大丈夫かい……？」

血の気のない渴いた指が、椅子に座ったユウのそれに重なる。ユウは取り乱したりせず、落ち着いていた。

「——大丈夫だよ。わかってたから。何も心配ない」

「そうか……」

老人は悼ましげにユウを見つめた。まるで苦痛を堪えるかのように。

「おじいちゃん？」

「——おまえは、いつも哀しみを内に閉じこめてしまう。私達は、おまえに、心をそのまま伝えるということを、教え忘れてしまったのかもしれないなあ。

でも、ここにはマナはいない。私達だけだ。心をそのまま表してもいいんだよ」

ユウが困惑したように老人を見る。

「どうしてそんなことを？」

「おまえが、とても可哀相に見えるからだよ。いつも、決して手に入らないものを求めすぎているように、とても可哀相に見える」

老人の言葉に、ユウは一瞬目を睨り、それから痛みをこらえるように、一度ぎゅっとかたく目を閉じた。

「ユウ——」

「おじいちゃんの言うとおりだ。俺には、何も手に入らない。いつでも、俺は独りだ」

老人はかすかに首を振る。

「独りではないよ。おまえは、決して独りではない」

「——だって、おじいちゃんは逝ってしまうじゃないか。どんなに俺が頼んでも、みんな先に逝ってしまうじゃないか!!」

「ユウ——」

「いつだって、俺は独りだ。みんな俺から離れていく」

涙の伝うユウの頬を、老人は引き寄せ、横たわったままの胸に抱いた。

「ユウ。私が死んでも、おまえは独りにはならない。マナがいるよ。あの子が、おまえの傍にいてくれる」

ユウはかすかに首を振る。

「——マナだって、いなくなる」

「いいや。マナはおまえを選ぶよ。きつとずっと、マナはおまえといてくれる。私達が与えてやれなかったものを、マナが、おまえに惜しみなく与えてくれるだろう——」

マナが部屋にいても、老人は眠っていることのほうが多くなった。起きていても呼吸が荒く苦しそうに見える。

量が増える薬は、老人の体力を奪わないように深い眠りを与えてしまうのだ。

「おじいちゃん、いつになったらよくなるの？ あたし、何かでき

ない？　どうしたら苦しいのがなくなるの？」

珍しく起きていても楽そうに見える老人に、マナは問うた。

「ありがとう、マナ。でも、これはもう治らないんだよ」

「どうして？　病気なんでしょ？　だったら原因がわかれば治せるはずだわ」

「マナ、これは病気ではないんだ。寿命なんだよ。年をとりすぎて、命がつきるんだ。死ぬんだよ、もうすぐね」

穏やかな口調にそぐわない内容だった。

マナはじつと老人を見つめていた。老人は横になったまま顔だけをマナに向けていた。

「――死ぬって、どういうこと…？」

聞きたくないように、小さな声だった。わかっているのに、何だかそれはまだマナにとって理解できるものではなかった。

生命活動が停止すること。それが死。

知識としてはわかる。だが、それが自分にとってどのような作用を及ぼすのか、見当もつかなかった。

「もう二度とこの目を開けないということだよ。もう二度とユウやおまえさんとこんなふうには話せないということだよ。」

死とは、永遠の解放でありながら、時には残酷だ。愛しいものの永遠の別れも、確かにそこには在るのだから」

「いや……」

マナは首を振った。

「マナ」

「いや、そんなのいや」

マナは老人の死という言葉にわかに理解した。もう会えなくなるのだ。もう、話せない。この瞳が、マナがあんなに憧れた美しい思い出を遠い眼差しで見ることがなくなるのだ。それは想像でも耐えられないことだ。

「おじいちゃん、いやよ。どこにも行かないで」

涙が、マナの頬をとめどなく流れる。

「マナ、哀しんではいけない。残される者の哀しみが強いと、死んだ者は心安らかにはなれない。いつまでもそこにとどまり、安らぎの場所に向かえなくなるんだよ——」

「そんなのわからない。あたしたちをおいていくの？　ここにあたしとユウを残して逝ってしまうんでしょ？　そんなのいやなもの」
溢れる思いを止めることはできなかった。

今、老人が死を迎えようとしている。彼女の大好きな老人が、死ぬとしていているのだ。

「いや、いや、おじいちゃん。死んじやいやよ。何でもするから、お願い、死なないで」

「マナ……」

「嘘でしょう、おじいちゃん。何処にもいかないで」

涙に濡れるマナの頬に、老人はそつと手を伸ばした。だが、その手は震えていた。挙げることさえ、もうやっとなのだということが、マナにさらなる恐怖を与える。

「マナ。自分が何であるのかを見極めるのだ。生きていること、今ここに在ることだけでは、意味はない。意味とは、自分が決めるもの。自分で見いだすもの。それがあれば、どんなになっても、きつと生きていることはすばらしいと思える。」

私は幸せだったよ。とてもすばらしい人生だった——たくさんの仲間達と、そしておまえさんたちとすごせて、本当に、良かった」

老人の呼吸が、浅く、速くなっていく。

「おじいちゃん!？」

震える老人の手を、マナは必死で握った。少しでも震えを止めた。そうしないと、存在がすりぬけていってしまいそうに思えた。

「マナ。おまえさんはいいい子だ。本当に、いい子だ。おまえさんとユウは、私の生涯の中で、一番あざやかな色だった——」

老人は、マナの背後にじっと立ち尽くすユウを見た。

「おじいちゃん……」

「ユウ。マナを守りなさい。全ての苦しみと哀しみから、マナを守るのだ。それができれば、おまえも幸せになれる。きっと」

「おじいちゃん、でも、俺は——」

「幸せになりなさい。二人とも——」

静かに、老人は目を閉じた。

それきり、動かなかった。

「おじい、ちゃん……？」

答える声は、永遠に失われていた。

「いや……」

永い凍えた沈黙の後、マナの声がかすれて漏れた。

「いやよ、こんなのいや。おじいちゃん、目を開けてよ。ねえ、起きて。約束したじゃない。もっとたくさん、いろんな話をしてくれるって言ったじゃない——」

「マナ」

「いやよ、いやあつ——」

「マナ——」

ユウがマナを強く抱きしめた。その瞬間、混乱したマナの中に、自分のものではない、もつと強く、もつと深い哀しみが入り込んできた。息がつまる、激しく、心の中だけで渦をまく感情の嵐。

こんなに深い哀しみを知らない。

こんな哀しみを、自分は持てない。

これは、ユウのものだ。

「マナ、仕方ないんだよ。おじいちゃんはもう、十分生きたんだ。人間は、いつか死ぬんだ。おじいちゃんにも、その時が来ただけなんだよ」

マナは顔をあげ、そう言うユウを見つめた。

彼は、何処か虚ろにも思えた。

マナはユウの背に手を回し、しっかりと彼を抱きしめた。

「ユウも泣きたいのね。泣いてもいいわ。一緒に、泣きましよう。

そうしないと、ユウのほうが、壊れちゃうわ」

「――」

「苦しいの。これから、どうすればいいの。大好きだったのに。ずっと一緒にいたかったのに」

マナは肩に、ユウの熱を感じた。押しつけるようにマナの肩に額をあて、彼はずっと黙っていた。

それでも、ユウは泣かなかった。泣けなかった。

深く激しく、その心の内は泣き叫んでいるのがわかるのに、その感情は、決して表には出てこない。

冷たい壁に押さえつけられているように、ユウはただ黙ってマナを抱きしめていた。

「まだマナは見つからないの!？」

一日おきの外からの通信は、シイナにとって決して喜ばしいものではなかった。

「搜索を続けなさい。あらゆる廃墟を探すのよ。見つかるまで、帰ってくるのは許さないわ!!」

叫んで、シイナは通信を無理矢理切った。

「――」

苛立ちでおかしくなりそうだ。

搜索に向かわせたクローンは、そのほとんどが外に出たことのない者達だった。それ以外のクローンはドームを維持する重要な仕事についているため、そこを離れられない。かといって、シイナが自ら行くことは許可されない。彼女はあくまで指揮することを許可されただけ。搜索中彼女の身に何かあっては困る故に。

シイナは、このドームの全てを掌握している。全ての機能は彼女を通じて円満かつ円滑に行なわれる。カタオカは指導者ではあるが、事後報告という形で把握するのみ。その全権をシイナに任せている。彼がシイナより強い権限を持つのは、あくまで議会においてだけなのだ。

「――」

カタオカも、その他の議員も、クローン達も、シイナにとっては役に立たない厄介者にしか思えなかった。

考えることさえ放棄した人間達。受け身にしかない無能者。役に立たないのなら、生きている価値さえないのに。

いつそ一思いに殺してしまいたくなる。生きていなくてもかまわない。さっさと死んでくれればいいものを。

「まったく、なんてことかしら」

椅子に身体を沈み込ませながら、シイナは大きく吐息をついた。
マナとユウの搜索は、思うようにはかどらなかった。

無理もない。いくら小さな島国とはいえ、それは、他の大陸と比べてのことだ。

ドームは、島の中心よりやや南に位置している。気象すらコントロールし、苛酷すぎる環境を克服したとはいえ、無理な変動はどこかに歪みを引き起こす。穏やかにめぐる四季に対して、少しでも無理を避けようとしての対策であった。

登録上の全ての人間とクローン達が南へ下った今、北はすでに彼等にとって未知の世界であった。減少しすぎた人口と進んだ科学力のために、穀物等を育てるための広大な土地を確保せずともよくなつたのだ。

打ち捨てられた建造物は廃墟と化し、各地に無残な姿を残している。多分、そのどれか一つに、ユウ達は隠れ住んでいるのだろう。

「マナ……」

マナの身が、シイナは何より心配だった。外の世界で、どんなに恐い思いをしているだろう。どんな苛酷な生活を強いられているのだろう。

考えるだけでいてもたってもいられなくなり、シイナは振り切るように部屋を出た。探しに出たい自分を押さえ、仕事に戻らなければならぬ。感情を静かに押さえる。足早だった彼女の歩みが、徐々に戻っていく。

緩いカーブを描く廊下から直線に移動し、エレベーターへ向かう。その時、温室を見ているフジオミの姿を捕らえた。足音に気づき、フジオミが振り返る。

「やあ」

今は、彼の存在そのものにさえ、苛立つ。

こんな男が、今もつとも価値あるものだと。

エレベーターに乗り込むシイナに続き、フジオミが独り言のように呟く。

「議員達は、もうあきらめたほうがいいと思っっているらしいね」

同時に身体にかかる浮遊感。

「あなたも同じ意見なの」

フジオミは肩を竦める。

「さあ。どうでもいいというのが僕の正直な意見だが、君が望むのなら、君の好きにすればいい」

この事態が、彼にとって実に愉快なことにように、フジオミの口調は嬉々としていた。

エレベーターが止まると同時に、ドアが開く。黙って廊下を歩きだすシイナに、背後からのフジオミの声。

「知っているかい、シイナ」

不愉快さを隠さず、シイナは応える。

「何なの？」

「その昔、この地には美しい鳥がいたそうだよ。だが、人間が自分達の利益を満たす間にその鳥は繁殖の場を奪われ、乱獲され、とうとう滅んでしまった。

自分達の愚かさに気づいた人間があらゆる努力をしても、結局それらを救うことはできなかった。滑稽なのはそのあとさ。別の大陸の全く同じ鳥を連れてきた。スぺアがあるからそれで代用しようとした」

歩みを止めて、シイナは振り返った。

フジオミはかすかに微笑っていた。

「何が言いたいの」

「いいや。ただ、人間の愚かさはどんなに時を経ても変わらないものなのかなってね」

肩を竦めるフジオミを、シイナは苛立たしげに睨んだ。

「私の行為が愚かだと言いたいの」

「耳に痛い真実は素直に聞けないものさ。僕が何を言っても君の耳には冗談としか聞こえないようにね」

シイナの手が上がった。その手は鋭く風を切り、フジオミの頬を

打った。

「——いきなり、それはないんじゃないか」

あくまで彼は冷静に問う。それがシイナをより怒らせることを知っていたながら。

「人類は滅びないわ。フジオミ、あなたには選ばれた者としての自覚が足りないようね。くだらないおしゃべりに時間をつぶす暇があるのなら、マナの心配でもすればいいわ」

「マナ、マナ。君の口から出る言葉はその名だけだな。まるで恋しているみたいだ」

フジオミが息をつく。

「君自身の望みは？ 君が君のために望むことは、何もないのか」

「私の望みは、マナが叶えてくれる。それこそが望みよ。そのためには、何を犠牲にしてもいい」

「じゃあ、僕の意志も？ マナを愛していなくても、それが義務だと」

「ええ。そうよ。あなたとカタオカだって、私に義務を強いたじゃない。私はあなたを愛してもいい。それでもあなたは抱いたわ。同じ気持ちで、マナも抱けばいい。」

大いなる目的の前には、個人の些細な感情など、意味を持たない。あなたとカタオカが私にそれを教えた。あなたには責任がある。義務がある。特別な人間なのよ。それを、もっと自覚して行動しない」

「だがそれは、僕が望んだわけじゃない。君が望んで、そう生まれたでもないように」

冷徹とも思えるフジオミの声。

その言葉の無責任さを、彼は自覚していなかった。そしてそれが、どれほどシイナを傷つけるのかも。

「今まで散々その恩恵に浸かってきたくせに、今更勝手なことを言わないで!!」

堪えきれずに、シイナは叫んだ。

「あなたはマナとの間に子供をつくるのよ。それがあなたの義務だわ。私は私の義務を果たしている。あなたもあなたの義務を果たしなさい。それができないのなら、今後私に指一本触れないで!!」
感情の高ぶりを押さえきれずに、シイナは不覚にも溢れた涙にさえ気づけなかった。

気づいたのは、フジオミが意外にも、彼女がかつて一度だけ眼にしたことのある表情を、その顔に見せたからだ。

あの、悪夢のような夜の中で――

いやっ、フジオミやめてやめて、もういやあ!!

二の腕を押さえつける確かな痛み。

どんなに泣いて叫んでも、彼は繋いだ身体を離してはくれなかった。引き裂かれるような痛みと恐怖しかなかった。あまりの恐怖と苦痛に、彼女は自ら意識を手放した。目を覚ました時には覚えてくれる悪い夢だと祈りながら。

だが、目を覚ましても始まるのは悪夢の続きだけ。全てが終わった後に残る身体の奥の鈍い痛みを感じて、シイナは無言で涙を流し続けた。

シイナ。

ためらいがちにかかる声。

虚ろな瞳で見返すシイナには、おぼろげなフジオミが映る。
まるで、大切にしていたものを自らの過ちで失ったような、どう

しようもない後悔とよく似たやるせない感情が、瞳から伝わる。

それは、壊れてしまった二人の関係を、もしかしたら彼も悔やんでいたのかもしれないと、一瞬だけシイナに思わせる表情だった。

めまぐるしく甦る忌まわしい過去に、シイナの身体が拒絶反応を示した。

嘔吐感と激しい震えに身体が支えを失い、膝が崩れる。

「シイナ!？」

驚いたフジオミがとっさに腕を伸ばし、シイナを支えようとする。

「私に、触らないで!!」

鋭い眼差しで、シイナはフジオミの手を拒んだ。

「――」

「言ったはずよ。義務を果たす気がないのなら、私に触れるのは許さない。」

さあ、消えて。その姿を私に見せないで。これ以上、私を不愉快にさせないでっ!」

伸ばした手を、しばしさまよわせ、フジオミは引いた。

視線が絡み合い、わずかな沈黙の後、フジオミは無言で背後のエレベーターに乗った。シイナは壁に寄り掛かり、しばし泣いた。

空が、心なしが高くなっているように思えた。

気がつけば、雲は以前よりずっと高い位置に浮かんでいた。

老人の遺体は、清潔な布に包まれ、外に運びだされた。

墓所に埋めるのだと、マナはユウから聞いていた。

老人の墓は、あの、白い花の咲く墓の隣だった。

前の日からすでに掘られていた穴に、ユウは静かに老人の身体を横たえた。ゆっくり静かに、土がかけられていく。

「おじいちゃん、苦しくないの？」

虚ろなマナの声に、ユウもまた、虚ろに答える。

「マナ、これはもうおじいちゃんじゃないよ」

感情のない呟き。

ひどく乾いた答えに、不意にマナは意識をはっきりとユウに向けた。

ユウは黙って土をかけていた。

その眼差しさえも虚ろだった。心は、何処にもなかった。

「ユウ——」

「おじいちゃんだったものは、もうこの身体の中にいない。俺達が会いたいおじいちゃんは、もう何処にもいないんだ」

ユウの心は、傷つき、痛み、壊れかけていた。

いつもそうだったのだ。

だが、それを押さえつけているから、いつまでも癒されることがない。

今はっきりと、マナは理解した。

（いけない。ユウを傷ついたらままにしておいてはいけない）

痛烈に、そう思った。

「違うわ、ユウ。そんなことない。おじいちゃんはいるわ。この世界の何処か、死んだ人がみんな行く場所で、ちゃんとあたしたちのことを見ていてくれてる」

機械的に作業を続けるユウの腕を、マナは捕まえて止めた。

そうして、自分の方を向かせた。

作業を止められても、ユウは動かなかった。

こんなユウを見たくなかった。

ユウを呼び戻したかった。

老人の死とともに失われようとする、ユウの本質を。

虚ろな眼差しは決してマナを捕らえてはいなかったが、それでも、マナは言う。

「ねえ、ユウ。おじいちゃんは言ったわ。死んでも終わりじゃないつて。おじいちゃんは解放されたのよ。痛みも哀しみも苦しきもない彼方へ、みんなが待つてる場所へ、行くことができたのよ」

真摯なマナの言葉に、ユウは虚ろな眼差しをゆっくりと向け始める。

「おじいちゃんはいるの。あたしたちがいつか死んだら行ける場所で、待つてる。あたしたちは、そこでまた会えるの」

「また、会える——？」

「ええ。会えるわ」

「——そこには、みんながいるんだ」

「ええ、そうよ」

マナも、本当にそんな場所があるのかはわからなかった。

けれど、信じたかった。

そして何より、この目の前の傷ついた可哀相な魂を少しでも癒したかった。

「そうよ。痛みも苦しきもない場所で、みんな幸せなの」

「だから、『哀しんではいけない。哀しみが強いと、死んだ者は心安らかにいられない。いつまでもそこにとどまり、安らぎの場所に

向かえなくなる』――」

虚ろなユウの声。

「――でも、マナ。俺は 哀しいんだ」

不意に、静かな呟きがこぼれた。

「ユウ――」

「魂だけでもいい。どんな姿でもいい。ここに、いてほしかった。

哀しすぎて、どうにもならないんだ。どうして、俺はいつも――」

そっと、マナはユウの頬を引き寄せ、抱きしめた。温もりを、伝えるように。

「俺がおじいちゃん達と暮らし始めた時は、もっとたくさんいた。みんな優しくかった。とても楽しかった。大好きだった。でも、みんな死んでしまったよ、俺をおいて。おじいちゃんも死んでしまった。もう誰も、いなくなつた」

マナには、ユウの哀しみがわかつた。彼を愛しただろう人達の愛、彼が愛しただろう人達への愛が、痛いほどわかつた。

「あたしがいるわ。ユウ」

哀しまないでとは、言えなかつた。

自分はユウより長く老人とすごしたわけではなかつた。それでも、その死は心に深い哀しみを残した。愛した人達が自分をおいて死んでしまうのを常に見届けねばならない哀しみと苦しみは、一体どれほどの傷を、彼の心に刻みつけたのだろう。

「あたしが、あなたの傍にいる」

「マナ、あんただけは、俺より先に死なないでくれ。俺はもう、おいていかれるのはいやだ――」

「ええ。約束するわ。あたしは決して、あなたより先には死なない」
ユウの身体は震えていた。

安心させるように、マナはいつまでもユウの身体を抱きしめていた。

ユウは眠らなくなった。

眠れなくなったというほうが、正しいかもしれない。そして、マナの傍を離れなくなった。まるで、目を離したらもう二度と会えなくなるかとも言うように。

大丈夫だとマナが何度言っても、ユウは親の後を追う雛鳥のように離れない。

マナは不安だった。傍にるのがいやなのではない。眠らないユウが、日に日にやつれていくのがわかるからだ。だが、マナは自分がユウのために何をすればいいのか、わからなかった。

そうして、一週間が過ぎたある朝、ユウは倒れた。

「ユウ!？」

かけよったマナは、ユウの顔に手をやった。呼吸はしている。生きている。

「よかった、死んじゃってない……」

きっと身体が限界を訴えたのだろう。ユウは意識を失っていた。眠っているのだ。

マナの力ではユウをベッドまで運ぶことはできなかった。ユウの部屋に行つて枕と掛布を取ってくる。

意識を失つていても、ちっともユウは楽そうに見えなかった。眠りが浅いのか、身体が何度も痙攣する。白い肌は、死ぬ間際の老人を思わせた。

頭の下に枕を入れ、掛布で身体を覆う。

（ユウも、おじいちゃんみたいに……）

そう考えただけで泣きたくなる。

マナは老人に会いたかった。彼なら、きっとユウを救ってくれるのに。

人は何度でも生まれ変わって、何度でも地上に甦るのだと、老人は言った。

「でも、そんなに待てないわ。いつになるのかも、それがおじいちゃんなのかも、わからないわよ……」

今、会いたいのだ。

戻ってきてほしいのだ。

「淋しいわ、おじいちゃん。ユウもあたしから離れていったら、どうすればいいの？ あたしも待つてればおじいちゃんのところに行く？」

口に出してから、突然それが一番いいことのようにも思えた。

老人が戻ってきてくれないのなら、自分達が老人のところへ行けばいいのだ。

そこには老人が言ったように、きっとみんながいるのだろう。

ユウが失ってしまった、たくさんの愛しい人達が。

そこに行けば、ユウも自分も、淋しくはないだろう。

信じられないだろうが、昔この地にはたくさんの人がいたんだよ。たくさん車が行き交い、夜には星よりも輝く光が地上を照らした。その時、きっと人間はこの世界で自分達にできないことはないだろうと思っていたに違いない。

この世界に比べれば、人はとても無力なものだ。だが、彼等はそれにとうとう気づけなかった。気づかないまま、過去において過ちを犯し、未来において償いを求める。

この美しい世界の中で、人間だけが、醜いのだよ。なぜなら、人間だけが 産み の力を軽んじるからだ。生命を軽んじ、冒瀆し続ける。その愚かな行為の結果が、今のこの世界なのだ。

いずれこの地上に、人間はただの一人もいなくなる。人だけがないこの地上は、きっと永遠に近い時を過ごすだろう。全ての風が地上を優しく通り抜け、そこには私達が決して得られなかった全ての静穏がある。

目に浮かぶようだよ。その光景が。

それがきつと、この世界で最も美しい光景になるだろう――

きつとこの地上ではない別の場所に、みんな行くから、いなくな

るのだ。

「でも、今は駄目よ。おじいちゃん、ユウを連れていかないで。行くなら、二人で行くから、ユウだけ連れていかないで」

びくんと、ユウの身体が跳ねた。

「……？」

目を覚ます。自分を覗き込んでいるマナの顔を視界に捕らえ、些か驚いているようだった。

「ユウ……」

「マナ——どうして、俺、何で……？」

「倒れたのよ。よかった、おじいちゃんみたいに死んじゃうかと……それが限界だった。」

「マナ？」

マナの大きな瞳から、見る間に涙があふれる。マナがユウにぎゅつとしがみつく。

「マナ、ごめん。心配かけたね」

「あたしをおいていつちやいや。ユウもおじいちゃんみたいにあたしをおいていくのかと思ったわ」

「行かないよ。マナをおいて、どこにも行かない」

「行くんなら、二人で行かなくちゃ。一緒に行かなくちゃいやよ」

マナは涙に濡れた顔を上げて言う。

ユウはなぜか強ばった顔でマナを見下ろしていた。

「俺と、一緒に——？」

「ええ。二人ならどこにでも行けるわ。おじいちゃんも言ってたもの。ユウは、どこにでも連れていつてくれるって」

ユウは、何か考えているようにも見えた。瞳には、何か強い意志が感じられた。

「マナ、本当に俺と一緒にいく気がある？」

「ええ」

「後悔、しない？」

「しないわ。だって、ユウと一緒におじいちゃんのところに行くん

だもの」

「ごくりと、彼の喉が鳴った。

何かをためらっているようにも見えた。

「じゃあ、目を閉じて……」

言われるままに、マナは目を閉じる。

「少し、苦しいかもしれない——」

「少しでしょ。いいわ」

首筋にかかる指は、なぜか震えていた。

だが、苦しいと思える時は来なかった。ただ震える指がマナの首筋にかけられたまま、混乱したような感情が伝わってくるだけだ。

不意に、ユウの手が離れた。

「ユウ？」

目を開けて、マナは驚いた。

ユウが泣いているのだ。

「ユウ、どうしたの？」

ユウは首を横に何度も振った。

「ごめん、マナ……」

「どうして泣くの、ユウ？」

「……マナが望むなら、どこにでも連れていく。何でもしてやる。でも、おじいちゃんのところへは、連れていけない……」

「ユウ——」

激しい後悔と、それによる苦痛が、ユウの内に感じられた。

「今は駄目だよ。今はまだ、その時じゃない。俺には、できない……」

……

両手で顔を覆って泣くユウを、マナは抱きしめる。

「ユウ、泣かないで。今じゃなくてもいいのよ。いつでもいいわ。いつか、二人で行きましょう。一緒に行くのよ。ね？」

「ごめん、マナ。ごめんなさい、おじいちゃん……」

マナにしがみついて、声をあげて泣くユウが、なぜそうするのかマナにはよくわからなかった。だが、泣きたいだけ泣いたら、きつ

とユウは前のように戻れると、それだけは思えた。

かなりの時間が流れ、いつしかユウの鳴咽が途切れ、感情の波が穏やかになっても、二人はただじっと、互いを支え合うように離れなかった。ぬくもりが服越しに伝わるのが心地よかった。

「ユウ、海が見たいわ」

唐突にマナが言った。

「マナ？」

「おじいちゃんが言ってた。海が見たかったって。あたしも見たいわ。おじいちゃんが見たがってた海を。海なら、いい？」

肩こしに、ユウは笑った。

「ああ、いいよ」

マナは体を離して、ユウを見つめた。

もうユウの感情は穏やかだった。

それどころか、いつもより大人びてさえ見えた。

大丈夫。

そう思った。

だが、思わぬ事態がこれから起こることを、二人はまだ知らなかった。

「シイナー!!」

管理区域のヘリポートへ向かう途中の彼女を呼び止める声。

もちろん、フジオミだ。

「何の用？」

うんざりした口調で振り返るシイナ。

「さっきのコールは？ 何かあったのか？」

「マナの居場所がわかったわ。捜索隊のリーダーに確かな生体反応があったそうよ」

それだけ言うと、シイナは、また歩きだした。が、その横に、フジオミが並ぶ。

「僕も行こう」

「何ですってっ！！」

あからさまに非難の眼を向けるシイナに、フジオミは一向に頓着しない。

「近い未来の 妻 を、救いにいつて何が悪い？」

口調には、揶揄するような響きが残っていた。

「——私の邪魔をしたら許さないわよ」

「仰せのままに」

俺がいつて言うまで、目を閉じていて。

ユウの言葉を守って、マナはじっと目を閉じていた。

「ユウ、もういい?」

「まだだよ。少し歩くから。絶対目を開けちゃ駄目だよ」
風に重なる、聞いたことのない音。

踏みだした足は不意に沈んだ。ざらついた感触がする。滑るような、柔らかな感覚。踏みしめるたびにサクサクと音がした。いつもの土の硬い感触とは違う。

「ユウ、土が軟らかい。変だわ」

「土じゃないよ。砂だよ」

「すな?」

「そう。海の近くに多くある。草がほとんど育たない乾いた細かい粒」

両手をひかれて、恐々とマナは歩いた。

風は湿っているように思えた。

今まで嗅いだことのないにおいがする。

マナの知らない音は前へ進むごとに徐々に近づいてくる。ますますきつく目をつぶった。

「ユウ、恐いわ。この音は何?」

「見ればわかるよ。さあ、目を開けて」

ユウが目の前からよける気配がした。

「もういいの?」

「ああ。海だ——」

マナは静かに目を開けた。

そうして、目の前に広がる海原を、初めてその瞳に映した。

「――」

水だ。

見渡すかぎりの青い水だ。

これは海。

群青の水の中、白く寄せては返す、これは波だ。老人の言葉が、マナの視界に映るものとぴったりと重なる。

「これが、海――？」

「ああ。そうだよ」

海の間こうは雲に一直線に遮られていた。それがかえって、この地上が実は球体であるということをマナに認識させた。平らに見える水平線は、大きな球の一部に過ぎないのだと。ただ、大きすぎるだけで誰もそれに気づかないのだと。

潮騒が、全てをかき消していく。

なんて、世界は美しさに満ち溢れていることが。

知らず知らず、涙が溢れた。

「マナ、どうかしたのか？」

頬を伝う涙に気づいて、ユウが問う。

「うっん。違うの――」

マナは涙を拭おうとはしなかった。ただじつと、海を見ていた。

「おじいちゃんの言ってたこと、本当だった……」

初めて地を覆う濃く青い水を目のあたりにしたとき、涙が出たよ。こんなにも素晴らしい光景が、あっていいものかと。

私達の住む星の、なんと美しいことか。

よせてはかえす波のさざめきが、どこまでも続く海。わたる風さえ、命の鼓動をはらんでいた。

今マナの眼前に広がる海は、老人の心と同調したような感慨を彼女に与えた。

なんて、美しい。

言葉にできない、こんなものが自分の中にあるなど、マナは今まで知らなかった。

溢れる涙を止めることができない。

これが、海。

濃い青に染められた、まるで意志を持つかのようにさざめく、これが海なのだ。

人という存在のなんと矮小なことか。この偉大な世界の中のほんの一部分にしかすぎない。

これは全ての命の母。

全ての命を継ぐ存在。

「――」

全てが、愛しかった。

この世界にある全てのもの、生きている全てが愛しかった。

ここで、こうして風に触れていること。海を見ていること。生きて、感じていることが、愛しかった。

「ユウ、すごいわ。すばらしいわ。こんなに綺麗な所に、あたし達、住んでたのね。今まで知らなかったの悔しいくらいよ。ドームの中にずっといて、こんな綺麗なものを見たことがなかったなんて、馬鹿みたい。本当に、馬鹿みたいだわ」

マナは泣きながら、ユウに抱きついた。

「綺麗ね。本当に、なんて綺麗なのかしら。ここから、生命が産まれたのね。ここから始まって、あたし達、ここにいるのね」

老人が夢見るように語った美しい世界が、確かにそこに在った。

「音がする」

不意に空を見上げ、ユウは呟いた。

「波の音だけよ。何も聞こえないわ」

「いいや。何か来る。あれは――」

ユウはじつと空を見つめたまま動かなかった。マナもユウの視線の先へ目をこらした。

「――」

やがて雲の切れ間に、小さな黒い影が見えた。波の音に重なる、マナには耳慣れない機械音。

「あれ、何？」

「旧式の軍用ヘリだ。空を移動するものだ。乗ってるのは、三、人？」

「ユウ――？」

マナはユウの腕に触れる。

次の瞬間。

「あいつだ――」

凄まじい殺気を、マナはユウから感じた。憎しみの全てが、上空のヘリに向けられている。当然のように彼女は悟った。あの中に、シイナがいる――！！

「マナ、隠れてろ」

刺すような緊張感。能力が発現する。ユウの身体が宙に浮いた。

「今度こそ、殺してやる――！！」

手が離れる。彼はシイナを殺す気なのだ。

「待って、ユウ。だめよ、行かないで――！！」

マナの叫びも、もうユウには届いていなかった。

木陰に消える小さな姿を追って、シイナは歓喜の声をあげた。

「マナだわー!!」

「シイナ、危ない!!」

フジオミはシイナの腕を捕らえたまま、自分も下を見下ろした。そして見る。

地上から真っ直ぐにこちらへと向かってくる、白銀の髪と、赤い瞳の少年の姿を。

「ユウ!?」

見つけたシイナの反応も速かった。操縦席へ急ぎ、叫ぶ。

「銃をかしなさい!!」

「シイナ、何を――」

振り返るフジオミは銃を手立つシイナを見た。

「殺してやるわ。今度こそ」

銃を構え、開いた扉の向こうを、シイナは凝視していた。

「――」

上空に静止したままの機体の高さに、ユウはいた。怒りに満ちた瞳が、シイナだけを見据えている。対するシイナは、能面のような無感動な表情で、銃口を向けたままユウを見た。

二人の視線が、完璧に重なる。どちらも決して、相手から目を逸らさない。一瞬でも逸らしたらやられると、本能で悟っていたのかもしれない。

「どうして死ななかったの」

「!?!」

そんな小さなささやきを、ユウだけが聞いた。

そしてそれが、あらゆるものの緊張感をやぶった。

「シイナ、止め——!!」

フジオミは、シイナの肩の震えで、トリガーを引こうとしていることをその瞬間、感じた。

とつさに触れた手から、衝撃が伝わる。

同時に、ユウの身体は糸が切れた人形が倒れるように唐突に視界から消えた。

「殺したのか!？」

蒼白となってフジオミが問うた。

「失敗よ。手応えがなかった」

対するシイナは冷静だ。

苛立たしげにフジオミの手を振り払う。

邪魔をされて狙いが狂ったのだ。絶好の機会だったというのに。

「今度邪魔をしたらあなたでも撃つわよ、フジオミ」

言いながら、風が吹き付ける開いた扉から下を覗いたシイナは身を強ばらせた。

すぐ下に、ユウがいたのだ。

「!!」

シイナはもう一度、今度は片手で銃を構えた。

「シイナ!!」

ユウの鋭い叫びとともに機体が傾いた。シイナが足元をすくわれる。

「!？」

シイナの身体が、一瞬空に浮いた。そのまま重力に引かれる

「シイナ!!」

とつさにフジオミはシイナの手を引いて中へ引き戻す。

次の瞬間、激しい衝撃が機体を襲った。

「きゃあ!!」

シイナは床に叩きつけられた。

「!!」

フジオミがバランスを崩す。扉脇の手摺りを掴んでいた彼の手が、離れる。

「うわっ――！」

彼の姿が、シイナの視界から消える。

「フジオミ――！」

シイナが外へ身を乗り出す。どこにも、その姿はない。

ただ、黒い塊が青い海目指して小さくなっていくのが見えるのみ。シイナの全身から血の気が退いていく。

「フジオミ――っ――！」

叫びが、大気を切り裂く。

そして、マナも、その光景を見ていた。

扉から飛ばされるフジオミの姿。遥か下は海。あの高さから落ちたのなら、救からない。

「いや……」

マナが叫んだ。

「いや、救けて、ユウ――！！ フジオミを救けて――！！ お願い、死なせないで――！！」

「――！！」

その絶叫は、ユウの耳にはつきりと届いた。すぐに動いた。フジオミを追って、ユウの姿が海へと向かう。

二人の距離が見る間に縮まる。ユウが手をのばす。フジオミの腕を、掴んだ――！！

「ユウっ――！！」

マナの叫びとともに、激しい水音。飛沫が何度も海面を打った。

マナはユウがフジオミを捕まえたとき、ほんの一瞬、落下の速度が揺るまったようにも見えた。

「ユウ……？」

だが、二人の姿は見えない。

マナはじっと待ったが、海はやがて落ち着きを取り戻し、波だけが穏やかにさざめいている。

二人の姿は、見えない。

「いや……」

膝の震えを、マナは止められなかった。

心底恐怖した。フジオミが死ねば、全てが終わる。

「博士、おじいちゃん 救けて、どうしたらいいの。もし、フジオミが死んでしまったら、人が、終わるのよ……」

マナ！！

突然マナは強い思念を感じ、振り返った。

林の影、川と海が交わる場所に、ずぶぬれの人影が見えた。

声を出さずにマナに手招きをしている。

ユウだ！！

「――」

マナはとつさに上を見た。

ヘリの位置からすれば自分の姿も、ユウの姿も見えないはずだ。

そつとヘリの視界に入らないよう、マナはユウのもとへと急いだ。

「ユウっ、フジオミは！！」

「――気を失ってたから、水は飲んでない。少し休めば目を覚ます。それより、すぐにここから離れよう」

マナを引き寄せ、その腕に捕らえる。

「濡れてるから少し気持ち悪いけど、我慢してくれ」

「待って、ユウ、フジオミはどうするの？」

「おいていく。当たり前だろう」

マナはもう一度フジオミに視線を戻す。

「そんなの駄目よ。お願い、彼も連れて行って」

「マナ、こいつならドームの連中が見つけてくれるさ。気を失ってるだけだ」

「見つけてもらえなかったらどうするの？ このまま目を覚まさないことだってあるかもしれないわ。死んじゃうかもしれないわ。そ

んなのいやよ。それに、彼にはどうしても聞きたいことがあるの。
お願い」

潤んだ瞳で訴えられると、ユウは弱い。

「目を覚まして無事なことがわかれば気が済むのか？」

「ええ。それからドームに帰せばいいわ。お願い、ユウ」

「——わかったよ」

ユウは吐息をついてマナから身体を離れた。横たわるフジオミを抱きあげる。

「三人を連れて跳ぶのは自信がないけど、今の俺は二度跳ぶなんてことはできない。マナ、俺から離れるな。手が離れたらどうなるかなんて、俺にもわからないから」

「わかったわ——」

ユウの腕にしっかりと自身のそれを絡ませながら、マナは己れを恥じた。危険を顧みずにフジオミを救ってくれた彼よりも、自分はフジオミを心配していたのだ。

人類を滅亡から救うというその崇高な使命が、彼女自身気づかなかったほど深く自分を縛っていることに驚愕した。

それ以外の全てを排除するように。

それだけを優先するように。

いつも、そう言われてきたのだ。

それまでは何の違和感もなく受けとめてきた言葉を、今マナは初めて疑問に思った。

（じゃあ、排除されたものはどうなるの？）

ただ一つの大切なもののために、他を切り捨ててもいいのか。それは真に正しいことなのか。

フジオミを救うためなら、ユウが犠牲になってもいいのか。

マナの内に芽生えた疑問は、徐々に彼女の心に侵食していく。聞かなければならない。フジオミに。この疑問の全ての答えを。

「行くよ、マナ」

ユウの声に、マナはきつく瞳を閉じた。

彼女はまだ信じていた。

子供である自分の疑問の正しい答は、老人がそうであったように、大人であるフジオミが知っているのだと。

廃墟に帰ったマナとユウは、すぐにフジオミをユウの部屋へと移した。すぐに使える部屋はユウとマナの部屋の他は老人のしかなかったのだが、そこを使うことをユウは許さなかった。

今日のところはフジオミにはユウの部屋を与え、ユウは老人の部屋を使うということで、その場は収まった。

ユウは意識のないフジオミの上着を脱がせると、それを壁に掛けた。マナの服と同じで特殊加工されているので、濡れても水を弾く。これならば表面の水分が乾けばすぐに着られる。替えの服は必要ないだろう。

呼吸は穏やかだが、ショックが強かったらしい。

頬を叩いても起きる気配はなかった。この分では明日になるまで目を覚まさないだろう。

ベッドに寝かせると、すぐにユウは濡れた服を変え、部屋を出た。斜め向かいのマナの部屋に向かう。

「マナ。入っていいか」

返事よりも先に、扉は開いた。

「ユウ、どうだった？」

「——心配ない。明日になれば目を覚ます。今はまだ、無理だ」

「そう——ああ、ごめんなさい。こんな所で立たせたままにして入って、ユウ」

ユウの手を引くと、マナは扉を閉じた。ユウはその手慣れた仕草に声をたてずに微笑った。

「？ 何がおかしいの？」

「マナも、ここの生活になれたと思ってさ」

マナはさつと顔を赤らめた。

「ユウの意地悪……!」

来たばかりのときには、マナは自分で扉を開けるということを知らなかった。いつでも、自動で開いてくれるものと思い込み、じつと立ったままのときもあったのだ。

「ごめん、ごめん。マ——」

「ユウ……!」

突然、ユウの膝が崩れた。とっさにマナは腕を伸ばしユウを捕まえたが、支えきれなかった。そのまましゃがみこむ。

「どうしたの、ユウ!？」

「ごめん、少し、疲れただけ」

ユウの顔色が悪いことに、マナはその時初めて気づいた。

「ああ、どうしよう。あたしのせいだね。ごめんなさい、ユウ。あたしが無理なお願いをしたから」

「いいよ。マナだから。どんな無理でも、聞いてやる」

かすかに微笑んだユウに、マナの胸が熱くなる。

「じゃあ、あたしがユウの願いを叶えるわ。言って。どうしてほしい?」

「ああ。このまま、少し、休ませて……」

ユウはそのまま、マナに身体を預けた。マナの背が、ユウの重みで壁に触れる。労わるように、マナはその背をなでた。

天井の明かりを避けるように片手で目を隠し、ユウはそのまま動かなくなった。

どのくらいそうしていたのだろう。

「マナ。シイナは言ったよ」

小さく、ユウは呟いた。

「?」

「『どうして死ななかったの』って。憎しみでも憐れみでもなく、俺にそう言ったよ。あの人は可哀相な人だ。ただ一つのこと以外、心を占めない。それ以外何もない。全て切り捨ててる」

静かに床に手について、ユウは体を離れた。

じつとマナを見据えるユウの眼差しは、哀しみをたたえていた。

「俺はどうすればよかったんだろう。シイナの望むものになれなかったのが、いけなかったのか。」

俺はシイナが好きだった。マナと同じように、彼女が本当に好きだったんだ」

「ユウ」

とつさに、マナはユウを抱きしめた。彼が泣きたいのが、わかったから。

憎むことで、彼は生きてきたのだ。

今はもう、ユウの心に憎しみはなかった。

あったとしても、それは微妙に形を変えていた。

ユウが憐れだった。痛みしかない、彼の心が。

なぜこんなにも、彼は傷つかなければならないのだろう。

どうしてもつと、全てが彼に優しく在れないのだろう。

「ユウ、大丈夫よ。泣かないで。もう忘れるの。あたしが傍にいるから。もう誰も、憎まないで」

何でも知っていて、何でもできるはずのユウは、時折子供のように愛おしい。

だから、マナは気のすむまでユウを優しく抱きしめていた。

せめて自分だけは、彼に痛みを与えることがないように。

光を感じて、フジオミはゆっくりと目を開けた。逆光の中、長い髪が陽に透けている。

「…ナ…」

かすれた声がもれた。

「フジオミ!!」

あたたかい滴が、頬に落ちた。それがマナの涙だとわかるまで数秒要した。

「…マ、ナ、僕は、生きてるのか……」

「ええ。生きてるわ。よかった——」

マナの頬から涙がこぼれ落ちる。フジオミの指が、マナの涙をすくいあげた。指が、あたたかさと同時に現実感を身体に伝える。

「泣かなくてもいい、マナ」

ゆっくりと、フジオミは身体を起こした。痛みはどこにもない。

かすかな嘔吐感に眉根を寄せる。が、軽く頭を振って感覚を追い払う。ようやく、周囲が視界に入ってきた。

「——」

身体には、洗いざらしの掛布がかけてあった。身を動かすたびにぎしぎしときしむスプリングベッド。彼の知らない微かな黴臭さが鼻につく。天井と壁は壁紙で覆われてはいるが薄汚れていた。荒廃をとどめるためにコーティングはされているが、今にも崩れそうなコンクリートの建造物。いずれも骨董品とも言える代物だ。

「ここは——」

「廃墟よ。あなた、海に落ちてからずっと目を覚まさないから、ここまで運んだの」

視線をさまよわせ、フジオミはマナの背後にユウを見つけた。

「——」

マナが気づいて声をかける。

「彼がユウよ。あなたを救けて、運んでくれたの」

フジオミは、じっとユウを凝視した。

見れば見るほど不可思議な赤い瞳に、銀色に輝く髪。まるで別の地からやってきた異種族のような違和感。

「ああ 知っている。ユウだね」

ユウは、そんなフジオミの視線を鋭い眼差しで受けとめている。それから、不機嫌そうに目を逸らした。

「マナ。外に出てくる」

答えも待たずに、ユウは出ていった。マナは不思議そうにユウの消えたドアを見つめている。

「――嫌われたみたいだね」

笑いながらそういうフジオミに、マナは更に腑に落ちない表情をする。

「どうしてユウがフジオミを嫌うの？ 会ったばかりなのに」

「彼はもう大人の男だからね。天敵というものは、見ただけでわかるのさ」

フジオミはベッドから出ると、窓へと向かった。剥出しのガラスの向こうには、荒廃の名残をとどめた風景が広がっている。

「ここは一体どこらへんなんだ？ このぐらいの廃墟なら相当大的きな都市だったはずだ。ここは、あの海からそんなに離れていないのか？」

「わからないわ。ユウがあたしたちを連れてきたんだもの。あれだと近いのか遠いのかなんて全然わからないのよ」

「彼が連れてきたって、歩いて運んだんじゃないのか？」

「いいえ」

「じゃあ、どうやって？」

「跳んだのよ」

「とんだ？」

「ユウはそう言ってるの。ユウにしかできないわ。思うだけで好き

な所に行くのよ」

「まさか、瞬間移動を!？」

「シユンカインドウ? そういう名前なの?じゃあ、ユウに教えるわ」

無邪気に、マナは言った。だが、フジオミはマナほど寛容にその事実を受け入れられはしなかった。

超能力は研究としてはだいぶ前の時代にもてはやされたものだが、それも被験者がなくてはならない。人口が減少をたどる一方となつてからは、対象となる人材はほとんどいなかった。研究は下火となり、それまでの研究結果と仮説だけが残った。

「そうか、シイナの言っていた特殊能力とはそれが…」

考え込むフジオミを、マナはずっと凝視していた。

「ねえ、フジオミ」

「あ、ああ、何だい、マナ？」

「あたし、あなたに聞きたかったの。あなたなら知ってるんじゃないかと思って」

「何をだい？」

戸惑うようなそぶりを、マナは一瞬だけ見せ、けれど思い切って尋ねる。

「博士は、小さなユウを殺そうとしたの？」

真つすぐに、マナはフジオミを見つめた。彼のどんな微妙な変化も見逃すまいとするかのような真摯な眼差しで。

「――」

だが、フジオミは顔色一つ変えなかった。だから、内心の動揺は微塵もマナには悟れなかった。それでも、彼女は再び問う。

「教えて、フジオミ。あたし知りたいの」

「それを知ってどうする？」

フジオミの声は意外なほど穏やかだった。何の違和感もなくマナから視線を外し、外の風景を見やる。

「それが事実なら、君はシイナを憎むかい? 君に見せている面だ

けが、彼女じゃない。君の考えているシイナと違ったら、君はもうシイナを好きじゃなくなるのかい？」

「――」

振り返ったフジオミの言葉が、逆にマナに問いを投げかける。答えを知ってどうするのかと。

だが、どうもできない。できるはずもない。時を戻すことも、ユウの心に刻み込まれた傷を消すことも、かといってシイナを裁くことも、何も、マナにはできない。自分にできることは、ただ事実を知ることだけだ。

マナはシイナが好きだった。自分を育ててくれたのは彼女だったし、一番歳も近く、何でも話せる女性だった。

今、彼女がユウを殺すというなら、自分は彼女を許せないだろう。だが、今ユウは生きている。生きて、マナとここにいる。それが、マナだけの真実だ。

彼女は顔をあげ、フジオミに告げる。

「もしそれが本当なら、とても哀しいと思う。だって、あたしは二人ともとても大好きなもの」

比べられないほど、今はシイナもユウも大事だった。

「でも、博士はあたしにひどいことなんかしなかったわ。いつも、博士は優しくった。あたしはやっぱり博士を嫌いにはなれない」

毅然と言い切るマナを、フジオミは驚いたように見つめていた。

「――まいったな。僕は君を見縊っていたようだ」

何も考えていない、愚かな子供だと思っていた。

実際、シイナはそう育てていた。ただ優しく、何も考えないように。幸せで、今ある自分の立場を疑いもしないように。

だが、自分が初めて会った時と、この子はなんと違うのだろう。なんて大人になったことか。

「君が、真実を見極める力を持っていて嬉しいよ」

「ありがとう。あたしもフジオミが優しくて嬉しいわ」

「優しい？　僕が？　そんなこと言われたのは何年ぶりだろうね。」

懐かしい響きだよ」

「だって、博士の話してくれるフジオミはいつだって優しかったわ」

「シイナが？」

「ええ」

フジオミは苦笑した。

シイナが自分をよく話すのは当然だ。マナに話して聞かせる自分が、いつも彼女が言う傲慢で勝手な男であってはならないのだ。

脚色された自分は、マナの憧れと理想を兼ね備えた男として彼女の中にインプットされている。そして自分はその通りに振る舞う。

全てはマナのために。マナだけのために。

「博士は、きつとフジオミのことが好きなのよ。フジオミをとてもよくわかってる」

その言葉に、フジオミは浅く微笑った。無邪気なマナの考えを、浅はかだとは思えなかった。仕方のないことだ。猜疑や不信から遠ざけて、シイナは育ててきた。

「さあ、どうかな。よくわかっていいることと愛することは、決して同じにはならないんだよ、マナ。彼女は、きつと僕より君のことをずつと好きだよ」

フジオミは立ち上がり、落ちてきた前髪を無造作にかきあげた。

「シイナは、君に自分を重ねているんだ。なれるはずだった自分を、君に見ている。彼女には、君こそが全てだ」

ガラスの向こうの見慣れぬ風景を、フジオミはただ見つめていた。

「――」

遠くまで来た。

シイナのいない、今まで自分の知ろうとしなかった世界へ。

思い起すのは何故か彼女のことだけだ。

自分が死んだと思っただろうか。そうならば、冷やかな仮面の下で、きつと自分自身を責めている。

どんな人間よりも、シイナはフジオミにとってあざやかな色を持った、確かな存在に思えた。その冷酷さも、残酷さも、傲慢さも、

彼にとっては全てが深い感慨を呼び起こす。

「——フジオミも、博士のこと好きなのね」

呟くマナの言葉を捕らえ、フジオミは我に返った。奇妙なものを見るようにマナを振り返る。

「マナ——？」

「そうよ。だから博士とあたしが仲良くするのいやなのよ。やきもち妬いてるんだわ」

マナはむくれた顔つきでそっぽを向いた。

「——好きって、僕が、シイナをかい？」

「ええ」

「君は凄いことを思いつく子だね、マナ。一体、どうしてそんなことを考えたんだい？」

「わかるわ。あたし、何故かなんてわからないけど、でもわかる。

フジオミは博士のことを好きなのよ」

きつぱりと言い切るマナに、フジオミは啞然とした。論理も何もない、けれど物事の本質を見抜くことに長けた少女は、今、見事にフジオミの——自分自身考えることさえもしなかった——シイナに対する想いを、曝け出したのだ。

「それは——気づかなかったな」

気抜けしたようなフジオミの声に、マナは本当にいやそうな顔をした。

「驚いた。フジオミは意外と鈍感なのね」

その時、二人の背後にあるドアが開いた。ユウが顔を出す。

「マナ。お鍋、ふいてるよ」

「そうだ、ご飯の支度が途中だったのよ！　じゃあね、フジオミ、もうすぐお昼だからユウと後から食堂に来て」

マナは急いでかけていく。

後にはフジオミとユウが残る。

「食堂は階段を下りて廊下を左にまっすぐ行った突き当たりだ。すぐわかる」

それだけを言うとユウはフジオミに背を向けた。ドアを閉めかけるユウに、

「君は僕が嫌いらしいね」

フジオミが言う。

「――」

振り返ったユウは不機嫌そうにフジオミを見返す。フジオミは肩を竦めて微笑った。

「顔に書いてあるよ。マナが好きだから近寄るなって」

ユウの顔がさつと赤らんだ。

「そんなこと、あんたに関係ないだろ!!」

笑いを、フジオミは押さえられなかった。感情を隠せない少年を、フジオミは少々からかってやりたくなった。悪い癖だ。これだからシイナにも煙たがられるのだと、フジオミは思った。

「君は自分のことをどれだけ知っている？」

ユウは答えない。

「――」

「君とマナが遺――」

「言うな!!」

ユウの叫びが、フジオミを遮る。その眼差しは、今にもフジオミを射殺してしまうくらいに鋭かった。

「そうか。知っていたのか」

本当に、悪い癖だ。フジオミは自嘲する。自分は彼の一番痛いところをついたのだ。

「――言わないよ、マナには」

さらりと、フジオミは言った。ユウは怪訝そうにフジオミを見つめている。感情を隠せないユウを、フジオミは好ましく思った。なぜシイナに似ているとも、思った。

「言ったから、どうなるわけでもない。惹かれる心は止められない。君がそうであるように」

「――」

「僕と君が、逆の立場だったらよかったのに。そうすれば、お互いに、もつと自由に生きられた。僕は君が羨ましいよ。本当にね」

「あんた、何を――」

戸惑ったように声をかけるユウに、フジオミはあいまいな笑みを返した。

「さあ。マナのところに行くんだ。僕にとられたくなかったら、しっかりとマナを捕まえておくことだ。人の心だけは、努力ではどうにもならないから。僕はしばらくここで休んでいる。食事はいらない。行きなさい」

戸惑いながらも、ユウは言われた通り部屋を出た。フジオミは足音が遠ざかっていくのを確かめると、ゆっくりと窓辺へと向かった。古びた鍵を解き、窓を開け、彼のそれまで知らなかった異臭を風で追い払う。

薄汚れた灰色の瓦礫から身を乗り出す緑の群れ。高いものは建物の二階をすでに越えている。続く草原が風の方向を優しく示す。

「――なんて原始的な世界かね、ここは。とてもじゃないけれど、長居はしたくないな」

フジオミは周囲を見回して、もう一度眉根を寄せた。

マナは初めてここを見た時、とても美しいと思った。しかし、フジオミは違った。彼は、この風景に違和感以外の何をも感じることができなかった。彼の知っている、美しいと思える自然の風景というのは、ドームの温室の中にしかない。

帰りたい。

今ほど強く、そう思うことはない。

全てが統制化されたあの銀色のドームへと、フジオミは今すぐにも帰りたいかった。

濃い緑は、彼の心を落ち着かせはしない。あるのは見慣れぬ違和感と強烈な色に対する不安、そして嫌悪だけだった。

彼は、人の力の及ばぬ世界の生み出す命の群れより、人の手が造り出した人工物を愛していた。

もしかしたら、自分達は、とつくの昔におかしくなっているのかもしれない。そう感じつつも、不可解とは思えなくなっている。

自然の恩恵を忘れて、一体幾世紀たったのだろう。美しさや懐かしさより違和感を感じるほどに、もうこの風景から自分達はかけ離れたものとなってしまうたのだ。

「まいったな」

窓を閉め、鍵をかける。これ以上何も見たくなかった。ベッドに身を投げ出して、目を閉じる。

目眩のように、思考が駆け巡った。

忘れかけた苦い痛みさえも甦ってくる。

どう対処していいのかもわからない。

「――」

フジオミは途方にくれた。

だがそれも、無理はなかった。今まで一度も考えもしなかったことに彼は直面したのだ。

きっとこの世界で一番彼を嫌っているだろう女を、愛したという事実。

「――まいったなあ。本当に」

意外にすんなりと、彼はその事実を受けとめていた。苦い痛みとともに。

嫌われていることは知っていた。だからこそ、ことあるごとに彼女の前に姿を見せた。彼女の神経を逆撫でるようなこともわざとした。彼女のきつい眼差しも、激しい言葉も、その全てが、彼を惹きつけて離さなかったからだ。

だが、愛されるための努力など、今更できそうもない。自分はずでに、完成されてしまった。もう変われない。死ぬまで、このまま生きていくしかない。

そして、シイナもだ。彼女も、もはや変わらない。それしかない

のだ。

「――」
何もかもが、もう意味がないように、フジオミには思えた。生きること、子供をつくることも、未来も、義務も、責任も、全てが色褪せていく。彼女以外の、全てが。

「シイナ……」
痛みしか呼び起こさない言葉を、フジオミは口にした。

今初めて、彼は自分が一人であることを思い知った。見知らぬ世界では彼を護るものは何もない。彼を知る人も、彼が親しんだものも、何も。

ただ一人であること、それはなんという孤独だろう。なんという苦しみのだろう。

痛みしか伴わぬこの感情。彼は誰に教えられなくとも知っていた。

これが、愛だ。
ずっと昔から、彼女を愛していたのだ。

「――」
今更、気づくなんて。

フジオミの部屋を出て、ユウはそのまま外へと向かった。薄暗い廊下を足早に進んでいく。今は一人でいたかった。

フジオミの投げかけた言葉が、ユウの中で燦っている。

フジオミの言葉は、わかりやすそうでいてわからない。頭上から差し込む光を徐々に感じながら、そう思った。わかっていることは、自分が彼にはかなわないということだ。

「――ちくしょう」

彼は、自分とは全然違う大人の男だ。直感で、そう確信した。知識や体格など、そんなものでは太刀打ちできないものが確かに

ある。

生きて重ねてきた年数には、どうあがいてもかなわない。
どんなに自分が歳を重ねても、相手はその分また歳を重ねる。
そして、その分その思考にも年輪を重ねていくのだ。
距離は決して縮まらない。それが、悔しかった。

「あいつが、マナの相手か」

風が不自然に騒めいた。彼の動揺を表すかのように。

「あいつを、選ぶのか。マナ——」

マナがわざわざ部屋まで運んだ朝食に、フジオミはほとんど口をつけなかった。

だが、マナはそんなに深刻には考えなかった。

初めてここに来た時の自分と照らしあわせ、フジオミも拒絶反応を起こしていると思ったのだ。

だから、無理には勧めなかった。

そんなことをしなくとも、何日かすれば思惑を無視して空腹が堪え切れなくなる。人間は二、三日食べなくとも死ぬことはない。

それよりも、マナはフジオミと話をしたかった。

老人亡き今、彼女の問いに答えてくれる大人はフジオミしかない。

ユウは食事を終わると、いつもどおり姿を消した。きっと、地下へ行ったのだろう。

だから、老人が生きていた頃のように、マナはフジオミを外に連れ出し、散歩がてらに話を切りだした。シイナからでもなく、デスクからでもない、新たな知識を得るために。

老人の言葉は、一つ残らずマナの中にある。

自分が何者であるか知ること。

そして、自分で決めること。

それを実現するためには、もっと知らねばならなかった。

「ねえ。フジオミ。あたし、ずっと考えていたのよ」

穏やかな風に吹かれて、フジオミは己れの思索に耽っていたが、マナの声に呼び戻される。

「マナ——？」

ドームから離れ、3日経った。

この廃墟群にも慣れ、ようやくフジオミはこの強い色彩に違和感だけではないおぼろげな美しさを感じるようになってきていた。

振り返ると、自分よりも立派にこの世界に順応している少女は、常にはない真剣な目をしていた。

「もしあたしとあなたの子供が産まれても、結局人類は滅びるんじゃないのかしら」

フジオミが息をのむ。

「ねえ。そうでしょう、フジオミ？」

「マナ、言うな。それは考えてはいけないことだ」

「でも、考えずにはいられないわ。子供を産めるのは、もうあたししかないいわ。あたしとあなたの子供は、伴侶を迎えることもできずに、独りで老いていくのよ。それでも、必要なことなのかしら。博士は、一体どう考えているのかしら」

マナは知らなかった。フジオミとの子供が生まれた後、シイナが人工受精によって新たな生命をマナに産ませようとしていることまでは。

凍結保存された卵子と精子による人工受精卵をマナの体内で育てれば、マナとフジオミ以外の血を受け継いだ子供も作れるのだ。

だが、フジオミは、そこまでマナに話す気にはなれなかった。それは、あまりにも作為めいた苦々しい現実だった。

「——シイナは最期まで続いてほしいんだ。できるところまで、我々人間の血が生き続けることを望んでいる」

「あなたも？　ねえ、あなたもそれを望んでいるの、フジオミ？」

「ああ。そうだ」

「それを疑問に思ったことはないの？」

一瞬だけ、フジオミは呼吸を止めた。

だが、無表情なその顔から、動揺が読み取られることはない。

「――」

感心したように、フジオミは穏やかに微笑んだ。

本当に、この少女はきわどいことばかり問い正してくる。まるでこちらの弱みを見透かすかのように。

そして自分は弱みを見せないように、さらなる嘘を繰り返すのだ。「そんなことは一度もないよ。それが、僕等の使命だから。人間として生まれた限り、血を繋ぐことは義務だ。僕等は数少ない人間だ。最後の瞬間まで、人が生きてきた足跡を作らなければならない。それが、確かに僕等が存在していた証となるように。」

自分だけが幸せであればいいなんて、それは間違っている。個人の幸せの前に、僕等はこの生の意味を、考えなければならない。そして、君と僕は次に血を残せる人間だ。生まれながらに責任がある義務がある。それをなくしては何も考えられない」

シイナがことあるごとに言っただけで聞かされた言葉を、そっくりそのままマナに繰り返す自分を、フジオミは滑稽な気分で認識した。

（偉そうに、何を言っているんだろう。そんなこと、微塵も考えていないくせに）

だが、永い営みの中で、一体誰が考えただろう。人間が、こんなにも穏やかな滅びを迎えるなど。

フジオミ自身でさえ、今この現状にあっても、信じられないことだった。

もうすぐ、この地球上から、人間が一人もいなくなるなどとは。そうして、今初めて、シイナの考えを理解する。

彼女は恐れているのだ――全てが無に帰することを。

それまで価値のあることが、突然意味を失くすこと。

それまで信じてきたことが、実は意味のないこと。

彼女はそれを恐れている。

だが、理解することとそれに共感することとは違う。自分は日に日に嘘を重ねることが苦しくなっている。

元来、フジオミは嘘などつかない性分だった。

自分の思うとおりに振舞い、それが許されていただけに、自身を偽る必要もなかったのだ。冗談なら言うが、それは全て自分の楽しみゆえだ。

しかし、今彼がマナに対して繰り返すそれは、決して彼が望んでいることでもなければ、彼を愉快にするものでもない。

だが、シイナの望みだ。彼女が望んでいることだ。そう自分に言い聞かせる。

マナは思った以上に人形から脱し始めている。その思想は危険だった。この社会の制度を、わずかに残った我々の存在理由を、根本から覆してしまう。

気づいた時から、フジオミはマナの思考の修正を謀った。ぶつてくる問いに正論を繰り返し、反論を封じる。

ほんの少しずつだが、マナの考えが以前のように自分の方に感化されていくのを、フジオミは感じている。

マナはもともとシイナが人を疑うことのないように育ててきたので、その効果も高かった。頭ごなしに否定するより、穏やかに根気よく説得する方が、考えを変えさせるには違和感がないのだ。

そんなふうのマナを 教育 していく自分を、フジオミは冷めた感情で認識していた。

自分は、一体何をしているのか。そう、自問したりもする。

自分のしていることは、己れの感情に反している。自分はシイナを愛している。マナではなく、シイナを。けれど、どうにもならないことも知っていた。

多分自分にも、その勇気がないのだ。カタオカがあきらめの言葉

を口にするその裏側で新しい命を望んでいるように、全てのしがらみを断ち切りたいと思いながら、そうしてしまうことをフジオミも恐れていた。

今までずっとそうであるように生きてきたのだ。

今更どうして変えられる。

変えたとしても、未来などない。

シイナは他人を愛せない女だ。憎んでいる相手を今更愛せるとも思わない。

そして自分も、未来を繋ぐことだけを最優先とするように教育されてきた。

シイナを愛していても、それには逆らえない。

（だが、わからないのか、シイナ——？）

すでに未来など、ないことが。
もはや意味など、ないことが。

予定された絶望。

考えればわかることだ。

すでに扉は閉ざされている。

それでも、人を、どんな形でも残したいのなら簡単だ。

クローンを、残せばいい。

人が死んでも、クローンなら残せる。寿命も短く、障害も多く出るだろうが、ただ存続させようとするのなら、最善の方法だ。

「だが、それではきつと、意味がないんだろうな——」

「——フジオミ？」

呼ばれて、フジオミは我に返った。

「どうしたの？」

「いや、何でもない。それよりマナ」

フジオミはマナに手を差し伸べる。

「帰ろう、ドームへ」

「——フジオミ」

「もう十分ここでは楽しんだろう？ シイナが心配しているよ。帰ろう」

差し伸べられた手をとろうとし、しかし、マナは思い出したようにそれをやめる。

「でも、ユウが。ユウを独りにしてはいけないわ」

「連れていけばいい。シイナは僕が説得するよ。君はユウを説得すればいい」

「ユウを連れて？」

それは、マナにとって意外な提案だった。

ユウとともにドームへ帰る。

考えたこともなかった。

だが、言われてみると一番いい考えのようにも思えた。

「——そんなこと、本当にできると思う？」

「シイナなら心配いらさないさ。君と僕とで頼めばきつと聞いてくれる」

こともなげなフジオミに、マナは小さく呟く。

「本当に？ もしそれができたら、みんな幸せになれるのよね」

マナの言葉に、なぜかフジオミはやるせない気持ちをおぼえた。

幸せ。

幸福とは、一体何なのか。

何を基準に、誰を基準にそれを決定づけるのか。

無垢な少女を、フジオミは憐れに思った。

そして、彼女を欺き続ける自分も、憐れな人間であると、痛感した。

可哀相なマナ。

可哀相な自分。

可哀相な人間達。

何という愚かで憐れな生命体。

それでも、生き続けねばならないのか。

もうどこにも、救いすらないのに。

絶望と孤独とを携えて、滅びの瞬間まであがき続けねばならないのか。

なぜそれが、自分達でなければならぬのだろう。

犯した過ちなら、それをしたものが携えていけばいい。それをしたものが足掻けばいい。

なぜ今、自分達が過去の人間のための贖罪を背負わねばならないのだ。

現状に溺れ、誰も未来を視ようとはしなかった結果が、これが。

答えの出ぬ問いを、それももうあきらめでしか、自分達は迎えない。

怒りをおぼえるには、フジオミはたくさんのことをそうとは知らずにあきらめすぎてきたのだ。

「——じゃあ、ユウを説得するまでは待つよ。でも、あまり時間がないことも忘れないでくれ。君がいない間、シイナはとても心配していたんだから」

「ええ。ごめんなさい」

「シイナは君を娘のように思ってる。あまり心配させてはいけないよ」

フジオミの言葉に、不意にマナは思い出した。

「ねえ、フジオミ。あたしのお母さんって、どんな人？」

「え？」

「あたしにも、お母さんがいたんでしょう？　どんな人だったのか知りたかったの」

「——ごめん、よく知らないんだ。僕は君の母親とは違うドームで育ったから」

「じゃあ、ユウのお母さんはどうしたの？」

「死んだよ。事故らしい。僕にも詳しいことはわからないんだ。あつという間のことだったから」

「会ったことある？」

「ああ。きみに、そ——」

不自然に、フジオミは言葉を切った。

「そう——きみに、よく似ていた」

だが、マナはその不自然さには気づかなかった。

「じゃあ、みんな独りぼっちなのね。みんな淋しいんだわ」

「さあ、もう戻ろう」

「ええ」

フジオミに促され、マナは廃墟へと戻った。

ユウがそれを見ていたことには気づいていなかった。

その日の夕食も、ユウとマナの二人だけだった。

フジオミは早々に部屋へともり、食事をとる様子を見せない。

ユウの様子も変だった。いつもより口数も少なく、何だか不機嫌だった。

後片付けも、気まずい空気が流れ、いつもの半分の時間で早々に終わってしまった。

黙って老人の部屋へと向かうユウ。

「ねえ、どうしたの、ユウ？」

「なんでもない」

すぐに返ってくる返事が、なんでもないことぐらい触れなくてもわかった。

「おやすみ」

短く言って、ユウはドアノブに手を伸ばし、ドアを開ける。中に入りかけるユウに、マナは追いつがる。

「待つてよ、ユウ。さっきから絶対変よ。何かあったんでしよう？ 言つてよ」

「だから、何でもないんだ。俺が勝手に怒ってるだけなんだ。別に、マナには関係ないことだよ」

「嘘。なんでもなくないわ。だったら、あたしに話してくれるはずだもの。どうしてあたしを見ないの？ あたしのこと嫌になった？

傍にいるの、邪魔？」

「違うっ！！」

振り返って、けれどユウはすぐにマナから視線をそらした。

「——だってあんたは、フジオミと話をする方がいいんだろ？」
不機嫌そうに、ユウが言う。

「一緒に話してるのを見たんだ。あいつは俺より大人だし、マナ、

あいつといると楽しそうだ」

マナは瞳を、瞬かせた。

どうやら、ユウはマナがフジオミと話すのをいやがっているのだ。

（だって、フジオミは 大人 じゃない。おじいちゃんと話してても怒らないのに、どうしてフジオミだとだめなの？）

心の中ではそう思ったが、実際にユウはいやがっている。

「もしかして、ユウ、妬いてるの？」

「違う——」

視線が合った瞬間、ユウはまた言いかけた言葉を飲み込んだ。

「ユウ？」

「——そう、かもしれない。わからない。

ただ、あんたとあいつが一緒にいるのを見るのは、いやなんだ」

ユウの腕が伸び、マナの二の腕をきつく掴んだ。

「マナはあいつがいいのか。あそこへ帰るのか。あいつの子供を産むために!？」

触れられた部分から、伝わってくる感情。狂おしいほどの激しい想い。

心臓が大きく鼓動を響かせるのがわかった。

だが、それは自分のものなのか、ユウのもののかはわからなかった。

ただ、確信した。自分とユウの想いは、同じものなのだと。

「——フジオミには、博士がいるわ。フジオミは、博士が好きなんだもの。あたしには、ユウがいるわ。あたしはユウが好きよ。ユウはあたしのこと好き？」

ユウは大きく首を振る。

「——好きだよ、好きだ。マナが一番。これ以上の気持ちなんて、どこにもない」

ぶつけるように、告げられる言葉。

それが心を熱くさせる。

「じゃあ、いいわ。あたしはずっとユウといるの」

ユウが驚いたようにマナを見つめた。

「ずっと？　ほんとに？」

「ええ。ずっとよ。本当に」

「何があっても？」

「何があっても」

苦しそうな表情を浮かべ、ユウはいきなりマナを抱きよせた。驚いて身動きできない彼女の肩に顔を埋め、自分も動かない。

「ユウ——？」

戸惑うマナに、苦しげに彼はささやいた。

「マナ。キスしてもいいか」

「キス？　どうするの？」

「触れるんだよ。唇で」

マナが答える前に、ユウは動いた。

「——」

言葉ごと、唇でふさいだ。強く抱きしめたまま、身動きもさせない。

押しつけるように深く、何度も、マナに触れた。舌を絡められ、貪るように求めるられて背筋がぞくぞくした。

「——俺とこうするの、いや？」

キスの合間に、ユウが問う。乱れた吐息の中、マナは喘ぐように答えた。

「いやじゃ、ない……」

体中が熱かった。

何も考えられない。ユウのこと以外は。

「マナが好きだ。死んじまいそうなくらい好きだ。もう、どこにもやらない。どこにも、帰さない」

甘いささやきに身体が震える。

「うん…そうしてもいいわ。ユウと一緒にいる。ずっと、ずっとよ。」

もう、どこにも帰らない……」

ほんの一瞬、マナの脳裏にはフジオミの言葉が甦ったが、それもすぐに消えた。

初めての行為に衝撃を受け、思考は冷静には働かなかった。きつく抱きしめ、キスを繰り返すユウにしがみついてもできずに、ただ身体を預けていた。

「我慢、できないよ、マナ。俺だけのものにしたい。独り占めしたい。これじゃ、足りない」

「どうすればいいの？ どうすればあたし、ユウだけのものになるの……？」

「セックスするんだよ」

その言葉なら、マナも知っていた。

セックス
生殖行為。

ドームでの 学習 の中で出てきた。

子供をつくるのだ。

未来へ繋がる新しい生命を。

ユウと自分で。

「そうすれば、あたし、ユウだけのものに、なれるの？」

「ああ。しても、いいか……？」

そのとき初めて、マナは腕を上げてユウを抱きしめ返した。ためらいはなかった。

「いいわ——」

鳥の声が、遠くで聞こえた。

マナが目を開けると、ユウが上半身を起こして自分を覗き込んでいた。

優しい眼差しに胸が熱くなる。

「目が覚めた？」

「ええ。夢を見てたの」

「どんな夢？ 俺は出てきた？」

「ええ。素敵な夢よ」

夢を見ていた。

幸せな夢だ。

少し歳を重ねたユウとマナと、たくさんの子供達が楽しく笑い合っている。

子供達はみんな、二人の子供だ。

幸せな夢の名残が、マナに不用意な言葉を口に出させた。

「ユウ、あたし、はやくあなたの子供がほしいわ」

「——！！」

聞いた瞬間、凍りついたように、ユウは動かなくなった。

見る間に青ざめていく彼の顔を、マナは身体を起こし、心配そうに覗き込んだ。

「——ユウ、どうしたの？」

「……」

「ユウ？」

手を伸ばして触れた肩は、小さく震えていた。

恐ろしいほどの後悔と動揺が、マナに伝わった。

「……駄目だ……」

絞りだすような、かすれた声がもれる。

「俺とじゃ、子供はできない……」

「どうして？ だって——」

「どうしてもだ——！」

マナの手を振り払うようにユウは離れた。黙って床に落ちた衣服を身につけはじめた。

「ユウ？ 怒ったの？」

無言で部屋を出ていこうとするユウに、マナは必死で呼びかけた。
「ねえ、待って。どうして怒ってるの？ ちゃんと教えて、あたし悪いこと言ったの？ 言ってくれなきゃ、わからないわ、ねえ、ユウ——！！」

泣きだすマナを、ユウは振り返った。

そして歩み寄り、抱きしめた。

「ごめん。マナ。泣かないで」

「だって、ユウが、怒ってるから——」

「違う。マナが悪いんじゃない。ごめん。俺が悪いんだ。こんなこと、するべきじゃなかった——」

「それって、後悔してるってこと？ あたしのこと、嫌いになったの？」

「違うよ。マナが好きだよ。ずっと好きだよ。死ぬまで変わらない。でも、やっぱり、こんなことするべきじゃなかったんだ……」

身体を離すと、ユウはそのまま部屋を出ていった。後にはとり残されたマナが一人。

ここに来て初めて、マナは一人で食事をした。

それまでは必ず老人とユウと三人で話をしながら食事をしていたのだ。老人が死んでからは、ユウと二人で。

フジオミは朝食をとらない。ユウは部屋を出てからどこに行ったのか、戻ってこない。

しばらくマナはユウを待っていたのだが、空腹に堪えきれず、ユウの分を残して一人で食卓へついた。

だが、少し口にしただけで、すぐにやめてしまった。

「一人でする食事って、こんなものだったかしら」

呟いて、マナはそれを片づけ始めた。いつもと同じように味付けをしたはずだ。だが、とてもまずく感じられた。飲み込んでも、まるで石を飲むように喉につかえる。これでは、食べないほうがましだ。

マナにはわからなかった。なぜユウが突然、あんなことを言い出したのか。好きだといいながら、自分のものにしたいといいながら、

そうするべきではなかったと言った。

（昨日はあんなに優しくかったのに、今日は傍にも来ない）

「――」

涙がこぼれた。やりきれなさやるせなさが同時に込み上げてくる。

身体がまだ、ユウを憶えている。

肌を這う、あたたかな手。声をあげずにはいられないほど執拗に触れてきた唇と舌。身体を貫き、突き上げてきた熱い欲望。痛みの後に来た、激しいほどの快樂。

あんなにも幸せだったのに、どうして今自分はこんな切ない気持ちで一人、ここにいるのだろう。

そうだ。目を覚まして、言葉を交わすまで、ユウは穏やかだったのだ。あの時は混乱してうやむやになったが、子供が欲しいという自分の言葉の何が、ユウをあんなに恐れさせたのか。

「――」

マナは自分が、ユウのことを何も知らないことに気づいた。知っているのは三歳までドームにいて、その後、老人達と暮らしていたことだけだ。それ以外、本当に何も知らない。

そもそも、わずか三歳だったユウがシイナに撃たれることになった原因は何だったのか。

ユウは意図的に隠したがっている。その部分に関することだけはそう考えると、今度は違う疑問もわいてくる。以前は気にもとめていなかった、あの地下のことだ。

先日、フジオミはユウが新しいシートとタオルを持って、地下へと降りていったのを見たと言った。そうして、マナに聞いたのだ。あそこには、人がいるのではないかと。

言われて、マナは驚いた。食事は自分達の分しか作ってはいない。人がいるのだとしたら、一番に食事はどうしているのだ。何より地

下に誰かがいるなどと、老人もユウもおわせることさえしなかった。それに、なぜ、マナに隠す必要があるのだ。マナに会わせては困るわけでもあるのか。

考えれば考えるほど、わからないことばかりだ。以前なら、自分には関係のないことだとすましてしまっていただろう。だが、今は違う。マナはユウのことが知りたかった。脆く、傷つきやすいあの孤独な魂を理解したかった。そして、癒してやりたいと思っていた。自分は知らなくてはいけない。もっと、たくさんのことを。

強烈な焦燥感にかられ、マナはフジオミの部屋へと急いだ。ノックもそこそこにドアを開ける。

「おはよう、マナ。どうしたんだい？」

「ねえ、フジオミ。昔のことを知りたい時は、あなたたちはどうしていたの？ ユウがおじいちゃんに聞いていたみたいに、あなたたちも年配の人に聞くの？」

唐突な問いに些か驚きつつも、フジオミは答える。

「いいや。それはドームのメインコンピュータにアクセスして情報を引き出すのさ。でもマナ、一体何を知りたいんだい？」

「このことよ。ここが廃墟になる前は、どんな所だったのか、知りたいの」

しばしフジオミはマナを見つめていたが、肩を竦めると、

「いいよ。ここにも端末はあるはずだ。教えてあげよう」

そう言って、マナを階下に促した。エントランス近くのカウンター奥の小部屋には、コンピュータが一台、備え付けられていた。これも、ユウが廃墟の貯蔵倉庫から持ち出してきたものの一つだ。フジオミは電源を入れて、コンピュータを起動させた。

「ずいぶん年代がかっているが、それでも使えるだろう。何せ基本構造はどれも同じだからね」

マナはフジオミがコンピュータの端末を操作するのをじっと見つめていた。それは思った以上に簡単だった。ある程度キーをたたいたら、あとは自分の望みを話すだけでいい。情報はすぐにプリント

アウトしてくれる。今までは気象状況など、あまり重要でない用途に使われていたようで、情報を引き出してもばれることはなかったのだ。

「マナ、情報を引き出すときは気をつけるんだ。重要な情報を覗けば、この場所が見つかってしまう恐れがある。まだ、戻りたくはないんだろう？」

「——ええ」

「じゃあ、僕はその辺を散歩でもしてるよ。またわからなくなったら聞きおいで」

「ありがとう、フジオミ」

フジオミが部屋を出ていったのを見届けてから、マナは端末に向かった。はやる気持ちを押さえてコンピュータにアクセスする。

ユウに関するデータを。

自分に関するデータを。

もちろん、データは機密としては扱われていなかった。無理もない。ドーム内の人間なら、マナ以外の誰もが知っている公然の機密だ。そしてマナは、通信と学習以外のコンピュータの扱いを知らなかった。シイナも、マナに必要なこと以外は教えなかったのだ。

ユウに関するデータに目を通した時、マナはユウの秘密を知った。三年間だけの記録であったが、老人でさえ知りえなかった情報が次々明らかになる。

サカキという血族の血をひくユウ。両親は極めて近い近親者——兄妹だったのだ。

父親の名はマサト。

母親の名はユカ。

アルビノという遺伝病を抱え、生殖能力もない彼は記録上では生まれて三年後に病死したことになっている。

ユウの持つ能力の発現は、ちょうど二歳の時、その身を宙に浮かせたことによって明らかになった。

記録の大まかな点だけを読み取ると、マナはすぐに次のデータを呼び出しプリントアウトした。

「だから、ユウはあんなこと言ったのね…」

生殖能力がない。

子供をつくれない。

それは未来を断ち切るということだ。

だが、マナには実感がわかなかった。

それはフジオミになげかけた疑問が、どうしても心に根付いていなかった。

フジオミを選んでも、いずれ人間はこの地上からいなくなるのだ。それなのにどうして、シイナはあんなにも強く、自分とフジオミの子供を望むのだろう。

マナは知リたかった。自分には、知らないことが多すぎる。もつともつと多くのことを知りたい。自分のこと、ユウのこと、フジオミのこと、シイナのこと、自分達をとりまく、この世界のこと。

ドームに帰っても、きつと誰も老人やユウのように何かを教えてくださいものはいないだろう。そう、シイナでさえ、マナには必要以上のことを教えてはくれなかった。

作業が終わりしだい、マナはすぐに通信を切った。

はきだされた紙には、自分の記録もある。

マナは自身の項目を見つけ、目を通そうと初めの部分を視界に入れた。

視線が、一点で止まる。

「――」

マナは自分の身体が冷えていくのがはつきりとわかった。

「…嘘…」

彼女の手から、プリントアウトしたばかりのデータが滑り落ちた。

『マナ——ユカ〓サカキの1世代クローン。』

部屋へ戻ろうとしたフジオミが足音を聞きつけて振り返ると、角を曲がってこちらへ来るユウを見つける。

「ユウ。どこにいたんだ？」

「――外だ。マナは、どうした？」

ユウの顔色は冴えない。フジオミには何かあったのかとすぐわかる。

「――喧嘩でもしたのかい？」

「そんなじゃない」

ユウはフジオミが嫌いだった。

彼の前では、いつも自分は何もできない子供のように思える。

出来得るなら、自分は彼になりたかった。

フジオミであれば、何のためらいもなくマナとともにいられるのに。

「あんたは知ってるんだろ？ 俺は、どうすればいい？」

不意に縋るように問いかけられて、フジオミはユウを憐れんだ。

可哀相なユウ。

決して結ばれてはならない女を、愛した。

わかっていても、愛さずにはいられない気持ちは、フジオミにも理解できる。

だが、この恋は、決して実ってはいけないものだ。

「君にはもう、わかってているはずだ」

「――」

「マナには、果たさなければならぬ義務がある。それを放棄することはできない」

「でもっ、マナは俺といってくれるって言った！――」

「なら真実を話すといい。全てを知っても、マナが君といたいと言

うのなら、僕は一人で帰ろう」

「——っ!!」

「じゃあ教えて、ユウ、フジオミ。あたしはクローンなの？」

不意打ちのマナの声に、二人はすぐに動いた。二人の背後に立つマナ。青ざめた表情が今にも倒れてしまいそうなほど儚げに見える。ぎこちない足取りで、マナは二人の前へと近づいた。手には握りしめられくしゃくしゃになった書類があった。

「マナ……」

「教えて。あたしは、ユカという人のクローンなの？ ユウはユカの子供なの？ あたしの、子供なの？」

フジオミは、そんな彼女をじっと見つめていた。偽りを、言うこともできた。

嘘ならいくらでも言える。顔色一つ変えずに。

マナはユウに惹かれている。ユウもだ。自分の言葉が、これからの二人の指針を決定するだろうことは十分にわかっていた。

「ああ、そうだ」

だからこそ、フジオミは真実を告げた。

「君はサカキの血をひくユカという女性のクローンだ。ユウはユカの卵子とその兄マサトの精子との人工受精から産まれた子供だ。遺伝子上では、ユウは君の息子になる。」

君達は、純粹な親子だ——」

マナは動かなかった。

動けなかった。

世界が、永遠に時を止めたかと思った。

「親子——」

その言葉が小さくもれるまで、どれほどの時間が経ったのだろう。不意に老人の言葉が甦る。

母と息子。父と娘。彼等は最も惹かれあつてはならないもの同士だ。なぜなら彼等はその身に最も近い血を宿しているからだ。

惹かれあつてはならない。

それは、 伴侶 としてはならないこと。

ああ。何ということだろう。

では、昨日の自分達の行為は――混乱と後悔で、思考がかけめぐる。それは、ユウが今日の朝感じていたものと、よく似ていた。

知っていたのだ、みんなが。

知っていたながら、教えてはくれなかった。

ユウの求めるものは、決して手に入らないもの。手に入るはずがない。ユウが求めているのは、母親なのだから。だが、自分がいる母親のクローンである自分が。だからさらってきたのか。自分は、身代わりか。

混乱の中、それでもマナは気づいてしまった。ユウが、自分にだけは隠しておきたかった最後の秘密にも。

「ユウ、あそこにいるのは誰！？ ねえ、一体誰なの、教えて！！」
立ち尽くすユウ。怯えたようにマナを凝視してる。

「マナ、何を言ってるんだ？」

訝しげなフジオミの声。だが、そんなことはもうどうでもいいのだ。自分は気づいてしまった。気づいてしまったのだから。

踵を返し、マナは走りだした。

「マナ、駄目だ！！」

哀願するような悲鳴が、背中に響いた。だが、マナは止まらなかった。自分の予感が正しければ、あそこにいるのは――

マナは階段を駆け下り、地下への扉を開けた。光量を絞り込んだ明かりが、足元の階段を暗闇に浮かび上がらせている。駆けおりながら、心の何かが止めていた。それ以上先へ進んではいけないと。

一番最後の扉は、あつけないほど簡単に開いた。ロックさえ、されていなかった。

広い室内は、倉庫を改造したものなのだろう。地下でありながら、高い天井は何だかいらんとしていた。

「――」
そして、マナは見た。部屋の中央においてあるベッドに横たわる女の姿を。

マナの知らない機器が、ベッドの横に備え付けられ、作動していた。

剥出しの腕には点滴のためのチューブがのびていた。

そつと歩みを進めても、女はみじろぎすらしなかった。規則正しい機械音に紛れて、かすれた吐息がもれていた。

マナは、見なければならなかった。

多分、年を重ねればそうなるであろう、自分自身の顔に^{よわい}齢を刻んだ、女を。

マナの瞳と、何処か虚ろな眼差しが、一方的に出会った。

それは、マナ自身。

たった一目で確信できる、マナのオリジナル。

ユカ＝サカキ だった。

「……いや……」

マナの視界が淡く滲んだ。

次の瞬間。

絶叫が、その部屋に響いた。

「マナ、部屋を出るんだ!!」

座り込んだマナを抱えるように部屋から連れ出すユウ。

マナは両手で顔を覆って激しく泣いていた。

追いついたフジオミが見たのは、泣きじゃくるマナを抱きしめるユウと、ベッドに横たわったままの、少し齢を重ねてはいるが、や

つれてはいたが、彼の憶えているユカの姿だった。

「生きていたのか!!」

フジオミもまた、新たに知る事実にも、衝撃を隠せなかった。

ユカは事故で死んだのではなかったのか。一体なぜ、こんなところに。

だが、自分はユカの死を確認したわけではなかった。ただ、そうと知らされただけだ。

「どうして、こんなことが…」

驚きながらも、フジオミはユカに近づいた。

「ユカ、僕を憶えているか。フジオミだ」

だが、ユカは彼を見はしなかった。定まらない焦点は空を見据えただけ動かない。

触れようと伸ばした手が、彼女の視界に入るほど近づいても、ユカは無反応だった。

フジオミの手が彼女の目の前で訝しげに振られても、視点すら重ならなかった。その様子は、どう考えても彼の知っているユカとは違っていた。

彼女は、何の感情も示さない。

「——ユウ、どういうことなんだ。なぜ、ユカがここにいる」

「……俺がシイナに撃たれた時、彼女もそこにいたんだ」

絞り出すような、苦しい声だった。

「ユカは片時も俺を傍から離さなかった。だから、シイナも俺を殺す時、ユカと一緒に連れていくしかなかった。」

二人で、谷を見ていた。繋いでいた手が離れたほんの一瞬だった。俺は撃たれて、谷底に落ちていった。多分、ユカは俺を追って谷底に飛び込んだんだ。おじいちゃんたちが見つけた時、ユカは俺をしっかりと抱いていたって……」

フジオミは顔を背けた。

多分、シイナにとっても計算外のことだったのだろう。

彼女にとって、ユカはまだ必要だったに違いない。

だが、ユカはユウを救けに谷底へ飛び込んだ。

ユカにとって、彼は己れの命にも等しかっただろう。

あんなにも待ち望んでいた命。未来へ繋がる、命だったからだ。

「でも、ユカはもう、俺が憶えてるユカじゃなくなってた——おじいちゃん、落ちた時か流される間に、頭を強く打ったんだろうって——それでも、子供みたいになって、俺を忘れても、まだ元気だったんだ。半年前までは」

半年前のある日、ユカは倒れたまま何日も意識不明のまま生死をさまよった。そして、ようやく目を覚ました。

だが、それだけ。

目を覚ましたまま、彼女はもう誰も見なくなった。誰の声も聞かなくなった。

永遠に失われたかけがえのない存在。

ユウにはわからなかった。

なぜ、こんなにも突然に、全てが自分から奪われなければならなかったのだろう。

全ての元凶は、シイナだ。

そう思うしかなかった。

憎むしかなかった。

でも、本当はもうそんなことはどうでもよかったのだ。

十三年かけて増した憎しみも、忘れられると思ったから。

マナが、彼女が傍にいてくれれば――

「――」

マナはきつく目を閉じていた。

だが、不意に目を開け、押し退けるように身体を離し、黙ってユウを見た。青ざめて、かける言葉を探せずにいるユウを。

「あたしの、子供なのね。あなたは」

「マナ――」

擦れたユウの声。

マナは強ばったような笑いを浮かべていた。

「親子だなんて……あたし、クローンだなんて――子供を産ませるために、再生したのね。そうよね。そうしなきゃ、人間は、滅びてしまっただもの」

「――」

互いの姿が目の前にあるのに、マナもユウもその姿が見えないかのようにだった。そんな二人を見兼ね、フジオミが近づく。

「マナ。落ち着いて、よく聞くん」

「さわらないで――!」

触れようと伸ばしたフジオミの手を、マナは強く払い除けた。怒りに満ちたまなざしが、フジオミを見据える。

「マナ、話を――」

「あたしが何に対して怒っているか、あなたにはわからないでしょうね、フジオミ。こんなこと何でもないって、そう思ってるんですよ?」

マナの瞳から、涙がこぼれた。

「あたしたちの責任だから。義務だから。どうしても、人類を存続させなきゃいけないから。」

うんざりするくらい言われてたわね。

でも、あたしとあなたが子供をつくって、それからどうなるの? あと五十年もすれば人間はここからいなくなるのよ。今度はあたしたちの子供同士を実験動物みたいにかかけあわせようって言うの?

わかってることじゃない、未来なんて何もないってことぐらい。子供なんかつくったってどうしようもないってことぐらい。たかだか半世紀生き残るだけのことが、そんなことが、一体何になるって言うのっ!!」

フジオミには何も言えなかった。

「親子だなんて——親子だなんて!!」

マナは溢れる涙を拭いもせず、その場から走り去った。

「マナ!!」

ユウがマナの後を追う。

残されたフジオミは、それを見ていることしかできなかった。

ユウの瞳は、狂おしくマナを、彼女だけを求めている。

自分にはわかる。永遠に手に入らないものに滲がれるということ。多分、もう自分達しか感じるできないもの。

フジオミはシイナを愛していた。

マナでも誰でもなく、ただ、彼女だけが、欲しかった。

彼女だけを、抱きたかった。

彼女が決して自分を愛さないだろうとしても、それでも愛していたのだ。

「——シイナ。僕等は共犯だ。ただ一つの目的のために、あの二人を傷つけた。それでも、正しいことなのか」

風が、フジオミを通りすぎていった。

彼は低く嗤った。嗤い続けた。そして思う。生き続けることに、何の意味があるのだと。

人が滅んでも、世界は変わらず美しいだろうに。

ユウがマナを見つけたのは、廃墟から少し離れた草地だった。座り込んだまま、動かない少女の傍へ、ゆっくりと近づく。

「マナ——」

マナはじつと、遠くを見つめていた。振り返りもしなかった。

「こっちへ来て、ユウ」

ぎこちなく、けれどユウは言われるままに従い、マナの傍へ来て座った。

マナはそんなユウに両手をのばし、抱きしめた。小さな子供にするように、胸に抱いた。マナの胸の鼓動を、ユウの耳が捕える。

「——あなたがこんなに懐かしいのは、あたしの遺伝子が憶えている記憶なのかしら」

マナの声は、どこか虚ろに響いた。

「十四歳のあたしは、まだあなたを産んでもいないのに、こんなにあなたを懐かしく思ってる。こんなことって、あるのかしら」

「——」

「ごめんなさい……」

「マナ……？」

「あなたをちゃんと育てられなくて。あたし、あなたを淋しくさせたわ。ごめんなさい、ずっと独りにして」

「マナのせいじゃない……」

「ううん。あたしのオリジナルだった人だもの。あたしと同じ顔の、同じ声の、きつと同じ心の人だったわ。ユカは馬鹿なことをしたわ。本当に、馬鹿なことをしたわ」

涙が止まらない。

「ユウ。あたし、データを見たの。あたしもあなたも、実験動物と同じなんだわ。あたしはユカ以外に子供を産める女がないからク

ローニングされた。あなたは、近親者同士でどの程度の障害が出るか試された。こんなひどいことって、あるかしら」

「マナ。ユカを責めちゃいけない。ユカは俺を大事にしてくれた。とても、愛してくれてたよ」

「だってわかるの、きつとユウやおじいちゃんに会う前のあたしは、ユカと同じことをしたわ。未来のために、人間が少しでも長く生き続けるために、平気で同じ犠牲を出したんだわ」

「違う、マナ。それは誰のせいでもない。仕方ないことだったんだ」
ユウは身体を離し、マナを見つめる。

「俺は、初めから全部知ってたんだ。だから、マナをさらった。マナに会いたかったから。初めからマナに言うべきだったんだ。俺が悪いんだ。マナのせいじゃない。だから、マナはもつと俺を責めていい——」

「言わないで」

目を伏せたまま、マナは首を横に振った。

「もう言わないで。あなたを責めるなんてできないわ。いいのよ。言っただしょう。何があっても、ユウのこと好きだって」

「——」

「こんなにあなたが愛しいのは、きつとあなたがあたしの子供だからなのね」

ユウの表情が強ばったのが、マナにははっきりとわかった。

彼を傷つけたのだ。そして、ユウを傷つけることによって、自分をも傷つけている。

心が痛い。

傷ついた部分が、悲鳴をあげてやまない。

それでも、マナはこの思いを振り切らねばならなかった。

これは、肉親に対する愛情なのだ。

それ以上で、あつてはならない思い。

老人の語った言葉が、マナの胸に突きささったまま抜けない刺となつて彼女を痛めつける。

母と息子。父と娘。それは一番に惹かれ合ってはならない者同士だ。なぜなら、彼らは最も濃い血を、その身体に等しく宿しているから。近親相姦は古代から現在に至るまで、人類の犯してはならないタブー——最大の禁忌なのだ。

禁忌を犯して生まれたユウ。

なんという皮肉だろう。自分達はさらなる禁忌を犯した。

だが、罪は自分達にだけあるのか。

ただ愛しただけではないか。

それを罪だというのなら、自分達を創りだした者こそが最も罪深いのではないか。

「——どうして、あたしたちここににいるのかしら……」

「マナ……」

いくら考えても答えなどではないこともわかっていた。

全てを知ることのできるものはいないのだ。

それを、今、こんな残酷な形で知らされようとは。

「もう戻るわ。一人にしておいて。今はもう、誰とも会いたくないの」

「わかった——」

数日後、ユカの容体は急変した。

慌ただしく、事態は悪化の一途をたどっているようにも思えた。

眠り続けるユカ。やつれた頬は青ざめて、残された時間が少ないことを確信させる。

介抱しようにもここには何もなかった。傍にただで、ユウにもマナにもどうすることもできない。

傍にいて、はつきりとわかった。

ユカは死ぬ。もうすぐ。確実に。

マナはただ、ユウを思った。

彼はまた、失わねばならないのだ。
自分の母を。

彼があんなにも望んだ、かけがえのない、唯一のものを。

彼女に触れた時、マナは理解してしまった。彼女もまた、誰にも
言えない影を心に持っていたことを。

自分に課せられた使命に対する誇り。

裏腹に失われていく生命への絶望。

それでも望まれる生命への重圧。

そして、隠された愛憎。

マナにはわからないさまざまな感情が、残り火のように彼女の中
に沸き上がり、消えていく。

義務と自分自身の想いの中で、ユカは少しずつ壊れていった。

彼女はたくさんの子をなし、けれどもユウ以外の誰も、生かし続
けることはできなかったのだ。

（可哀相なユカ）

ユカを見下ろし、マナは思う。

彼女の求めたものもまた、決して手に入らないものだったのか。

そして自分は、一体誰を失おうとしているのか。

もう何もわからなかった。

何を信じていいのかも。

自分は一体、どうすればいいのだろう。

マナには母親であった記憶などない。ましてや息子など知らない。
マナにはマナの記憶しかない。

それでも、確かなのだ。自分とユウは、最も近い血を繋ぐ親子な
のだ。

この想いは、決して許されない。

許されないのなら、なぜこんなにも愛しいのだろう。心も、身体も、全てがユウを求めているのに。

「おじいちゃん、救けて……！」

「見つけた？」

研究区の一画で、シイナは連絡を受けていた。

すぐにディスプレイの右下に周辺の地図があらわれる。

映し出されたのは、ドームからかなり北東にある廃墟群だ。比較的新しい年代のもので、資料として特殊コーティングされ、それ以上の崩壊を免れた一つである。

「ああ。なんてことなの。こんな遠くにいたなんて」

フジオミをあの手で海で見失ってから、シイナはマナだけではなく、フジオミの搜索も行なわねばならなかった。

海へ通じる川口で、二つの足跡を発見した。

多分、これはマナとユウのものだ。

そして、何か重いものを川から引きずった跡もあった。多分、マナとユウはフジオミも連れていったのだ。

マナとともに、フジオミも生きていると確信して、シイナは安堵した。

だが、今回のことでシイナはもう搜索をクローン任せにはできなかった。

再度議會を召集し、搜索の全権を自分に移させた。

廃墟群の搜索もあわずかになって、ようやくユウ達の潜伏場所もわかったのだ。

「新たに編成しておいた搜索隊に準備しろと伝えなさい。管理区には話を通しておく。それから、ヘリの用意も。搜索隊の準備が出来次第出発する」

シイナは通信を切り替え、管理区の保管を担当するクローンを呼び出した。

「ここにある武器で一番威力のある、しかも持続性の高い銃と弾薬をあるだけ用意しなさい。すぐに取りにくるはずだから」

通信を終えると、シイナは立ち上がり、着替えるために自室へと向かった。

「攻撃の時間をなるべく長く保てるように、レーザーと交替で銃も使えばいい。力を使えばそれだけ疲労する。疲労が限界を越えるなら、力も出せなくなるはずよ」

自分に納得させるように、シイナはひとりごちた。

残されたユウのデータは全て頭に入っていた。ユウの力も全能ではありえないのだ。勝機はそこにある。

今度こそ、終わりにしなければならない。

強い想いを感じた。こみあげるように。

あなたを探している。

様々な感情が漂い、移ろい、とどまることもなく。
そんな中で、唯一確かなもののように。

あなたを、探している。

違う。これは自分ではない。

自分の感情ではない。

すぐにわかった。

限りなく近く、それでも重ならない。

マナは自分がどこにいるのか、なぜ、ここにいるのかわからなかった。

白く反射する世界。

ドームの内壁に似ていた。白く、どこまでも白く続く、静かに死に絶えたような世界。

振り返ろうとした。

その時、視界の片隅に何かをとらえた。

背の高い、痩せた男が立っていた。

その姿を視界にとらえた時、泣きたくなくなるほどの懐かしさを感じた。

知らないはずなのに、ずっと昔から知っていたように思えた。

彼を、探していたのだ。
彼を、待っていたのだ。

確信した。

多分それが、ユカがずっと愛していた男だ。
顔が見たかった。

オリジナルであるユカがそんなにも愛した男の顔を、見ておきたかった。

だが、遠ざかる自分を感じた。

もう二度と逢えない。

これが、最後のなに。

胸が痛くなるほどの愛しさ。

マナは、自分が誰なのかもわからなくなるほどの強い想いに、ただ翻弄された。

にわかに現実に戻ったのは、自分を見据える瞳に気づいてだ。
同じ瞳が、自分を見つめていた。まるで、鏡を覗くかの如く。

椅子に背をあずけたまま、うたた寝をしていたのだ。
でも、ただの夢ではない。

ただの夢ならば、こんなに胸は痛まない。

これは目の前の、ユカの深層意識に同調したためだ。

「...ぜ、泣くの？」

なぜ、泣くの。
初めて聞く声。

なんという、無垢な声。

声音さえ、自分と似て聞こえた。

「あなたのせいよ……あなたがあたしたちをこんなひどい目に合わせたのよ……どうして——どうして、こんなことしたの……？ 何が望みだったの……教えてよ……」

こぼれる涙は後から後からシーツを濡らした。

ぎゅっと目をつぶり、マナは涙を堪えようとした。

不意に、頬に何かが触れた。

驚いて目を開ける。そして、マナは自分に触れている、ユカの手を感じた。

「ユカ……？」

「なぜ……泣く、の……」

夢見るかのような虚ろな眼差し。

だが、触れる指は確かだ。

指先から、流れこむあたたかな感情も。

何の苦しみもない、ただ、愛しさにあふれた感情。

胸が痛い。

彼女の中には、もう愛しか、なかった。

愛とともに生きることしか、できなかった。

そうだ。どんなになっても、生きることが望んだのだ。

どんな姿でもいい。

どんな人生でもいい。

こんなに絶望しなくても。

それでも、生きていたい。

生きていてほしい。

そう思えるまで、ユカは何度涙を流したのだろう。

何度絶望し、それを越えてきたのだろう。

生きることさえできなかった命を、彼女はたくさん通り過ぎてきたのだ。

愛していると、告げることすらできなかったか弱く愛しい命達。

そんな中で、ようやく出会えた新しい命。

愛さないわけがない。

愛せないわけがない。

「ユウ……」

愛しさに、胸がつまる。

こんなにも、愛していたのだ。

切ないほどに。

痛いほどに。

だから、ユウも何年経つても、色褪せることなく憶えているのだ。
あまりにも大きな、深い愛情だったから、失った哀しみを癒せず
にずっとあがいていたのだ。

でも、愛は今もここにある。

彼女の内側に、今も変わらず、愛は生き続けてる。

「ユウ……来て……」

マナは我知らず呼んでいた。

「ユウ、来て！！　お願い、今すぐ！！」

今しかないのだ。

今を逃せば、もうない。

（今なら伝えられる——だって、この人は自分だもの）

「マナ、どうした！？」

強い思念に呼ばれて、空間から不意に現われるユウは、切迫したマナの声音に戸惑っているようにも見えた。

「来て、ユウ、今しかないのー!!」

手を伸ばして、マナはユウに叫んだ。それに応えるユウの大きな手を、マナはしっかりとらえた。

触れた瞬間、ユウは感電したかのように身を震わせた。

そして気づく。マナを通して、ユカに触れていることを。その心に、触れていることを。

初めての感覚に無意識に身をひきかけるその手に、マナはありつたけの想いをこめた。

今感じているものが、真つすぐに、正直に、ユウに届くことを願いながら。

「マナ——」

「ユカの心よ。あなたへの想いよ。今しかないわ。受け取って」

触れた肌から伝わる、確かな感情。
伝わる愛。

涙がこぼれる。

見失い、求め続けた愛が、還っていく。

愛されていたのだ。

今も、少しも変わることなく。

ユカの想いに融けて、ユウの想いもまた、彼女に還っていく。
あふれる涙を拭いもせずに、ユウは一言、呼んだ。

「……かあさん——っ!!」

虚ろな瞳が、一瞬だけユウに向かって焦点を結んだような気がし

た。

唇が、かすかに笑みを刻んだような気が、した。

明け方近くに、ユカは息をひきとった。眠るように静かな死だった。

ユカは、やはりみんなと同じように墓所に埋葬された。埋葬にはユウとフジオミが立ち合った。

マナは、墓所が見える離れた場所から、二人に気づかれぬようそっとそれを見ていた。

全てが終わりユウとフジオミが去った後、マナは静かに歩みより、墓所へと向かった。

墓所の一番端の、老人の墓の隣に、ユカの墓は作られていた。

盛り上げられた新しい土。

添えられた花。

死はなんて呆気ないのだろう。そう感じずには、いらなかった。老人が死んで、まだ一月も経っていない。

こんなに簡単に、死はやってくるのだ。特別なことでも何でもなく。

いつか、自分も死ぬだろう。

このユカのように、唐突に、逃れようもなく。

だが、マナには、まだわからなかった。

今ここにいる自分は、何なのだろう。

今朝死んだ女の細胞のひとつから生み出されたクローン。生命の理から外れた作為の結果。

それが、自分か。老人が言った、これが自分か何であるかということなのか。

「おじいちゃん、教えて。自分が何であるか見極めることに、どん

な意味があるの？ 意味はどこにあるの？ どうやって納得すればいいの？ こんなことなら、あたし、何も知らないほうがよかった。知らないままで、おじいちゃんとユウと、ずっと一緒にいたかった……」

答える声はない。

マナの視界が、涙で滲んだ。

老人に会いたい。

教えてほしい。

「ユウが好きな。こんなに、好きな。なのに、どうしていけないの……？」

帰りがけの吹き抜ける風は、いつもより冷たかった。マナは気づかなかったが、かつてこの地には冬が存在したのだ。空から白い粉雪が降りてきて、視界の全てを白銀に染める。そんな失われた季節の名残をかすかにだが思わせる、冷たさだった。

「寒い……」

身を震わせて、マナは中へ入った。

長い廊下を抜けて階段に歩を進めた時、マナは踊り場に立つフジオミの姿を認めた。

「――」

今はフジオミとも話したくなかった。マナは俯いたまま階段を上り、フジオミの前を通りすぎる。

「二人で、一緒に戻ろう、マナ」

静かに背後に響く声。マナはゆっくりと振り返った。さほど狭くもない踊り場で、フジオミの眼差しとぶつかる。

「フジオミ」

「これ以上彼とここにいても、つらいだけだ。君には義務がある。責任がある。僕等はいわば運命共同体だ。決められた義務から決して逃れることはできないんだよ」

そう言うフジオミは、無感動な口調の中に、どこか痛みを宿しているようにも思えた。彼もまた、どうしようもない運命に縛りつけられたような。

「あたしは、いけないわ。ユウと約束したもの。ずっと一緒にいるって。何があっても、彼といえるの」

「一緒にいても、苦しいだけだよ」

視界がかすんで、フジオミの輪郭がぼやけた。

「でも、会えなくなるよりいいわ。一緒にはいられるもの。一緒にいたいんだもの。あなただって、そうでしょう…?」

涙が、マナの瞳から溢れる。堪えきれない痛みが沸きあがるのを、止められなかった。

胸が、痛いのだ。痛くて、苦しくて、つらくて。

でも、つらくても、いつか慣れる日が来るかもしれない。

穏やかに、また前のようにユウと過ごせるかもしれない。

「――」

声を殺して泣くマナを、フジオミは優しく抱きしめた。そうしてマナが泣きやむまで背中を撫でていた。

「ありがとう、フジオミ。ごめんなさい」

マナは身体を離し、泣き腫らした瞳でフジオミを見上げた。

「急いで答えを出さなくてもいい。ゆっくり考えて決めるんだ。いいね」

フジオミは大きな手でマナの頭を撫でた。優しい感触だった。

「ええ。ありがとう、フジオミ」

マナは小さく微笑った。

「いい子だ」

フジオミは笑い返し、階段を上がって自分の部屋へと消えた。マナはじっと、それを見送っていた。

（あの人を、愛せればよかったのに）

そう思わずにはいらなかった。

フジオミは優しい。彼を愛することが、きっと正しいことなのだ。正しいことなのに、自分はユウを愛した。同じ血を持つ、自分の息子を愛した。

「マナ」

ためらいがちにかかる声。間違えるはずのない声。マナはゆっくり視線を向けた。立ち尽くすその場に、階段を上ってユウが現われた。

「――」

堪えていた涙がまた溢れた。

どうして哀しみは、いつも、こんなにも、溢れてくるのだろう。間違いだとかわかっていても、この想いは哀しみと同じ強さで溢れてくる。

「ユウ……」

胸が、痛い。こんなにも、痛い。

縋りつきたいのに。

抱きしめてほしいのに。

想いの全てが、許されないことだなんて。

「マナ、泣かないでくれ……」

感情を殺した声がもれる。だが、マナにはわかっていた。そうでもしなければ、ユウもまた禁忌を忘れて、マナを抱きしめたい衝動を押さえきれなくなることを。

マナは涙を堪え、頬を手の甲で拭った。

「ごめんなさい。みつともないわね。泣いてばかりで」

「いいや。あんたは綺麗だ、マナ。とても、綺麗だ……」

そっと近づいてマナの長い髪の一房を取り、ユウはくちづけた。愛しさを隠さずに。

ゆっくりとその手は離れた。

「マナ。海へ行こう」

「え？」

唐突な誘いに、マナは驚いた。

「明日、二人で海へ行こう。一日だけでいいんだ。何もかも忘れて俺と過ごして。前みたいに、笑って過ごそうよ」

かすかに、ユウは笑った。

そんな切ない笑みを、マナはより一層愛しく思った。

許されるはずもないのに。

よく晴れた一日だった。

風は強すぎることもなく、眩しい日差しに穏やかな余韻を与えている。

「ユウ、海だわ」

マナが浜辺へかけていく。途中、靴を脱ぎ捨て、海へと入っていきこうとする。

「マナ、危ないよ」

「大丈夫よ。こうしてみたかったの。いい気持ちよ。ユウもどう？」

「まだいい。行っていていいよ。ここで見てる。見て、いたいんだ」

マナは頷いて、海へと駆け出した。

打ち寄せる波にためらうことなく入り、浅瀬を歩いていく。

風が長い髪を後ろにさらい、靡いていた。

楽しそうに、マナは笑っていた。

そんなマナを見て、ユウも知らず穏やかに笑っていた。

初めて海を見せてくれたのは、老人だった。

でも、その時は、もっとたくさんで来たのだ。大勢で、お弁当を持っ

たが、自分は今のマナのように明るく楽しむこともせず、ただじつと、海を見ていた。

ユカを失った痛みを癒せず、差し伸べられていたあたたかな手を拒んでいた。

そんな自分にも、みんなは優しくかった。惜しめない愛情をそそい

でくれた。

優しい想いに満たされて、癒されない傷も、やがて忘れることを覚えた。

流れていく、穏やかな日々。

本当に、たくさんの人が、ユウの人生にかかわってくれた。

ユカが自分を見てくれなくても、幸せになれることも知った。だが、自分はいつでもおいていかれる者なのだ。

どんなに愛されていても、彼らは死んでいく。自分よりも確実にやく。

たくさん死を見てきた。

本当に、たくさん死を。

おいていかないでくれと、一緒に連れていつてくれと、何度泣いて縋っただろう。

それでも、願いは叶うことなく、一人、また一人と逝ってしまった。

いつしかおいていかれることにも慣れ、静かに、死を受け入れるようになった。

本当は、ずっと恐れていたのだ。

一人になってしまうことを。

老人を失った。

母親も失った。

それでも、まだ生きている自分がいる。

恐怖さえ、今はもうない。

マナがいるからだ。

マナがいるから、まだ生きていられる。

老人の言葉が、今あざやかに脳裏に響く。

私達が与えてやれなかったものを、マナがおまえに、惜しみなく与えてくれるだろう――

その通りだった。

癒されないと思っていた傷も、渴いた孤独も、自分に欠けた全て
のものを、癒してくれたのは、あの少女だった。

マナでなければ、駄目だったのだ。

なぜこんなにも、彼女だけが、特別なのだろう。
愛せるものなら、いくらでもいたというのに。

（みんな優しくしてくれた。
みんな大好きだった）

それでも、愛せたのは母親だけだ。

母親しか、愛せなかった。

だから求めるのか、あの少女を。

もうすでに、復讐のためですらなく、ただ彼女が欲しいから。
彼女しか、もう愛せないから。

「ユウーっ、見てえ、こんな大きな貝殻あ！」

遠くで手を振る少女に、ユウは笑って手を振り返す。

彼女を愛していた。

誰よりも、強い想いで。

自分はもう、こんなに強く誰も愛せないだろう。

この少女以外、愛しいと思えないだろう。

例えどれほどの人間が、再び自分の傍にいても。

「ユウもこっちに来てみてえ！ 本当にすごいんだよー」

「今行くよ」

ユウは自分も靴を脱いで立ち上がった。そうしてゆっくりと海辺へ向かう。

幸せだった。

例え罪だとしても、まだ、愛せる自分が幸福だと理解した。

彼女を愛する度に、心の内に沁みわたる、このやるせない泣きたくなるほどのあたたかな感情を、嬉しいと思えるから。

陽が、傾いていた。

一日が終わる。

二人は裸足のまま砂浜を歩いていった。
両手に靴を持って、まだあたたかな砂の感触を確かめるようにゆつくりと。

「マナ——」

小さな声に、ユウよりもほんの少し先を歩いていたマナは、静かに振り返る。

「何？」

「帰っても、いいよ」

「え——？」

聞き返したマナに、ユウは繰り返す。

「帰ってもいいよ。今なら、止めない。あんたは戻りたい場所がある。フジオミと、行けばいい」

その言葉に、マナは驚きを隠せなかった。

彼の口から、そんな言葉を聞こうとは思ってもいなかったのだ。

ユウはマナと目を合わせないままだ。

「ユウ、あなたはとうするの」

「——俺は、もとに戻るだけだ。ただそれだけだ」

そう言うのと、ユウは再び何もなかったかのように歩きだした。マナを通り過ぎ、ただ静かに。砂を踏む音も波に重なり聞こえない。

マナはしばし、その場に立ち尽くした。

ユウの気配がそっと離れていくのがわかる。

もとに戻る。

簡単な言葉だった。

けれど、そんなことはもうできはしないのだ。

それを、二人が一番よく知っていた。

老人はもういない。

自分がドームへ帰ったら、彼は一人になるのだ。

たった一人で、残る生涯を過ごすというのか。

「——い、一緒に行きましょう、ユウ。そうよ。博士に頼むわ。あなたが一緒に暮らせるように」

振り返りざま、マナは言った。

「できない」

振り返らずに答えるユウ。口調は苦しげだった。

だが、マナにはわからなかった。手に持っていた靴を放り出し、駆けよる。

「一人なんて、だめよ。あたし、あなたをおいては行けない。お願い、一緒に行きま——」

「そうして、あんたとフジオミを見てろって言うのか!! 一生黙って!？」

マナの言葉を、ユウが遮る。

両手を伸ばし、力を込めマナを引き寄せた。

「——」

マナの驚く間もなく唇が重なった。

前とは違う、ほんの一瞬の、ただ求めるだけのくちづけ。

「なんでだ……」

強くマナを抱きしめて、ユウは呟いた。

「あんたが好きだ。誰にも渡したくない。でも、わからないんだ。

これがどんな気持ちなのか。あんたを母親として愛してるのか、違う女として愛してるのかわからない。ただ、あんたが好きだ。それしかないんだ」

彼の身体は、震えていた。

「好きだ——好きなんだ、マナ。こんなに好きなのに、どうして駄目なんだ……っ!!」

激しい感情が伝わる。

ぎりぎりの理性を、危うい激情を、相反しながら内に保つことに、ユウもまた疲れていた。

愛しているのに、こんなにも求めているのに、許されない想いにマナは、そんなユウが愛しかった。だから、腕をのばして彼を強く抱きしめた。

ユウの身体が強ばったのがわかった。

「ユウ。あたしも好き。あなたが一番好き。この気持ちは、なかったことになってできない。あなたを愛してる」

「マナ——」

「あたし、もうドームへは帰らない。あなたと生きるの」

ぎこちなく、ユウは抱きしめていたマナの身体を離れた。

狼狽えた瞳が、見返す真摯な眼差しのマナを見下ろしていた。

「マナ。俺はあんたに未来をやれない。残るものを、与えてやれない。それでも、俺を選べるのか」

「選ぶのではないの。そんな感情じゃ、ないの。あなたを好きなの。一緒にいたい。未来の何も、関係ないの」

一途な想いで、マナはユウを見つめた。

それを感じとったユウは、恐れるように震える手でマナの頬に触れた。

「本当に、マナ……?」

「ええ」

「不便な生活しか、ないよ……」

「あなたがいるわ」

「子供も、やれない……」

「あなたがいればいい。ドームにあるどんな幸せより、あなたがいる幸せのほうがいいの」

ユウはきつく唇を噛みしめた。泣きだしそうな顔で、マナをずつと見ていた。

「――俺も好きだ。あんたを愛してる。あんた以外欲しくない。こんなに、好きだ……」

そのまま、二人は唇を重ねた。

マナは、これを罪だとわかっていた。

ユウも、わかっていた。

けれど、二人とも溢れる想いを止められなかった。

そして罪だとわかっていても、それでも二人は幸せだった。

「ユウ――」

「愛してる、マナ……」

ささやきだけで、こんなにも嬉しい。

抱きしめてくれるだけで、こんなにも愛しい。

自分達は、会ってはいけなかった。

惹かれてはならなかった。

けれど、会ってしまった。

惹かれてしまった。

波の音が聞こえる。

自分達は、たった二人でなんて遠くまで来てしまったのだろう。

もう戻れない。

戻れないのだ。

遠くで、自分を呼ぶ声がする。

マナはその呼び声に、驚いた。

これが夢なのだというのを忘れていた。

近づく声は、やがて懐かしい姿を現す。

（おじいちゃんー！）

マナはかけより、老人に抱きついた。

これこれ、マナ。

（会いたかったの。おじいちゃんに、本当に会いたかったの）

しがみついたまま、マナは顔を上げた。

前と何ら変わることはない、懐かしい老人の顔がある。

（今おじいちゃんはどこにいるの？ 死んだ人達が行く場所に、いるの？）

私達はどこにも行かないよ。ずっとここにいるんだよ。おまえたちと同じ世界に。

（土に、なったの？）

そうでもあるし、そうでないとも言える。私達は、地球と同化したのだ。

（地球？　今、あたしが立っている、球体のことよね？）

そうだ。死もまた消滅ではありえなかった。肉体は失われても魂はここにある。私達は、全ての命を産み出した世界へ、もう一度還ったんだよ。

（命って、何なの？　どこから来るの？）

聞いた瞬間、マナは風を感じた。海から来る、あの風を。

さあっと足元を水が包んだ。

下を見ると、マナは海にいた。足首までの水が風にさざめいていた。

命は、太古の海から産まれた。海は、地球から産まれた。地球は、宇宙から。たくさんのほんの些細なきっかけから、たくさんの奇跡が産まれた。今ここにおまえさんやユウが存在していること、これこそが、奇跡なんだよ。

（海の方こうには何があるの）

老人は静かに腕を上げ、指差した。

ありのままの命が。全ての命が存在する世界が。

（そこでなら、あたしたち生きていける？）

マナの言葉に、老人が満足げに頷いた。

マナ。自由になりなさい、全てのことから。全てのしがらみを断

ち切つて、ただ、あるがままに。どこまでも続く海の向こうへでも、おまえさんは行ける。ユウが、連れていってくれる。

（おじいちゃん。あたし、ユウと一緒にいてもいいの？）

老人は答えなかった。ただ、微笑んでマナを見ていた。

憶えておきなさい。例えどんなことが起きようとも、私達の還る場所は、この世界しかないのだということを。

光が降ってきた。

そろそろ、行かねばならんようだ。

（おじいちゃん？）

老人の身体が、光に融ける。同時に質感がなくなる。

いつもおまえさんたちが幸せであるように祈っているよ。

声すら希薄になる。

マナは老人を捕らえようと必死で手を伸ばした。

（待つて、おじいちゃん！！）

マナの願いは届かなかった。

光がマナの視界から老人を奪った。

そしてそのまま輝き、全てを隠した。

「……ナ」

ユウの声に、マナは目を開ける。

心配そうに覗き込むユウ。

手を伸ばし、確かめた。

「ユウ」

木のはぜる音。

焚火があたたかに周囲を彩っていた。

風の当たらぬ場所に起こした焚火を前に、寄り添ったまま眠ってしまっていたのか。

「泣いていた。何か、怖い夢でも見たのか」

「ううん。おじいちゃんが、来たのよ」

「おじいちゃんが？」

「自由になって行きなさいって。全てのしがらみを断ち切って、ただ、あるがままに。そう言ったの」

マナは腕を伸ばしてユウにしがみついた。抱きしめかえす強い腕を感じる。

この少年とともに生きると、自分で決めたのだ。

「遠くへ行きましょう」

微笑って、マナは言った。

「マナ——？」

「ここを離れて、もう誰もいない海の向こうへ行きたいの。ユウ、連れて行って」

「本気なのか、マナ？」

「ええ」

ユウは身体を離し、不安げにマナを見つめていた。

「何があるかわからないよ。食べるものだって、ないかもしれない」
マナは笑って首を横に振った。

「あなたがいいの。だから、二人で行きましょう。海を越えて、世界の果てへ」

「マナ——」

幸福な未来を確信して、マナはまだ見ぬ世界を思った。

「あなたと見るなら、世界はきつとどこでも美しいでしょうね。そうして、二人で生きていくのよ。まだ見たこともない世界で、まだ見たことのない美しい色と、光と、たくさんの生命の群れを、あなたと見るの」

ノックの音に、フジオミは目を覚ました。

「はい？」

まだ夜明けには時間があるのだろう。

ほんのりとうす明るい室内でそれを理解する。

急いでベッドを出、フジオミはロックを解いてドアを開けた。

「お早よう、フジオミ。ごめんなさい。こんなに早くに」

「いや、いいよ。どうぞ」

身体を引いて、フジオミはマナを中へ迎え入れた。ドアを閉じるなり、

「フジオミ、あなたをドームへ帰すわ」

マナの澄んだ声が耳に届く。秘かな確信とともに振り返る。

「君はどうするつもりだ？ ユウと残るのか？」

「ええ」

確信どおりの答。

マナは微笑んだ。あどけない表情で。

次にかける言葉を、フジオミは一瞬で考え直さねばならなかった。

「そうだな。君なら、できるな——」

この笑顔の前に、それ以上何が言えようかと、フジオミは笑った。

「あなたはあのドームで一生を終えるの？」

「僕は君とは違う。あそこでしか生きられない。だから帰るよ」

「後悔はないの？」

「ない。僕は僕にしかねないから、ありのままを受けとめる。例えばそれが、君にとって歪んで見えても」

「博士と、生きるのね」

「できることなら」

「あなたがいれば、博士はきっと大丈夫よ」

無邪気なマナを、フジオミは心底羨ましいと思った。

彼女は幸せになれる。その幸せを邪魔することはできない。

だが、シイナはどうなる。彼女の幸せは、マナにかかっている。マナがいなければ、シイナの幸せはありえないのだ。

（だが、マナが永遠に、彼女のもとから去ったら？）

そうして、もしも、シイナが全てをあきらめてくれたら、もしかしたら、彼女は自分を振り返ってくれるだろうか。浅ましいと思いながらも、都合のいい夢を見る。その時。

「！？」

太陽とは違う一瞬の光が視界を掠めて消えた。

聞いたことのない音が連続して重なった。続く轟音。床が揺れた。フジオミはとっさにマナの腕を掴み、引き寄せた。

「これは何！？」

マナは揺れる床で必死にフジオミの腕にしがみつき、バランスを保とうと努力した。

「銃声だ。爆発音もした。シイナが、ここを見つけたんだ！！」

心臓が、痛い。

いやな感覚だ。そして、これは気のせいではない。

「ユウ！！」

マナは外へと走りだした。

「マナ、危険だ！！」

ガラス張りのエントランスの外に、小さくユウの姿が見えた。

「ユウ！？」

「マナ、来るな！！」

振り返らず、ユウが叫んだ。見えない壁がたくさんのレーザーを反射し、遮っていた。ついでたくさんの銃声にかき消され、すでに声などどかない。

「マナ、危ない、下がれ!!」

追いついたフジオミに腕を捕まれ、マナはそれ以上ユウの傍へ行くことはできない。

攻撃を仕掛ける方も仕掛けられる方も必死だった。

だが、ユウには攻撃を受けとめるだけで精一杯だった。自分に対する攻撃があまりにも集中しすぎて、反撃できないのだ。そしてその攻撃は、一向に衰える気配がない。

マナには、ユウは極度に疲労しているように思えた。

ユウのあの力は無尽蔵ではない。使えばその分身体に負担をかける。

そして、彼はたくさんの武器を前に、たった一人で戦わねばならないのだ。

ついに、ユウの身体がぐらりと前に傾ぐ。同時に、彼を取り巻いていた見えない力が弱まった。

一瞬の後、ユウの身体を二本の光の筋が貫いた。ユウの膝が落ちた。

「ユウ!!」

「マナ、よせ、出るな!!」

フジオミの静止も聞かずに、捕まれていた腕を振り払い、マナはユウのもとへ走った。見えない壁はまだ完全に消えてはいない。時折壁を突き抜けるレーザーを奇跡的にも避けながら、ユウへとかける。その姿をとらえたのか、レーザーも銃も攻撃をやめた。

「マナ、来るなって…」

胸を押さえていたユウは、顔をあげてそれだけを言った。そして、そのままユウはマナの腕を掴み、廃墟の入り口にいるフジオミのもとへと跳んだ。

「ユウ、マナ!!」

廃墟内に、突然現われた二人に驚いたものの、フジオミはすぐにユウの身体を焼いた傷を見た。

右胸と左腿が肉の焦げた臭いを放っている。

レーザーで焼かれた傷は治せないと聞いたことがあったのを、記憶の片隅が覚えていた。レーザーは細胞を殺すのだと。再生不可能になるまで。今の医学でも、再生は不可能だ。

ユウは蒼白な顔で、苦痛を堪えるように目を閉じて動かない。

「いや ユウ、いや、死なないで…」

口に出して、マナはその言葉の恐ろしさに身震いした。死。

それは全てを無に返すもの。

愛した命を永遠に奪い去るもの。

「いや、ユウ、ユウ、死んじゃ駄目、そんなのいや…」

「マナ、そばにいてくれ。最期まで…」

すでにユウは死を覚悟している。

外は奇妙なほど静かだった。

だが、強い、たくさんの感情が伝わってくる。戸惑いや、恐怖、焦り、悲しみ、一人のものではない、たくさんのクローン達のものだった。

感情がないと教えられていた彼等は、ユウの力を恐れると同時に、シイナを恐れていた。自分達にこのようなことをさせる彼女を。

その時、徐々に大きく、近くなってくるヘリの音に気づいた。

「マナ、シイナが来る——」

フジオミとマナは目を見合わせた。
時間がない。

このままではシイナ達がここへ踏み込んでくるだろう。

ユウは動けない。シイナがどう行動するかは目に見えている。
こんなふうに、自分達は終わるのか。

まだ何も始まっていない。

まだこれからのなのに、こんなふうに終わるのだろうか。

「——いいえ」

毅然とした声。

「違うわ、ユウ。あたしたちは生きるの。二人で、生きるのよ。そしてどこまでも行くのよ。この世界の果てまでも」

「マナ……」

「あたしをおいて死ぬつもりなの？　あたしをたった一人、ここに残して？」

そんなこと許さない。

生きるのよ。ここでこんなふうに死ぬのは絶対に許さない」

マナは強く、ユウの手を握りしめた。その指先にくちづけける。

「だから、今は戻るわ。死んでは駄目。きっと迎えにきて。あなたが本当にあたしを欲しいのなら。あの日あたしをさらったように、もう一度連れにきて」

「マナ……」

「ユウ、あなたがいないのなら、この世界に意味はないの。あなただけがあたしの生きる意味なの。」

だから、待つてる。あなただけを、待つてる」

二人の手が、離れる。

マナは一番低い可能性に賭けた。

今、ユウを死なせないこと。

このままほおっておいたら死ぬかもしれない。

でも、今ここでシイナを止めることもできずに彼の死を確実にするよりは、助かる可能性はある。

自分の言葉なら、シイナは聞いてくれるはずだ。

「行きましょう、フジオミ」

「マナ!!」

崩れかけた廃墟から出てくる二人の姿を見て、シイナはへりを下りてかけよった。

そうして、小さな少女の身体を強く抱きしめた。

「博士——」

対するマナは、複雑な表情で抱擁を受けとめた。

「ああ、よかった。よく無事で」

「彼はもうすぐ死ぬわ。レーザーが心臓を貫いていたの。もう意識もないもの」

乾いた声音に、シイナは鋭い眼差しを向けた。

「マナ、それは本当なの？」

「ええ。ちゃんと確かめたわ。だから逃げてこれたの。博士。今なら逃げられるわ。はやくここから逃げましょう。すぐにドームへ帰るの。もう帰りたい。博士が迎えにきてくれるの、ずっと待ってたの。今すぐあたしを連れて帰って」

「ええ、ええ。すぐに連れて帰るわ。行きましょう。フジオミ、あなたも乗って」

「ああ」

動きかけたフジオミの視線が、ふとマナを捕らえた。マナもまた、フジオミの視線に気づき、互いの眼差しが揺らいだ。

本当にいいのか——フジオミの瞳が問う。

博士には何も言わないで——マナの瞳が哀願する。

二人は無言のままへりに乗り込んだが、フジオミはマナほど現状を樂觀視していなかった。

あのシイナが、マナの言葉一つで、ユウの死体を確認もせずこの場を去ることがあるだろうか。

自分は、マナよりもシイナという女を知っている。彼女は目的の

ためには手段を選ばない。

そして、失敗に対しては、同じ轍を二度は踏まない。

さらにそれ以前に、フジオミにはユウが助かるとはとても思えなかった。あの状態で傷が回復するなどとは思えない。

マナは愚かなことをしたのではないか。彼女だけを求める魂を、たった一人で置き去りにするなど。

一方、フジオミの言いたげな思いを、マナは敏感に感じ取っていた。

後悔が、彼女を侵食し始める。

本当に、これでよかったのだろうか。今ユウと離れて、本当によかったのか。

できることなら、今すぐに引き返していきたくった。だが、戻ってどうなるだろう。

今のユウではマナを連れて逃げることはできない。ましてや自分がユウを守り、連れて逃げることも。だから、今はユウの能力と、あの言葉を信じるしかなかった。

マナのためなら、何でもしてやる。

脳裏に響くユウの声。

心は、これが正しいと知っている。

ユウは約束を破らない。決して。

信じている。他の誰でもなく、ユウを、ユウだけを信じている。

（おじいちゃん。どうか、ユウを守って）

だが、その思いは背後で起こった遠い爆発音に断ち切られた。

「!？」

振り返ったマナが窓越しに見たものは、たちのぼるコンクリートの灰色の粉塵のみ。

記憶にある懐かしい廃墟は、ヘリがさらに高く飛びたつた後にさえ、見ることは叶わなかった。

「博士、どうして!!」

「あんなものを、放置しておいたからよくなかったのよ。滅びを迎えた醜い廃墟はもう意味がないものよ、マナ。いつそ壊してしまつたほうがいいのよ」

平然と、シイナは言った。

「こんな原始的な世界で今まで生きていたこと自体が異常なのよ。もっと早く気づいて始末しておくべきだったわ」

その時、マナは悟った。シイナの内にある壊れた優しさを。欠けた愛情を。

そこにいるのは間違いなくマナの愛した、けれど幼いユウを殺せた女なのだ。

目の前が暗くなるのを、マナは感じた。

「――」

呟きは、マナを抱きとめたフジオミにしか聞こえなかった。

救けて、ユウ。

そう、マナは呼んだのだ。

マナは意識を失ったままドームに戻った。高熱が続き、しばらくはシイナ以外は面会謝絶の状態だった。

フジオミは密かにユウ達のいた廃墟群を搜索させたが、崩れて見る影のないコンクリートの残骸の下からは、いつさいの生命反応は確認されなかった。フジオミは一体この事実をマナにどう告げればいいのか悩んだ。

そうして、さらに三日が過ぎた。

「あら、フジオミ」

マナのいる研究区域のメディカルセンターの前で、フジオミはシイナと鉢合わせした。

「やあ、シイナ。マナはどうだい？」

「お見舞いにきたのなら生憎ね。マナは今朝部屋へ戻ったわ。いつもと違い、シイナは上機嫌だった。

「マナはどこが悪かったんだ？ 疲労か？」

「それもあるわね。でも、それだけじゃないわ」

「？ ということだい？」

「女になったのよ」

「何？」

「本来なら、初潮を迎えてからしばらくは生殖能力はないの。身体がまだできあがっていないのでね。けれど、促進剤を使ってマナの女としての成長を速めたわ。検査の結果、マナは完全な女性よ。生殖能力もユカと変わらない。私の役目も終わりよ。これからはマナがあなたの正式な相手になるわ」

瞳を輝かせ、子供のようにシイナは語る。

フジオミは苦痛を堪えるようにそれを見ていた。理解はしていた。それでも、心がついていかない。

彼女は自分を愛していない。

彼女は、誰も愛せない。

わかっていながら、それでも愛した。今、痛みを残すだけの事実をいやというほど思い知らされながら、まだフジオミはシイナを愛している自分を知っていた。

「シイナ。それが君の望みか――」

「ええ。そうよ。私はこの時をずっと待っていたのよ。

まだ、私達は救われる。

あなたとマナが、救うのよ」

フジオミが部屋へ入ると、マナはベッドに腰掛けたまま、空をじっと見据えていた。

「やあ、マナ」

「――」

ゆっくりとフジオミはマナへと近づいた。二人の視線が絡み合う。「僕がここへ来たことの意味を、もう君はわかっているだろう？」

マナは答えない。フジオミの手が、マナの頬に触れる。マナは抗わなかった。

今これから、抱こうとしている少女を前にしても、フジオミは平静だった。実際に行動すれば何か感じるものがあるかもしれないとかすかに期待していたのだが、それも裏切られたようだ。

フジオミはなげやりな態度で、マナに唇を重ねようとした。

「フジオミは、あたしを好き？」

唇が触れる寸前に、そう問われ、フジオミは身体を引いた。突然のマナの問いに、一瞬戸惑いはしたものの、微笑って答える。

「ああ、好きだよ」

「愛してるの？」

鋭い口調。

「マナ――？」

真っすぐに見据えるマナに対して、フジオミは奇妙な違和感を覚えた。マナであって、マナではないような、そんな違和感を。

「答えて、フジオミ。あたしを愛してる？」

真摯な眼差し。偽りを容易く見抜いてしまいそうなほどに。

偽るつもりも、フジオミにはなかったのだが、こうも率直に問われようとは思っていなかった。

「――いいや。好きだが、それは愛じゃない。僕は君を愛していな

い」

穏やかな口調で、表情も変えずにフジオミは言う。

「それでも、あたしを抱くの？」

「愛しているから抱くんじやない。これは義務だ。愛情で成り立つ行為なんて、もう存在しないよ。そもそも、愛情なんて、僕等の中にはありはしないんだから」

フジオミは穏やかな言葉の奥で、何かが荒れずさんでいくのを止められなかった。

不毛な会話と、意味のない義務感が、精神を磨耗していく。

フジオミは全てに疲れていた。もう何もかもが意味しないような、そんなふうに。

だが、目の前にいる、この少女は何なのだろう。

自分と同じ人形でありながら、その瞳の、なんと若々しい力に満ち溢れていることが。

そしてさらに、少女はその力で、残酷な真実で、フジオミに堪え難い苦痛を刻みつける。

「違うわ。愛しているから抱くのよ。心も身体も、愛しているから欲しいんだもの。フジオミは、博士を好きだから抱くのよ。子供をつくれなくても、博士が好きだから抱きたいと思うのよ。あたしを抱いても、それは博士の代わりなんだわ。フジオミはいつだって、博士のことしか考えてなかったじゃない」

「そんな話をしにきたんじゃないんだよ……」

反射的に、フジオミは叫んでいた。だが、すぐに我を忘れ取り乱した自分を恥じた。

「すまない——」

マナは怯まずにじっとフジオミを見据えていた。強い意志を宿した瞳を、していた。

「フジオミは、本当はどうしたいの？ 博士を好きだから、博士の望みをかなえてあげるの？ あたしを愛してもいないのに？ そんなの、間違ってるわ」

フジオミは驚いたようにマナを凝視した。

ここにいるのは、出会った頃の何も知らない愛くるしいだけの少女ではなかった。

それまで残っていたあどけなさも、今はもうどこにも見られない。シイナの投与した薬物は、マナの身体のみならず、精神までも変化させたのだろうか。それとも――

「君を変えたのは、ユウか……」

一瞬、マナが息をのむのがわかった。

堰を切るように、見る間に瞳に涙が溢れた。

「ユウ――そう、彼を愛してる。誰よりも、愛してる。想うだけで涙が出るほど。」

彼があたしに教えてくれたの。全ての意味を、彼が教えてくれた。理屈ではない言葉を。

偽りではない心を。

義務ではない愛情を。

愛情がないから、欲しないのよ。欲しないから愛せないの。

欲望は、何かを強く愛することだもの。それがないから、希望も未来も閉ざされたのよ」

「――」

「あたしは何も知らなかった。だから、気づけなかった。ずっと信じていたのよ。あなたと博士は何でも知っていて、何でもできる、

大人 なんだって」

マナは小さく微笑った。涙が頬からこぼれ落ちた。

「でも、そんなのみんな嘘。」

あなたたちは子供のままなんだわ。

何も考える必要もなく、生きるための何の苦労もない。だから、今を生きることの意味を考えられない。だから、生き続けることにしか執着できない。そうやって何かを犠牲にして踏み躪ってきたの

よ。

人の痛みをわかれなのに、自分のことだけは正当化できるの。そんな人間が大人のはずがないわ。

あなたたちは永遠に子供のままなの。この閉鎖された空間の中でしか生きられない、可哀相な子供なのよ!!」

フジオミはひどく腹立たしい思いで聞いていた。だがそれは、マナの言葉が全て真実であるのをわかっているからだ。

マナは正しい。

おかしいのは、狂っているのは、自分達の方なのだ。

自虐的な思考に傾いていくのを、フジオミは敢えて止めなかった。そう感じる事など初めてではない。今まで、幾度となく味わってきたことだ。

だが、それがどうしたというのだ。

今更それ突き詰めて何になる。マナだと知らないだろう。シイナの絶望を。

意味のないこと。何も残せないこと。そうであるはずだった自分に、なれなかったこと。

それ故の絶望をマナには理解できまい。彼女は、全てを持っていたからだ。

だが、シイナには何もない。

そして、彼女から全てを奪ったのが、他ならぬ自分だということも、今のフジオミは、痛いほどにわかっているのだ。けれども、その事実を、マナに非難してほしくはなかった。

「――全てわかったような顔をするのはやめてくれ」

何もないからこそ求め続ける痛みを、決して理解することもできないのに。

「君がユウを愛していても、彼には生殖能力はない。しかも君とユウは親子だ。決して結ばれてはいけない。近親相姦は、人類にとって最も許されない行為だ。獣にも劣る。それが現実だ。」

君は君であるけれど、責任がある。義務がある。僕と同じように。

愛情だけで、責任を放棄できるのか。僕と君に、人類の未来がかかっていても」

「――」

「ユウは死んだんだ。あの爆発では、どうあっても助からない。きみに残された選択は一つだ」

それ以上の言葉を封じて、フジオミはマナを引き寄せると強引にくちづけた。そして、そのままベッドに倒れこんだ。

苦しかった。

愛していない女を抱くことが、こんなに苦痛だとは、フジオミは知らなかった。そんなことにさえ気づかないほど、以前の自分は幸せだったのかと、改めて思い知る。

もしも、シイナが完全な女性であつたならば、マナを待たずに自分を愛してくれたのだろうか。

そんなくだらない仮定が頭の中に浮かんた。

「――」

マナを組み敷いたまま、フジオミは動かなかった。動けなかったシイナを思うことでマナを抱こうとしたけれど、それが逆に、より一層マナとシイナは違つのだと認識させた。

抱けない。

フジオミは唇をきつく噛んだ。

シイナ以外、自分は誰も欲しくない。

マナもまた動かなかった。ただ身体を強ばらせたまま、顔を背けていた。フジオミはそんなマナを見て、いっそうシイナを想った。

「――そんなに、ユウが好きか」

それは自分への問いと同じだった。

きつく目を閉じて、マナは頷く。

「ユウでなければ駄目か」

マナは両手で顔を覆って、声を殺して泣き続けた。フジオミは黙

ってそれを見ていた。

マナと自分は同じだ。

互いに、愛してはならないものを愛した。

愛さなければならぬはずのものを愛せなかった。

「——僕等はどうして、こんなふうになれなければならなかったんだろう」

吐息のような溜め息の後、フジオミは言った。

マナはそつと目を開け、フジオミを見上げた。

「本来なら、僕等はずっと自由に、もっと楽に、生きられるはずだった。」

いつから狂ってしまったんだろう。

どこからおかしくなったんだろう。

僕等はずっと優しく、誰かを愛せるはずだった——」

ゆっくりと、フジオミはマナから離れた。

「彼は、生きているかもしれない」

呟くような言葉。

「フジオミ？」

「あの後、廃墟を搜索させたが、彼の遺体はかけらも見つからなかった。僕にわかるのはここまでだ。信じるのも信じないのも、君の自由だ」

そして歩きだす。

「フジオミ、生き続けることに、何の意味があるの？」

背中に届くかすかな声に、フジオミは肩を竦めた。

部屋を出ていく彼の呟きは、ひどく虚ろに響いた。

「さあね。もしかしたらそんなものはないのかもしれない。

だって、僕等が滅んでも世界は終わらない。

きつと僕等がいなくなつた後でも、世界は変わらずに美しいまま

存在し続けるだろう。

あるのは、僕等だけの終わりだ。ただ、それだけだ」

シイナは研究室の備え付けの小部屋でコーヒーをいれていた。その横顔を、フジオミはじっと見ていた。

「――」

シイナは美しかった。だがそれは、全てを排除する美しさだった。他を受け入れない孤高の、それこそがシイナ自身を表すもの。フジオミはしばらく彼女を見つめて、それから中に入った。

「フジオミ!？」

彼に気づいたシイナが立ち上がる。

「やあ」

「こんな時間に、こんなところで何をしているの!」

「答える前に、コーヒーをごちそうしてもらいたいんだがね」

部屋に漂うコーヒーの香り。シイナは少し戸惑ったようだが、結局フジオミを迎え入れた。

「ブラックでいいわね」

「ああ」

シイナはメーカーを作動させた。ほどなくしてコーヒーの香りが一層濃く部屋に漂う。

黙って手渡されるカップに、フジオミも黙って手を伸ばす。

「――こんな時間まで、君は何をしていたんだい?」

「ああ。先月第一ドームで起きた事故の記録を見ていたのよ、あなたの方が詳しいんじゃない?」

「あの、配水管の故障かい?」

「ええ。最初の報告書にはドームを通る配水管の故障としかなかったけれど、原因の究明にかなりの時間がかかって、被害が大きくなったのよ。実際は動力炉の異常過熱による負荷が原因だそうよ。起こってしまったものは仕方がないけれど、こんな簡単な報告書でミ

スを隠そうなんて馬鹿らしくて。もう少しましな言い訳のできる者がいないものかしらね。これだから無能な者に管理を任せられないというのよ」

溜め息をつくシイナを、フジオミはじつと見つめていた。

不用意な言葉さえ口にしなければ、彼女を怒らせたりはしないのだ。

こうして見ていられるだけで穏やかな気持ちになれることも、フジオミは初めて知った。

「何を見ているの、フジオミ？」

問われて、我に返る。

「ああ。仕事となると、君はまるで人が変わったようだと思って」

「あなたにはおかしいでしょうね。でも、これが私の役目ですもの」

「いや。君はたいしたものだよ。ここを仕切っているのは実際君なんだし、君の決定がなければ僕を含めた他の人間は、何一つ満足に決められはしないだろう。君がここまで、僕等を導いてきたんだ」

「フジオミ——？」

「本当に、君はすばらしい女だ」

真っすぐに見つめる眼差しに、シイナは珍しくも狼狽えるそぶりを見せた。今までのフジオミとは違う——そう感じているのが表情でわかった。自分でも驚くほどだ。

「フジオミ、あなた——」

だが、シイナが問いかけるより先に、フジオミは席を立った。

「もう行くよ。邪魔をしたね」

「あなた、ただコーヒーを飲みに来たの!？」

「いいや。ただ、君の顔を見るに」

その言葉さえ、普段のフジオミならば皮肉げに響いたことだろう。だが、今シイナが聞いたのは、偽りのない真摯な告白だった。

「待つて、フジオミ」

部屋を去りかける彼を、シイナは呼び止めた。フジオミが振り返る。

「あなた、マナの所へ行つた帰りだったんでしょう。どうだったの」「何も」

シイナの表情が訝しげなものに変わる。

「どういうこと？」

「何もなかった。マナとは、セックスしなかったのさ」

「どうして!!」

「そんな気に、なれなかった。僕等は互いを愛してない。マナはユウを愛してる」

「恐ろしいこと言わないで。マナとユウは親子よ!？」

「だが、事実だ」

真つすぐに見つめるフジオミの瞳に、シイナはその言葉が真実であると悟った。

「なんてことなの。フジオミ、あなた、一体何をしていたの!？」

一緒にいた間に、ただ黙つてそれを見ていたの!？」

怒りを露にして自分を見上げているシイナに、フジオミは深い吐息をついて答えた。

「君がどう言おうと構わないが、僕も努力はしたつもりだ。君の言うように、僕にも義務と責任がある。

だが、止められなかった。誰にも恋する気持ちは止められないよ、シイナ。どんなに強い義務をもつてしてもね」

「——なんてことなの」

「まわりがどう騒いでも、マナは僕を拒み続けるだろう。君はユウとマナが親子だと言うが、それは違う。彼等は全く違う、一個の存在だ。マナは確かにユカのクローンだが、ユカじゃない。ユカの記憶さえない。彼等の間に、親子の関係は存在しないんだ。

これまでずっと、そんなものは僕等にだって存在しなかったじゃないか。なのにどうして、血が繋がっているというだけで、遺伝子がそうであるからといって、縛られなければならないんだ。

シイナ、彼等の間に子供は生まれえないんだ。なら、一緒にいたっていいだろう?」

シイナはフジオミの言葉を聞きながら、頭の中では全く別のことを考えていた。

彼女にとってはそんな詭弁はいつでもよかった。
必要なのは事実だけ。

狂いが生じた計画を、どうやって軌道に戻すか、そのみだった。
「いいわ。私からマナに話すわ。それでも駄目だというのなら、仕方がないわ。マナには人工受精を受けてもらう。その方が確実だわ」
独り言のように呟く。

「シイナ!」

「わけのわからない話はもういいわ。ユウは死んだのよ、あなただつて見たんでしょ？」

今更二人の話なんてどうでもいいじゃないの。マナは私が説得する。昔からあの子は聞き分けのいい子だったもの。私の言うことなら聞くわ。もう、あなたには頼まない」

それだけ言うと、シイナはもうこの会話に興味を失くしたようにフジオミを見上げた。

「もう用はないはずよ。出ていって」

「いやだと言ったら？」

「——私が出ていくわ」

乱暴に言い捨ててフジオミの脇を通りすぎようとするシイナを、彼は腕をつかんでひきとめた。

「こんなことをして、何になるんだ？」

「フジオミ、痛いわ、放して」

「君にはわからないのか。わかれないのか。君の絶望は、そんなにも深いのか。僕では、救いになれないほど——」

シイナはいつにないフジオミの苦しげな眼差しに怯えたように身を強ばらせた。

「何を言っているの——」

「気づかないでも思っていたのか。君はマナに、自分を重ねているんだ。自分がないものを、マナは全て持っているから。」

そうであるはずだった自分を、マナに求めるのはよせ。あの子は、君の思うとおり動く人形じゃない。マナはもう、君にはなれない――

強引に、シイナはフジオミの手を自分から振り払った。

「あなたの言っていることは、わけがわからない」

「なら、わかるように言おう。未来のためなんかじゃない。人類のためでもない。君は、君の望みためにマナを犠牲にしようとしているんだ。君以外の誰も、望んではない。カタオ力でさえあきらめている。マナも、僕もだ。あと五十年もすれば、僕等は確実に滅びるんだ。こんなことが、一体何になるって言うんだ」

「やめなさいフジオミ――！」

絶叫に近い叫びに、フジオミは口をつぐんだ。

「――」
シイナは、傷ついたような眼差しをしていた。

フジオミの言葉の全てを否定していながら、それをどこかで事実として受け入れてしまったような、そんな瞳を。

「……すまない」

「――あなたに、謝ってもらう必要なんか、ないわ」

シイナはそのまま踵を返し、走り去った。

フジオミは黙ってそれを見ていた。

いつも、彼女はフジオミから逃げていく。

そうして自分はおいかけることもできずに、ただ見送るだけ。

いつから二人は、こんなにも隔たってしまったのだろうか。

ずっと一緒に育ってきた。

あんなにも傍にいたのに、どうして今自分達は一人でいるのだろう。

「――」

フジオミは背中を壁に預け、自分を抱くように支えた。そうでな

ければ、もう立ってられない。

彼女が欲しかった。

こんなにも、苦しいほどに、彼女だけを求めている。
身体ではなく、心が。

「シイナ……」

これ以上進めないほどに廊下を走り、シイナは呼吸も荒く壁に手をついた。

息を整えようにも、乱れた感情が邪魔をする。

心臓が痛むのは走ったせいばかりではなかった。

フジオミに対する怒りが、これ以上ないというほどこの感情を支配する。

よりにもよって、あの彼が、カタオカと同じように愛を口にしたのだ。

「愛、ですって？ 馬鹿馬鹿しい」

痛む胸を押さえ、絞りだすように言葉をもらす。

うんざりだった。

どいつもこいつも、今更のように愛という言葉振りかざす。

愛に何の価値がある。何の意味がある。

愛情で、世界は救えない。滅びゆく人間を救えるのは、愛ではない。
い。

それがなぜ、誰にもわからないのだ。わかってほしいのだ。

「——っ——」

シイナは拳を、壁に振り下ろした。何度も何度も。怒りはすでに限界に達していた。

救う気がないのなら、死んでしまえばいいのだ、誰も彼も。

努力もせずにもういいなどというのなら、邪魔をするな。

くだらない言い訳などいらぬ。弁解など、欲しくない。

滅びを運命というのなら、あらがってみせればいい。

救う術があるのに、なぜ行使しない。

なぜあきらめる。

あきらめるのなら、いつそもつと早く、あきらめてくれればよかったのだ。

それこそ、自分が生まれる前に。

この世界を、こんなにも呪う前に――

「――いいえ。そんなことは、もうどうでもいい。どうでもいいのよ」

シイナは何度も頭を振り、自分の内に溢れる怒りや絶望を追い払おうとした。

嘆くよりもすることがあるはずだ。

自分を憐れんで、それで何が残る。

「大丈夫よ。あの子は私を裏切ったりしない。あの子は素直ないい子だもの。今までだって、私の言うことはよく聞いた。何も心配はないわ。あの子は自分の義務をよくわかっている。今は少し混乱しているんだわ。あまりにひどい環境で、不自由な生活を強いられたんだもの。ここで暮らせば、また元通りのマナに戻るはずよ」

マナがユウを気にかけるのは、たぶん彼女の内にある母性本能の名残に過ぎない。

一緒に暮らしたのだ。多少の情は移るだろう。

だが、それだけだ。そもそも、異性に対する愛情など、マナに育つはずがない。

フジオミの大げさな言いように自分でも思わぬほど動揺したことを、シイナは今更ながら馬鹿らしく思った。

「――」

大きく吐息をついて、シイナは天井を仰いだ。和らかな明かりも、今は自分には邪魔だった。腕で光を遮り、シイナはただマナを思った。

マナ。自分が育てた、大切な少女。

彼女は唯一の希望だ。

人類を滅びから救う、たった一人の女性体。

「マナ、私のマナ。救ってちょうだい。私達を。それ以外何も、望まないから……」

シイナは祈るように呟いた。

「フジオミ、一体どうしたんだね。こんな時間に。

顔色が悪い——早く中に入りたまえ」

低く響く優しい声に、フジオミは無言のまま従った。

明け方近く、最後に彼が訪れたのは、カタオカの自室であった。

おそらくは一睡もしていないのであろう。力なく椅子に座り込んだまま、両手で顔を覆ったフジオミを、カタオカはじっと見つめていた。

そして、幾分察してためらいがちに声をかけた。

「シイナか。彼女と何かあったんだな」

「愛しているんです。僕は、彼女を愛してる——気づかなければよかった、こんな想いに——」

返ってきたのは、悲鳴にも似た、苦しげな叫びだった。

肩を震わせ、声を殺して泣くフジオミは、以前とはすっかり変わっていた。

そして、憐れだった。

「——」

カタオカは、フジオミがシイナに特別な想いを抱いていることに気づいていた。

だが、フジオミ自身がそうと気づくのを、望んではいなかった。

シイナが胸の内に抱えているこの世界への嫌悪を、十分に理解していたからだ。

彼女は何も愛せない。

それどころか、全てを憎んでいる。

そんな人間を愛して、幸せな結末が待っているとは思えなかった。現にフジオミはこんなにはろぼろになって自分のところへ来たではないか。

「マナを愛することは、できないのだろうか……」

「できません」

即答に、カタオカは大きく吐息をついた。

フジオミの言葉には、強い意志が感じられた。

シイナが持っているものとよく似た、強く、それ故に激しい、一途な想い。

そんな感情を内に持つというのはどんなものなのだろうと、カタオカは自問した。

自分が持たなかったものを、どうして、どうやって、彼等は抱えているのだろうか。

「なぜなのだろうな。私にはその強い想いがなかった。

シイナは私が愛を持たないと言ったよ。誰かを愛せるのなら、あんなにも無慈悲な態度はとれなかったと、彼女は言いたかったんだな」

愛を知っているのなら、愛してもいない人間を抱く苦痛も、抱かれる苦痛も、理解できるはずだと。

だが、彼女は何も言わなかった。

一度信頼を裏切った人間がそれ以上何を言うのかと、あの時、その背中ではカタオカを拒否した。

そして、カタオカも決定をくだした後で知った。シイナという女が、誇り高く、それ故に、受けた屈辱を決して忘れることはないのだということ。

カタオカは、自分を慕ってくれる娘同然の子供を、その時失ったのだ。

「だが、愛しているのだよ。フジオミ、君を、そしてシイナを。私は確かに間違いを犯したが、それでも、君達を愛していたんだ」

親が子を見守る如く。穏やかに、優しい感情で。

理解してもらえる時は、来なかったけれども。

「幸せになりなさい、フジオミ。君がこの世界の中でも幸せになれる方法は、きっと見つかる。それを探すんだ」

「だが、僕はマナを愛せない。シイナ以外、愛せないんです。そして、マナもユウ以外を愛せない。それでは、シイナは幸せになれない」

こんな状況であっても、フジオミはまだ自分よりもシイナのことを考えていた。常に己れのこののみを考え続けていた彼が。

本来、愛とはそういうものであったのかもしれないと、カタオカは思った。

己れのではなく、相手の幸せになるべき道を探し、それによって自身の幸福をも見いだす。

そんな愛が、かつては確かに存在していたのかもしれない。

こんな世界でなければ、きっとシイナも、フジオミも、マナも、ユウも 全ての人間が、もっと幸せであっただろう。

ありえないはずの世界を束の間思い描いて、カタオカは力なく頭を振った。

「では、私にはもう、何も言う資格はない。フジオミ、君が決めたまえ。君の決定に、私も従うよ。それが例え、シイナの計画に反することでもね」

「カタオカ——」

「もう、終わってもいいんだよ。自由になりなさい。終わることが決まった世界に義理立てすることは、もうないんだ。彼女も、それをわかってくれればいいのだが」

カタオカはスクリーンの中の濃い闇が、やがて穏やかな光を増していくのに気づいた。

朝が来る。

何が起ころうとも、世界に変わりはない。

等しく、誰の上にも朝は来るのだ。

「さあ。少し休みなさい。君は疲れている。私のベッドを使うといい」

「ですが、あなたは――」

「私は少し仕事を片づけるよ。行って休みなさい」

促されて、フジオミは素直に従った。

隣の部屋へフジオミが消えると、カタオカはゆっくりと椅子に腰掛けた。

徐々に明るくなる部屋に、もはや明かりはいらなかった。

夜明けの光は優しく室内を満たしていった。

「――」

カタオカは眼を閉じてしばらく動かない。ただじっと、そうしていた。

これで完全に、未来は断たれたのだと、彼は悟った。

何が起ころうとも、フジオミとマナは結ばれることはない。

彼等の間には、互いに寄せる愛情がないのだから。

どんなにすぐれた科学と技術をもつてしても、人間の心を説き明かすことはできなかった。

その一番不確かな、すでに失われてしまったと思っていたものが、最後の未来を決定づけたのだ。

何ということだろう。

未来のために感情を切り捨ててきた人間が、それ故に滅びを迎えるなどとは。

それは、深い虚無感としてカタオカの内部に組み込まれた。

なぜこんなにも、虚しさばかりが広がっていくのか。

自分には何かを強く愛することはできないのに。

それは、もう失われた感情であるのに。

強い愛情を向けるべきものは、この手に抱くことなく、この世界に生まれでることなく去った。

そしてカタオカも、自覚することなくその感情を失った。

持てるかもしれなかった子供。

もしかしたら、シイナでも誰でもなく自分こそが、一番に新しい命を望んでいたのかもしれないと、カタオ力は漠然と感じた。

永遠に抱くことのなかった、自らの子供の代わりに。

マナがここへ戻ってから、すでに二週間が経っていた。

シイナはフジオミに言ったとおり、マナの懐柔に努めていた。決して無理強いはず、以前と同じように宥めるように説得を繰り返す。

「ねえ、博士。何度も言ったわよね。あたし、ユウが好きなのよ」

「ええ。それはわかるわ。でも、それは問題ではないのよ」

「博士、聞いて——」

「ああ。マナ、いい子だから、落ち着いて考えてみてちょうだい。

あなたには大切な使命があるのよ。あなたにしか、できないことなのよ。無理強いはいたくないの。あなたはいい子だもの。きつともう少ししたら私の言っていることがわかるはずよ」

そう言ってシイナは部屋を出ていった。

「ユウ……」

マナは泣きそうになるのを必死で堪えた。

シイナはマナの話を決して真剣に聞いてくれようとはしなかった。子供を宥めるように教え諭すだけだ。マナが何を言っても取り扱ってくれることもない。

マナは失望した。

思ったとおりに、ここでマナと真剣に話をしてくれる者などいない。自分はこの中で飼われる動物のようだと、マナは思った。

シイナには、危険だからと許可してもらえなかったけれど、せめて外に出たかった。

風が吹く、土の上に立ちたかった。

ここは息がつまる。

止まった時間の中でゆっくりと生きているように、全てが緩慢で、味気ない。

ユウが来る前に、このままでは自分のほうがおかしくなつて死んでしまうような気さえ、していた。そして、何よりマナは恐れていた。失望が憎しみに変わることを。

かつてユウがシイナを憎んだように、自分の想いが憎しみに変わることはだけは、いやだった。愛したものを憎むのは、つらいことだ。その愛が強ければなおさらに。

シイナを、ユウを、愛している。

だからこそ、愛し続けていたかった。

「ユウ　いつまで、あなたのこと待てばいいの…早く来て…」

何度も、ユウが迎えにきてくれる夢を見たけれど、目が覚めて虚しい現実に戻されれば、いつも哀しくて泣いてしまう。

いつ来るかわからないものを待つのは、苦痛だった。

このまま、彼が迎えにくるのを待っているだけでいいのだろうか——そう、考えてしまう。何もせずに、ただ待っていてもいいものなのかと。

考えすぎて、嫌な結論を導きだしてしまいそうになるのも一度ではない。

迎えに來ないユウ。

それは來ないのではなく、來れないのだと。

あの爆発に巻き込まれ、もはや生きてはいないのではないかと。いつそ死んでしまおうか。そう考えたこともあった。

簡単だ。

ユウがいない世界に何の意味がある。

あの声を聞けないのなら、あの微笑みが向けられないのなら、自分を抱く強い腕がないのなら、生きることはもはや死に等しい。

そう思いながらも、自分が踏み切れないのは、心のどこかで、ユウの死を否定しているからだ。

ユウが自分を一人残して死ぬはずがない。

約束したのだ。

ここを離れて、海の方この見知らぬ世界へ行こうと。

少しの可能性でも在るのなら、全てを否定することはできない。

決して。自分以外の全ての人間がそうしても。

「――」

そうだ。他人の言うことなど、なぜ信じられる。

老人も言ったではないか。

人の言葉を信じるよりまず先に、それが真実であるかどうか自分が確かめろと。

自分の目で、確かめるのだ。

ユウの死体を見るまでは決して信じない。

もし自分達がすれ違ったとしても、彼はきっと見つけてくれるはずだ。シイナ達よりも早く。

「行くわ、ユウ、あなたの所へ」

マナは迅速に行動を起こした。コンピュータにアクセスし、地図を呼び出す。

だが、地図を見てがっかりした。ここからあの廃墟までは相当の距離がある。ヘリではどのくらいの時間でどのくらいの距離を飛んだのかも、マナにはわからない。

こんなことなら、よく見ておけばよかった。気を失っている暇などなかったのに。本当に、自分には知らないことが多すぎる。

さらにコンピュータにアクセスし、近辺の地形、環境のデータを引き出す。

徒歩で行くならマナの足ではまず無理だ。

しかし、徒歩は無理だが、ドームには移動に使うジープがあるはずだ。廃墟まで来たクローン達は、シイナと違って陸を移動したは

ずだ。ならば、車で廃墟まで行くことは可能はずだ。運転は、教われればいい。これから。

マナは引き出したデータの中から必要なものだけをプリントアウトした。

誰も信じられない。

一人でやらなければ。

その日マナが言い出した『お願い』に、シイナは案の定、不可解そうに問うてきた。

「ジープの運転を教わりたい？」

「ええ。博士」

「どうしたっていうの、マナ？ 急にそんなことをいいだすなんてシイナの反応は予測済みだった。後はいかに自分がうまく隠せるかだった。

「だって、博士。ここでは何もすることがないんだもの。あたし、退屈で死にそうなのよ。身体を動かしたいのよ。外に出れないのなら、変わったことがしてみたいの。大丈夫よ。倉庫からは出ないから。」

あたし考えたの。気分を変えなきゃって。そうすれば、ユウのこと忘れて、フジオミのこと考えられるかもしれないわ。だって、あれはもう過ぎたことだもの。ユウは死んだんだもの。そうでしょ、博士？」

無邪気で愚かな少女の振りをする。

それが、シイナを騙す唯一の手段だ。

フジオミと違って、シイナはマナの変容を知らない。もとより、彼女の固定観念からは、マナは以前どおりの何も知らない人形のよいうな少女を脱しない。彼女の日々のマナに対する接し方で、それはもう明らかだった。

「気分転換をしたいのね」

「そう。だって、もうデイスクだけの学習なんて飽きちゃったわ。もっと面白いことがしたいの」

「——わかったわ。その代わり、危険なことはしないこと。約束できる？」

「ええ、できるわ。ありがとう、博士」

マナは、シイナに抱きついた。あくまで以前の自分と同じように振る舞った。それはマナ自身にとっては気持ちのいいものではなかったが。

以前の自分は、本当にシイナの言うがままのお人形のようなうして、疑問にも思わなかったのだろう。

「じゃあ、気分転換は明日から。今日はもう部屋へ戻りなさい。十時には迎えをやるわ」

「はあい。約束よ、博士。ああ、今から楽しみ」

マナはパツとシイナから離れて部屋へとかけていく。

「マナ、そんなに急ぐと転ぶわ」

背後からかかる声に振り返ると、マナはにつこり笑って手を振った。

シイナも笑って手を振り返す。その表情からは疑いは微塵も感じられない。マナは表情には出さなかったが、それを哀しく思った。

シイナとは、わかりあえないのだ。例えばどんなに言葉を重ねてもだからこそ、嘘だけを重ねて、自分はここを出ていかなければならないのだ。

こんなにも大事に思っているのに、こんなにも大事にされているのに、どうしても心はこんなにも隔たっているのだろう。

それはとても哀しいことだと、胸が痛んだ。

さらに次の日、マナは今度は自分を迎えに来たクローンに、シイナとは違う『お願い』をした。

「私が指示されたのは、あなたに運転の仕方を教えることだけです

が」

声音に変化はないが、かすかに訝しげな表情で男は問い返す。

「ええ。でも、あなたはそれ以外のことも知ってるんですよ。それを全部教えてほしいのよ。例えば、これが故障したときは、どうすればいいのかとか、そういうことを」

「ですが、それは博士の意志に反します。我々クローンは博士の指示に逆らうことは許されません」

「博士には黙っていていいのよ。でなければ、あたしがあなたを処分するわよ。それがいやなら、さあ、教えて」

穏やかな脅迫だった。

彼等クローンには、人間に逆らうことは許されていない。

触れなくても、マナには目の前の男の怯えが伝わった。

罪悪感に、胸が痛む。

処分。

同じ命に対して、そのような傲慢な態度にでる権利を有する『人間』に、強い嫌悪を覚えた。

「——ねえ。あたしたちがここで何をしているかなんて、いちいち全部報告する義務はないんですよ。あたしたちはただ余計なことさえ言わなきゃいいのよ。ばれやしないわ。そうでしょ？」

「……それは、そうですが」

「じゃあ、教えて。あたし、どうしても知りたいの。お願いよ」

真摯な眼差しで見上げるマナに、男は小さく溜息をついた。

「わかりました。では、始めましょう——」

マナはこの一週間、学ぶべきことを全て完璧に学んだ。マニュアルを全て読みこなし、ここから北へと向かう走行可能な場所、タイ

ヤの交換の仕方、エンジンの故障への対応、バッテリーの点検など、考えられる非常事態にできうるあらゆる対処法を教わった。

「これで、私が教えられることはもう何もありません」

「ありがとう。あなたは立派な先生だったわ。ごめんなさい。無理を言つて。それに、一番最初にひどいことも言つたわ。本当にごめんなさい」

マナを教えた男は、訝しげな表情でマナを見ていた。

「何故、私などに謝るのですか？ クローンに謝罪はいりません」

その言葉に、今度はマナが訝しげに顔を上げた。

「あたしはあなたに悪いことをしたわ。悪いことをしたら謝るのは当たり前でしょう？」

クローンも人間も、関係ないわ」

「あなたは、博士が恐ろしくないのでですか。私達にはとてもできないことです。彼女の意志に逆らうなど」

問うてから、差し出がましい振る舞いをしたかというように狼狽えた男に、マナは何でもないというように微笑った。

「ねえ。あたしを見て。どう思う？ 人間に見える？ それとも、クローンに見える？」

「――」

いきなりの問いに、なんと答えるべきか、男は迷っていた。

「構わないわ。公然の秘密なんでしょう。あたしもあなた達と同じ。だとしたら、あたしに命令される権利はないってことよ」

「ですが、あなたは選ばれた存在です」

「いいえ。同じ人間だわ、みんな。例え産まれがどうであれ。あたし達はみな平等に、この世界に命を持って生まれたの。生きることには差はないわ。命に、差があるはずない。あたしは、そう信じてる」

真つすぐに、マナは男の瞳を見返した。

「そんなことを言つたのも、あなたが初めてです」

こんなふうに話す相手に真つすぐに見つめられたことのなかった彼は、驚きと感嘆とともに、マナを見つめ返した。

「私には何もできませんが、せめて、あなたの望みが叶うことを、お祈りします」

祈るという言葉に、マナは驚いた。

ここでそんな言葉を使うものは誰もいないと思っていたからだ。もう何度も見えて覚えたはずのネームプレートをもう一度確かめる。「神様に？」

嬉しそうなマナの問いに、男は笑みを返した。それは、とても人間らしい、豊かな微笑みだった。

「ええ。あなたが信じる神に」

コウ＝サワダ。ここで唯一まともに、自分と話してくれた人だ。忘れないでおこう。

「ありがとう。コウ。あなたが幸せであるように、あたしも祈ってる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9709z/>

ETERNAL CHILDREN ～永遠の子供達～

2012年1月11日02時46分発行